

# “吾が思ひ出の記”

加藤 清吉

## はしがき

永年の念願が達成されたのを喜ぶ心で一杯である。

私の生ひ立ちより今日迄歩いて来た道は主觀的に見て長い時間であつた、忘れてしまつた事、思ひ出せない事どもが多い、客觀的には悠久の宇宙に比して瞬時に過ぎない。

同時に私の踏んで来た足跡は果しなくひろがる大空に瞬く星の運行にも似た些々たる業であつた。唯々明治、大正、昭和の三つの聖代を、自己の信ずる道一筋に突き進んで来た越し方を顧り見て無量の感を思ふのみである。

此處に“思ひ出の記”をものする所以のものは今迄經驗し來つた

人生行路難の諸相を赤裸々に記述して、子女に教へ私の店に勤務する“これから”の店員諸君に對して他山の石としたいからである。たゞだそれだけである。

昭和十二年盛夏

加藤清吉

## 目次

はしがき	一
父祖の業	一
幼年時代	五
春は父の背に乗って	五
オカツパと小遣錢	八
列をなして電柱に耳を當る	九
四季行樂の情景	十一
排外思想とキリスト教	十三
濃尾大地震と著者	十四
學業の事	十六

## 少年時代

十七

木材界に身を處するの第一歩

十七

丁稚時代の務め

十八

丁稚時代の古事

二十一

元服の儀式

二十五

問屋業に就いて

二十六

初旅の事

二十八

實母の死

三〇

徴兵適齡・父の長逝・召集令狀

三一

## 日露の役と出征

三七

## 青年時代

四二

再び濱木屋に入りて

四二

困難なりし登山

四四

## 濱木屋合資組織となる

五一

主人の急逝

五一

東北材に着目

五七

再び美濃飛驒材に従事・渡鮮渡滿の事

六一

## 加藤式伐出法

六四

川狩の状況を眺めて世人は一驚

六七

## 壯年時代

六八

濱木屋株式組織となる

六八

九州各地の山林伐出積極進出

七七

積極的改革と北海道樺太材に着目

八一

木曾其他各地に伐木陣を張る

八三

未曾有の材界狂熱時代來る

八五

反動時代の襲來

八八

中丸太の處分に苦心・製板開始	九一
北海エゾ製板中興の時	九三
大臺ヶ原山立木伐出計畫	九四
米材輸入に着目巨利を搏す	九五
ロバートダラー 一手販賣披露宴	九六
大病の事・死を恐れぬ大覺悟	九八
北洋材組合の創立	一〇〇
不便な時こそ巨利を搏する木材事業	一〇二
關東大震災と積極的活躍	一〇三
關東大震災と名古屋市場の影響	一〇四
震災救護用材調達狀況	一〇八
關東大震災と濱木屋の成績	一一三
會社經營上の苦心	一二三
遂に濱木屋・大臺林業の重役辭任	一二五

## 井桁藤商店愈々創立

三井と提携 中丸太界に活躍	一二八
新築中の本宅竣工	一二九
事業は思はず不愉快な年	一二九
事實上の蹉跎難局に逢着	一三〇
東築地本店閉鎖・中店を本店に	一三二
南洋材を主に賢實主義に進む	一三三
組織の變更と南洋材界に活躍	一三七
ラワンベニヤ板の製作に着手	一三九
三井の監督から解放單獨營業	一四一
横堀支店と新堀川出張所新設	一四二
氣屯材の入札	一四三
南洋材によつて井桁藤の名高し	一四三
滿鮮に進出 落葉松を買ふ	一四四

ラワン製品の鮮滿臺灣進出	一四四
競争激湛利益減殺さる	一四五
北海雜木取扱と現地視察旅行	一四六
ベニヤ板保税工場 大江合板設立	一五一
井桁藤商店増資	一五二
公職關係に就いて	一五九
愛知縣ベニヤ板工業組合設立	一六一
結びの言葉	一七六
附録	
香港・中南支遊行記	一七七
卷後に題す	二〇一
編者	二〇一

## 吾が思ひ出の記

### 父祖の業

祖先は代々愛知縣西春日井郡清洲須町に住ひ農を業とした、のち曾祖父たる

加藤市兵衛の代となるや、文化の頃居を名古屋に移し古渡村に一戸を構へて農を營み屋號を井桁屋と稱した。それより再び七間町二丁目に轉宅し、明治六年八月二十八日八拾才を以て歿す、曾祖母は、きよう、と稱し明治七年十二月一日七十才で死去せり。

祖父は加藤半七と稱し七間町に生れ市兵衛の女婿であつたが、父祖の業を繼ぐを好まず演藝方面に多大の趣味を有し、九代目團十郎、西川流の始祖西川鯉三郎らと交遊旺んにして不識不知の裡に其趣味を助長するところ尠からず、興行界に雄飛せん事を企圖し、爲に家業を等閑に附し、其子忠平(著者の父)と意見の懸隔を生じ、兎角家庭の圓滿を欠きたるため別居を策し、本家を門前町に移して、子忠平のみ分家として七間町に居住した。

門前町に移り住むと共に、今の松竹座、當時の若宮末廣座を買收して、店員二十數名を

置き屋號を幕半と稱して大々的に衣裳屋を開業し、遠く江戸、京洛の地に舟又は駕を飛ばして往復し、東奔西走、名古屋を中心に三州吉田、岡崎、伊勢の贅崎（今の津）、岐阜等各地に於て九代目成田家、成駒家鷹次郎一家等に依つて歌舞伎興行を続け一時は非常な成功を遂げ、家運隆盛に向ひつゝありしに、好事魔多しの例に漏れず、明治十七年には米不作のため農村の疲弊著るしく、ために世は恐ろしき恐慌を來たし、不況のドン底を呈した、この難局に際會し、時偶々末廣座に於て九代目成田家を座頭に福助（今の歌右衛門）らをもつて興行させたところ大人の日は木戸錢十錢にして非常なる盛況を呈したるも二日三日と殆んど觀覽者少なく、遂に成田家はあまりの事に「二度と名古屋には來ネー」と江戸前の啖呵を残して駕によって東を向いて憤然と出立してしまつた、で四日目の興行は遂に幕を開くことが出来ない状態になつてしまつた、この興行には當時のお金として約八百圓程衣裳代がかけられてあり、従つて事業上に大きな蹉跌を來し、之れが動機となつて失敗、家運衰退の第一歩を踏み出すことゝなつた、で名古屋にも居づらくなつて、遂に意を決して九代目を頼つて上京したのである、それが明治十七年の事である。

【編者附記】明治十七年七月一日には現名古屋材木商同業組合の前身たる名古屋區材木商營業組合の認ト指令が下つてゐる、西區西柳町に西柳町青物市場が開設されたのが此の年であり、名古屋市立商業學校も此の年に設立されてゐる。著者三才の時である。

上京後成田家らの引立によつて淺草附近にて衣裳屋を開業して漸く成功の域に達せんとするや災禍に見舞はれ家財凡てを烏有に歸し去り、不遇の裡に淋しき不幸な一生を終つた。明治十九年九月十八日江戸にて歿す、半七の妻は早世、文久二年六月二十六日に死亡し、後妻として中島郡一宮町より中島てつ女を娶り同棲す、中島てつは東京に於て夫半七に死別して歸名し、古郷町に居住し終生亡夫の志を繼ぎ衣裳屋を續け大正二年十二月十四日八十一才を以て永眠す。

父加藤忠平、幼名を藤三郎と稱し、明治十七年に至り忠平と改む、生年安政四年五月一日、忠平は父半七と意見合はず本家が門前町に轉じてより分家して七間町に居残り、それより京町三丁目に移り、更らに明治十四年頃桑名町三丁目に轉じ、又更らに小田原町に轉宅せり、父の性格は短氣小心の方にて清水町方面に田地を買求め鋤を擔て百姓を爲すと共に小金を各方面に貸附（當時は銀行業發達せず各所に金貸業を非公式に營む人々ありたり）又は不動産の賣買及其傍ら裁縫を習得し妙を得て一般の認むる處となり當時本町四丁目に

堂々開業し居りたる大丸呉服店の專屬裁縫師となった、其後伊藤呉服店（松阪屋）より專屬店の交渉ありたるも小心短氣が障り、即ち氣儘の爲め折角の交渉も斷つた、又其の人と成りの一端を示せば趣味は将棋、笛等で将棋は仲々強く田舎初段位は指せたる由である、又年中早起の習慣ありて未明に起きて小林町在祖先の墓地へ參詣したり、東別院に參拜したり惑ひは枇杷島迄供花を買求めに行つたり實に一寸普通の人と掛離れた性格の持主であった、同時に政談演説、佛教演説等の聴取を格別好み家業を等閑に附する事などありて著者の幼時家庭で紛叫を聞いた記憶がある。父忠平には著者、清道、信行の三男と千代と云ふ一女並に後妻との間に一女とがあつた、兎も角父は一寸名人氣質と云ふ可なり奇行が多かつた様である、明治三十五年九月二十六日著者二十一才の時に四十六才を一期に大往生せり。母はかきと稱し、野田善助の次女にして東區赤塚より嫁入し、明治三十三年十二月八日著者十九才の時胃腸病の爲四十四才にて長逝す。

著者加藤清吉は明治十五年十月十八日桑名町三丁目に於て藤三郎（忠平）の長男として出生す。

## 幼 年 時 代

幼い頃の想ひ出は限りなく懐しまれる、そして私の腦裡を走馬燈の様に急がしく、幻燈繪の如く薄ボンヤリと去來する、急湍斬巖を切り拓く態の思ひ出や、温水柳下に澄むが如き和風のどかな思ひ出など盡くるところを知らない、主だつた追憶の二、三を拾つてみよう。

### 春は父の背に乗つて

明治二十年 六才の頃

感慨無量の四字に盡きるが、自分が物心ついた頃の記憶を辿つて春日遊山でもなく、參詣でもなく、熱田の宮まで浮れ出た當時の模様を紋景すれば、當時小田原町の宅から父親の背に負はれて徒歩で出掛けたものである、乗物などには餘程の贅澤な家庭でなくては乗らず、普通の家庭では非常の場合以外には乗らなかつたものである、父の背に乗つて町から街への移り變わりをのんびり眺めつゝ行く行くに當時は名古屋も板葺の上に拳大から南

瓜位迄の石を置いたものが多く、時たま相當な建築物で瓦屋根を見受けた位のもので、電柱や電線などは殆んど見當らなかつた。小田原町から東廣見（現在の下前津）へ出るとその近所は富士見坂と云ひ快晴の日には遠く富嶽を望見する事が出来たのであって、此等の名があつたもので、東廣見から東一帯は一望のもとに畑や田で遠く御器所を望み白い木綿を晒したのが点々と見受けられた。

「編者附記」明治二十二年に出版された庵原小金吾の著作になる、名古屋史談 に依ると、

東別院は下茶屋町にあり殆ど八十年程前に建築せしものなり市内第一の巨利にして北金城とその宏壯を競ふに似たり、古昔織田信秀の築きし古渡城といふは此の地なりと傳ふ、境内櫻樹數十株あり春風駘蕩の候には賞遊の貴賤群集す、其東門を出づれば田圃相連り遙に三遠の諸山を望む風景甚だ佳なり俗に廣見と云ふ。

とあって、全く境内の櫻花咲き競ふ頃は仲々文學通りの佳景であつた、東別院より南に高蔵の森、熱田の森が見え、名古屋街道といふ筋をこの二つの森を目標にテクテクと歩き宮へ着いたものである、畏れ多い事であるが、當時の熱田神宮は現在に比べて荒廢し手入れなども不行届きがちであつた、神社の建築様式も現在の如くではなかつた様である。参拝

を終つて歸路には本町通りを大須に向けて馬車に乗つたもので途中一、二ヶ所並木すらあつた、大須の現在の東入口に駐車場があり、こゝで下車して觀音に參詣して桑名町を北進して歸宅したのである。

これより先き明治十九年著者五才の時に現笹島貨物驛の前進たる名古屋停車場が設立されて居り、株式取引所も十九年に設置されたのである。

この當時は電柱、電線などの障碍物がなかつたので軒下から風揚げが出来た、それ位現在から見ると閑静且つ殺風景なものであつた。

現今の柳橋、泥江橋及び舊名古屋驛、現名古屋驛との一帯の間には建物と云つては二、三軒点々散在してゐたに過ぎず、江川の東には家並があつたが、江川を堺ひに西は殆ど田畑で、草ぼうぼうの廣っ原であつた、その中にポツンと名古屋驛が建つており、おそまつ極まる景色であつた、驛前には池があり、子供は此の池でよく泳いだもので、鐵道用木材が貯材してあり、附近には僅かに鐵道局用の小屋が二、三見受けられたのみで、只今の東洋一を誇る新名古屋驛と比較して誠に今昔の感に堪へない次第である。



## オカツパと小遣錢

當時の小兒はすべて「オカツパ」であつて小遣錢を戴くにも天保錢「八里」は餘程の事がないと與へられず、普通は文久錢又は二里錢で、當時はそれで芋や饅頭が充分買へたものである。まづ宮詣り（熱田神宮詣り）と云ふと五錢頂戴して、それで往復何やかとたらふく費つて尙ほ馬車にも乗れたのである。

當時の物價の一例をあげてみると、

田舎饅頭	一厘
(上等もの)	二厘
うどん	八厘
學校月謝	一ヶ月 四錢(天保錢五枚)
散髪	三錢五厘
米一圓に付	明治廿三年頃 一斗五升

同四十二年頃

八升

五錢の小遣ひを頂戴して宮詣りに行けた著者は幸福しあはせな有難い次第であつた。

## 列をなして電柱に耳を當る

明治二十一、三年 著者八、九才の時

明治二十二年十月には自治制に依つて名古屋市と改めらる、それ迄は明治十一年制定の郡區制に依つて、名古屋區と稱し、全区を二十五部に分ち、毎部に役場を建て戸長を置き之を區長が統治してゐたのであつて、市制施行と共に初代市長には中村修氏が就任された現明倫中學校は既に此の年に設立され、武揚學校と稱呼した。

尙ほ又明治二十二年は國家的に觀て實に銘記すべき年であつた、主だつた政治、經濟狀勢を示せば即ち二月十一日憲法發布せられ、同時に皇室典範、議院法、衆議院議員選舉法貴族員會、會計法(會計法は廿三年四月より實施)等公布せられた、時の内閣總理大臣は黒田清隆であつた。此の日文部大臣森有禮 西野文太郎に刺殺された、同年十月十八日外務大臣大隈重信 來島恆喜に爆彈を投ぜられ、重傷、其結果條約改正は中止となる、十一月三

日には皇子嘉仁親王立太子被遊、又七月には東海道線東京神戸間全通、新橋神戸間毎日一回往復直通列車の運轉を開始、依つて名古屋に於て鐵道一千哩祝賀會が開かれ（當時の國有鐵道五五一哩、私設鐵道六七一哩、計一、二二二哩）市制施行、鐵道祝賀會等で上を下への大騒ぎであつた、加え明治十七年頃の不況から上昇氣運にあつた景氣が廿年頃より著しくなり、漸く頂點に達した年で、株式市場は沸騰し、出來高二百十萬株を越す勢ひを示し、諸會社の増資及新設資本金七千二百萬圓で明治十九年の十倍の力が示現された、之等は何れも鐵道熱より發生した企業熱のしからしむる處であつた、一方米作は凶作で收穫高三千三百萬石に達せず明治十七年の凶作に等しく、工業及び商業界の好況に援けられて先づ無難狀況であつた、が此の反動は翌二十三年に至つて恐慌襲來となつて顯れ、日銀に五百萬圓を限度とする制限外發行が三月初旬認可された程である。兎も角二十二年の景氣は大したもの子供心にも人心は極めて浮調、遊山、花見と絢爛たる繪巻物然たる有様を見受けたのである。閑話休題。

二十三年と記憶するが初めて島田町と入江町の北東角に發電所が設けられアーク燈が本社前（入江町現在五月本店前、現在の五月本店の場所は當時牧場であつた）と廣小路本町中央、本町四丁目（現御幸本町）大丸前等に點火された、それが珍しく大勢の見物人が押し掛けたもので、燈火其ものも不思議に感じたが電柱に耳を當ると音がすると云ふので老幼男女大勢列をなしてその電柱に耳をあて、「ゴオーゴオー」と云ふ唸り聲を聞いたのであつて誠に面白く、且つ珍風景であつたが當時は不思議に對する好奇心で一杯だからこんな長閑な風景を創り出したのである。

## 四季行樂の情景

明治中葉 著者八才前後の頃

春秋の行樂時期に町内又は組内のものが集つて遊山に出掛けた時の情景は、神樂町地先から鳴物入りで、川名又は八琴山（現八事山）或ひは大池（現大池町、商工會議所附近）等へ春は花見、秋は月見と面白おかしく一日の清遊を試みたもので、八琴の邊りは現在より尙ほ一層雅びやかであつたと共に詩味に富み、附近の風物大いに野趣汪溢してゐた様で手頃な遊び場所であつた、大池の邊りはその名の示す如く大きな池があり、池邊には櫻樹が植へられて美觀を添へ、池の周圍を圍く馬場がしつらへられて時々草競馬が都人士を集

めて盛んな賑いを見せたものである。一方又現在の堀川も當時は河水極めて清澄で、梅、櫻のどくいが兩堤に競い咲いて、まだ松飾りの取れて間もない初春には、瓢ひょうを腰に堀川の梅見も亦格別と古渡りか、山王へのそぞろ歩きを試みた風流人の姿も見られ、花の三月には朝日橋の櫻を賞で或ひは日置橋より北へ西主水町邊り迄の櫻樹に春の楽しみを満喫し、水に舟を浮べる人あり、陸に花辯の許に和歌、俳諧に、唄、三絃に浮れる人もあつて一日の歡樂郷として申分のない場所柄でもあつた、山王のあたりから西へ菜の花一面の田圃面とんもつら遠く北勢の山連やまづれをながめつつ庄内川のつくし摘み、これ等も一つのハイキングコースとして著者も良く遊びに連れ立つて行ったものである。夏の涼みは廣小路、榮町の柳の下に憩ひ、或ひは堀川端、江川端も格別であつた、秋の紅葉は八琴山、山王の堀川邊りが盡きせぬ眺めでありその錦繡の粧ひは古渡り、龍興時の時雨と共に和歌、俳諧の題材になつて、墨客の矢立の筆をしめらせた事であつた。陰鬱と云へばそれまでだがその時雨が一人の風情を添へた淋しい秋も過ぎ、晴れては降り、時雨では晴れた雨もいつしか音もなく白い冷いものと變る冬は、他の季節の様に盛んに出歩きもならずいろりべかこたつ檜火燵にすつこんで流行本か草双紙をつつらつつら読み更ける位であつたが、都人士は雪見酒と洒落てこの雪の

日を格別楽しんだ事であらうが何分にも「オカッパ」の童への頃とて、他人の仕様を眺めてゐたにすぎない、然し記憶を辿ると八琴興正寺五重塔の雪景色、白鳥御小屋おこや（御料出張所貯木場）附近の白一色の絶景たふし、特に御料地には關門が設けられてあつたが其處に、つりがねの松といふ丁度吊鐘を吊した様な形ちの松があつて堀川の上り下りに一人の風情を添へ、その外日置橋あたりの風物など今尚ほ腦裡にくつきりと浮んで來る雪景圖ありさまである。

### 排外思想とキリスト教

明治廿三、四、五年頃

明治廿三、四、五年頃にキリスト教と佛教との争闘時代があつた様で、町々でキリスト教に家を貸して布教が初まると貸主に迫害を加へたものである、又キリスト教々會の前に佛教の説教所を急設し盛に反撥したのであつて、甚だしい時には言論に火華を散らし石などの降る事もあつた、町通りを外人又は支那人が通行すると毛唐人といつて子供までそれを口にしながらつき歩いたもので、蛇蝎なまはの如く嫌子と共に央恐れもした、支那人には特に

チャンチャン坊主と云つて頗る排外思想を漲らせてゐた、此れは當時漸く國力が充實され對外的觀察力が向上しつゝあつた一つの變形的現れでもあつたらう。

## 濃尾大地震と著者

終生忘れ得ぬ思ひ出（十才）

直接、間接を問はず、我が日本國民は誰れ一人として大きな地震の經驗を持たない者はない、火山國日本として之は當然の宿命として吾々國民に負はされてゐる處であるが、地震に對する國民的覺悟が常に日本の進取的發展性に寄與してゐる事渺なしとしない。

著者の幼年時代に於ける一つの大きな事件として忘れる事の出來得ない事柄は濃尾の大震災である、明治二十四年十月二十八日著者十才の朝、學校へ登校せんとする少し前、お辯當の副食物を調理する味淋を買ひに行くのを命ぜられ、歸つて臺所へ器物を置くや否やこの大震災が襲來したのであつて、直ぐさま今の八重垣町須佐之男神社の境内へ急遽避難した、この時母は妊娠中であり既に臨月であつたからこの異變のために驚愕、精神的の大

衝動を受けて震災と同時にこの避難所に於て産氣つき男子を出産されたのである、それが實弟清道である、この避難所に於ける實母出産當時の混雜振りは今尚ほその狀況が眼前に髣髴たるものがある。

この時面白い事は此の避難所に於て尚ほ他に一人出産した人があつたが如何なる誤りか当時の新聞號外に忠平の妻避難所に於て双生兒を産み、母子共健全などといふ記事があつて、震災に逢つた悲しみの内にも僅かに喜び合つたものである、この號外と共に見舞の者やら、見物人でその雑沓は之れ又言語に絶し遂に警官の出張あり、護衛的警戒の上で群集を追拂つたものであり、外國人の如きはこの事を聞き同情と喜びの金品をかなり澤山提供されたのを記憶してゐる、大震災の狀況は他に記録も種々あるが、この混亂と悲惨な有様は事實に當面したものとして實に忘れ難い思ひ出となつてゐる、その間加藤一家は別に負傷者もなく生まれた兒も無事にて益々世の同情を受けたのである。

乍然著者に一人の妹があつて千代と云ひ當年六才であつたが性來虛弱であり既に臥牀中なりし處如斯大震災に遭遇し、加ふるに寒さ加はる神社内の假住宅と醫療意の如くならず

遂に二十四年十一月十九日に逝去せるは誠に痛恨事であった。

## 學業の事

當時の教育界の狀勢は無論現代とは雲泥の差で、上級學校へ進む者は極めて少數で、高等小學校へ進む者すら町内に一、二名と云う有様であつたから、大部分は小學校だけ卒業すればそれで事足りたとして家業に従事せしめられたのである、著者は六才の時櫻ノ町通伏見町角の志村塾へ午前中は習字に午後は和泉町の増田塾へ漢學の勉強へ通つた、當時は勿論教科書なく全く空讀であつた、その頃の事として學校の先生は成績優良惑ひは裕福な家庭を訪問して將來の學問の必要と欧米先進國の例をひいて上級學校へ進學方を奨めて廻つたのであるが、それでも仲々上級學校へ進む者は稀であつた、著者の家庭も裕福ではなかつたが著者の小學校の成績に依り上級學校へ進み得ると云ふので再三先生の奨めを受けたがその必要なしと云ふので明治二十五年三月明倫尋常小學校を卒業、同二十八年三月名古屋市立第一高等小學校を修業したのみである。上級學校へ行き得たものをそれが出來ず、今日至つて常々學問の素養のない事を誠に遺憾に思ふ次第である。

## 少年時代

著者濱木屋へ奉公に上る

木材界へ身を處する第一歩

明治二十七年十二月十五日（十三才）

物情騷然、既に六月四日には日清戦争の序幕たる朝鮮への出兵があり、七月廿五日には豊島沖の海戦が行なはれて、八月一日遂に對清宣戦が布告され、越へて九月十三日大轟を廣島に進ませ給ふの事あり、世は挙げて非常時氣分旺盛する師走十五日、著者の一生を託する木材界への第一歩を印したのである。同じ十二日には第二回限外發行施工せられて、戦事豫算案實施に伴ふ財界定策が構ぜられた。

著者は十五日未明、氏神様に詣でて決心を固め、父母に別れを告げて當時西區木挽町四丁目にありし濱木屋へ上前津の住加藤市蔵と云ふ親戚の人につれられて丁稚奉公に上る、

それより木材業をもつて身を立てんと堅固なる志操のもとに孜々として勤勉し、明治三十一年（十七才）八月一日元服をなす、即ち當時之れを若衆となると稱し初めて羽織を着る事を許され、番頭の最下位につかれるのである。

#### 丁稚時代の努め

その他の事どもに就いて

元服前即ち丁稚時代にはメリヤスのシャツ、麻裡草履、桐下駄の類は一切使用することが出来ない、平素は木綿のシャツに木綿の着物、小倉の帯、厚司絆天より着物を許されない、履物は山桐下駄又は藁草履であるが元服して所謂番頭の下位に列すると糸入り（絹糸が木綿に交織りされてゐるもの）の羽織、帯は博多織、それに麻裏草履を穿くことを許される、元服迄は店の商賣上の仕事は第二義的なものであって主として奥向きの雑用に使役される、此の間に果して店に出して一人前に働き得る人物か否かを試すのであって、本人の性質、手腕並に勤務振り等を認められて後初めて元服を許されるわけである、當時は小僧の人物過剰時代であつて丁稚を解雇するが如きは更に意に介せざるところで試験時代に

於て到底一人前のものになり得ないと認められた者はドシドシ里へ帰してしまつたものである。元服すると待遇も一變し大きな不都合さへなかつたならば成人後本人の希望に依つて分家が許される、従つて元服と云ふ一事が其本人一生の進路を定める最も重大且つ意義ある儀式である。

之れと共に奥向きの雑用から解放されて店へ出て働く事となり、どの丁稚といへども之れを無上の樂しみとして紛骨碎心主家に盡すのであつて、著者も頗る待望して十三才より十七才迄五ヶ年間文字どほりの奮闘努力、苦難のかぎりを盡して元服の日を迎へたのである。又思想上に就いては主従の關係は往時からの風習は薄らぎながらも尙踏襲されて美風が残り、普通一寸した奉公人の五、六人も居る家とすれば、主人の前を通る時には頭を下げて通る、實際に主人を尊敬したもので、又雇はれてゐるもの同志でも長上に對しては洵に柔順であつた。之れ等の事は今尙ほ残されてゐる美風でことさらに述べる迄もない處であるが、その態度は全て慇懃、鄭重であつた。そうした淳朴な時代であつたから番頭が分家をするとは主家では暖簾の一字を分け與へて盛んに取持をして、引立て立派に商内が出来て行ける様に目をかけてやるのであつて、一方分家したのも其の主家に對して禮儀を盡

し、連絡をとって共に商戦に努力を傾注した、が現世ではこの分家制度と云ふものが次第に薄れて餘程の老舗でないとの方法をとらない、分家するしないで色々と紛叫を見るし、主家と分家したものが互にいがみ合ふ様を良く見受ける處で誠に寂しい次第である。

小僧の仕事の二、三を述べれば前述の奥向きの仕事は勿論、市中の顧客先へ重量ある高ばったものを荷車に積んで配達する事も毎日の行事の一つで著者等は汗水流して盛んに運んだものである、これに就いて面白い話がある、著者は當時大八車に木材を積んで眞赤になつてウンウンと引張る事を天職と信じて各方面へ運搬したが、兩親は之の恰好を見て何か勘違ひをしたのであろう。そんな姿を近所の人や親戚の者に見られたのでは恥かしいからなるべく我家の近所は通つて呉れるなどいふ様な事を云ひ出した、が著者は小供心にも自己が天職と信じてやつておる仕事が恥かしいとは心外だ、大いに之の汗水たらしして眞赤、眞黒になつてゐる有様を近所の人や親類の人にも見てもらつて、清吉の一生懸命振りを認識してもらはうと、その話しの後はなるべく努めて我家の附近を廻る様にしたので終いには兩親も感心する様に成つたものである、或ひは又三河方面、伊勢、紀州地方から堀川上流即ち木挽町迄舟入りした荷物を倉庫、木小屋へ水揚するにも全部店員、小僧が爲

たもので日傭を使ふ場合は餘程巨大な重量のあるものゝ場合のみで出來得る限り水揚、船積、町の配達、荷造に至る迄當然の事として小従業員から小番頭迄の者が立ち働いた、今から追想してよくも柔順に馬鹿らしいとは思はれる事迄やったものだと思ふが他方から考へればそれが普通の事として誰れでも経験した事だから柔順に努め終せたわけである。

#### 丁稚時代の古事

##### 附、當時の世相一般

小僧時代の古事の裡で一番印象に残つてゐる事柄は十二月の餅搗きの事である、毎年十月二十三日、四日の内一日は大掃除を行ふ、然して二十五、六日中に餅搗きをなすのが例となつてゐた。

この餅搗きは頗る盛大なもので搗出しは午後八時頃から搗終りは翌朝の夜明けになるのが普通で、この日は本家は勿論隠居所、親戚、番頭の家の餅迄ここで搗くのであつて出入りの大工、左官、日傭等すべて手傳ひに参り賑やかな行事の一つとなつてゐた、この時新參の小僧は棧俵を頭に冠り播紛木を腰にさし、十能を左手に金火箸を右手に持つて之れ

を打ち振りながら裏口より入りて

「栗や勝栗、尾ノ味や山椒」

と聲高に反復しながら竈を一廻りして臼のところへ来て正面上座に主人夫妻、子息、令嬢の列ばれし前に至り

「今日はお目出度う存じます」

と挨拶して又元の巡路にて裏口へ歸る儀式であつて、一年の行事中この年末の餅搗きは最も楽しいものゝ一つで、澤山に搗きあげられた餅を鼠のひくが如く各自が思ひ思ひに納め込むなどの面白い場面も見られた。其他小僧時分は御給金等は勿論戴けず無給で所謂家族的奉公であつたから、着物の如きものから身の廻りのもの迄色々と里から補給をしてもらふ、又前述の様に奥向きの仕事が第一義である関係と老舗の事とて行儀作法が極めて嚴格で、女中に憎まれたら最後その店に居つらくなるので、女中に對する「袖の下」等里方の者、小僧自身共に氣苦勞をしたもので、著者は之の点里方がウマクやつて呉れたのと、自分の一生懸命な働きとて無難であつた、そう云ふ譯合ひから盆、正月、秋の彼岸の中日、或ひは大歌舞伎のかかつた時等も楽しいものゝ一つであつた。盆、正月には御仕着が戴け

たし、彼岸の中日にはなにがしの（二、三十錢）御小遣いを頂戴して、北廣見、別院へ遊びにやらせてもらった、又大歌舞伎のかゝつた時は主人親族、番頭、等のお供が又は五十錢位の御小遣いをいたゞいて、觀劇に行けたものであつた、他に色々な娛樂機關の少ない時代であつたから大歌舞伎がかかる大變な事で家重詰其他の色々なものを料理して持ち朝から、のんびりとみやびやかにはなやかに舞臺を見物したものであつた。其他前から述べて來てゐる點と後や先になるが元服に至る迄の間世相一般について述べて見よう。

その頃は（明治の中年）日本の文化が最も急速に進みつゝある時代で日清戦争の凱旋祝賀會などには變装をして繰り出し、相當無邪氣な恰好で練り歩きその當時の世相を遺憾なく現はしてゐた、乗物について見ても自轉車（鐵輪の二輪車）の流行時代で其勢ひは仲々盛んで鐵の大小二輪の頗る滑稽なもので、壙町一丁目にあつた米穀取引所から小僧が郵便局へ電報を打ちに行くにも之れで馳けたのである、こうした自轉車が先づ速い利器としてかなり利用されたものである、普通の商店でも餘程の店でなくては自轉車を購入せなかつたが主として投機商、電信配達、大商店等が盛んに利用したのである、自分も半ヶ年位も番頭



にねだつて一臺金八圓で買ってもらい大いに得意であつた、ゴム輪の自轉車も其後次第に増へたが著者の子供當時は外人宣教師が舶來自轉車に乗つてゐたものを一、二見受けただ位で不思議に思つて一、二丁位追つかけて見たものである、又當時株式の仲買店と取引所との通知方法は屋上から信號旗を以て相場を取引先へ速達するといふ長閑な仕様であつた。其の外明治二十七年前後から三十一年迄の間の我國の政治、經濟事情の變遷について述べて見るならば、明治二十五年には帝室林野局名古屋支廳が設置されて居る、又二十六年七月より商法實施される、二十七年五月には横濱外商の商取引ルーズに對する邦商の憤激が表面化し、生糸賣込を拒絶し、外商陳謝して和解となつた、同年七月には日英通商航海條約の締結ありて、後重要諸國との間に不平等條約の改正が進められた、同時に日支間の國交緊張し、財界は多少動搖した、日清戰の事に就いては前段に述べた處で云はずもがなである、二十八年三月日清戰役終る、戰費二億圓と號せらる、四月十七日には日清講和條約調印せられ廿一日に至り平和克復の大詔發せらる、越へて露、獨、佛の三國干涉あり五月十日遼東半島還付の詔勅下り、國民齋しく涙をのんで還付、明治二十九年には名古屋市に名古屋稅務管理局並に稅務署設置される、同三月葉煙草專賣法の制定ありて三十年に

は名古屋葉煙草專賣所起る、一月十一日英照皇太后崩卸被遊、此年有名なる足尾銅山鑛毒事件起る、三十一年三月六日ドイツは膠州灣を、ロシアは遼東を、英國は威海衛を、フランスは廣州灣を租借す、越へて五月九日對外同志大懇親會開かれて、ロシアに對する強硬主張漸く表面に現はれ來る、六月勸業銀行第一回債券賣出、七月民法發布あり、例の常陸丸は之の年の八月在長崎三菱造船所にて建造さる、三十一年は貿易尻に於て一億六千萬圓の大人超を示す、米作は極めて豐作にして、收穫高四千七百萬石也。名古屋にては名古屋築港起工の事あり、電氣鐵道開通して仲々賑やかなり。尙ほ二十九年には木曾川の大出水で夥多の流材がありこれ等は一旦伊勢の沿岸に漂着、一部は知多郡沿岸に打ち上げられその時の流材取纏めの狀況は恰るで御祭氣分で半日位しか仕事をせず、沿岸町村長或ひはその土地の顔役に頼んで相當なる拾得料を支拂ひ取纏めたものである。

## 元服の儀式

元服の日には普通は番頭として適せざる名前のものはこゝで改名するのであるが著者は最もふさわしき名として改名をしなかつた。

明治三十一年八月一日（著者十七才）、當日は神前に於て主人より式服一揃を下され、主人にまづ元服のお禮と挨拶をなし夫れより氏神、本家、主家の親戚、兩親に夫々元服の報告挨拶をなすのであつて、著者はこの日濱木屋、材摠、番頭の各家を一巡し次ぎに兩親の家に行き一同元服を喜び合つて互に祝盃をあげたのである。

### 問屋業に就て

著者が奉公した濱木屋は木材界に於ける問屋業者として最も古い店の代表的存在であるが、材木問屋の概念的説明を簡單ながら述べたいと思ふ、繁雜を避けて左に著者が名古屋材木商工同業組合の木材史編纂の爲の座談會の砌り（昭和七年十一月十八日）述べた説明を再録する次第である。

私から申し上げるのは問屋業の變遷であります。私の知つて居りますのは明治三十年頃から此方へのことですから其の概要を申し上げます、明治三十年頃の問屋業と云ひますと、大別して製品（小白木）の問屋と資材の問屋との二つになります、小白木問屋は概ね堀川沿岸に沿つて北部に、資材の問屋は南部にありまして、支店を有する商店

では本店を上流に支店若くは出張所を下流（日置橋南）に設置して居りました、又小白木と云ひますと板子、野根、桶木取、出來合の柱類、檣、垂木、板類、曲輪を總稱して小白木類と云つて取扱つて居りました、其の製品の大部分は信州の御料林を部落民が拂下げを受けて伐採したる、その原木から製材致しましたのを主に名古屋まで馬車便をもつて輸送したものであります、檣板子は長さが六尺五寸、幅が一尺、厚さが四寸、五寸が多數であつた、之等が明治三十年頃から三十四五年頃迄相當の數量名古屋へ搬出されまして、それに續いて檣框（建具材料にして戸棧とも云ふ）椀桶木取、野根等が木曾福島、上松、野尻、三留野邊から多數参りまして、それに伊勢、紀州方面から入荷したものは主に杉、梅、樅、松の板子及び檣類、美濃方面から杉、松、樅の板類が入着した、奥三河及遠州（天龍川上流）からは杉檣樅板類が陸路名古屋へ入つたものと原木が水運に依つて天龍川を経て中野町半場で製材せられたものが濱松を経由して入りました、又静岡縣の島田からは矢張り樅、梅類の板が相當移入せられました、其等のものは名古屋を中心として各地に夫れ夫れ適當に消化せられましたが檣板子、桶木取類は大部分が名古屋から海運を以て東京芝浦へ移送されて深川の問屋へ販賣したものであります、東京の深川では木曾の檣板子、椀桶木取

類は相當の名聲を博して盛んな取引をしたものであります、それが時勢の變遷と共に段々扱ひまする品種及方法が變つて参りまして、信州とか美濃、飛騨、三州、紀州、伊勢地方から入りますものゝ數が減じましたり或は入る種類に變更が來まして、そうして北海道材即ち北洋材の盛んになりましたのは確か私は大正七年頃だつたと思ひますが……大正七年頃までは北海道材の板は引合はない、採算が取りかねると云ふので餘り名古屋では製材致しませんでした、それが大正八年頃から逐次製板が増加して参りまして、尙大正十年になりますと樺太材の移入が増加し北海道樺太の蝦夷松、椴松の需要が旺盛になつて現在の様な隔世の歡のある状態になつた様に思はれるのであります、自然問屋業と致しましては漸取次扱品がさふ云ふ具合に變化して來た様に考へます。

## 初旅びの事

著者十七才の十一月頃番頭に累進して最初の出張を命ぜられ、遠州天龍川の仲の町へ初旅びをする、濱木屋は當時天龍川の上流周智郡しゅうちくじん阪部から出材をなしつつあつたが之れを仲ノ町の素封家金原明善氏と掛塚の松下文次郎、稻垣勝三郎氏に賣却したので之れが目拾ひ

のために出向いたのである。翌年明治三十二年には再び遠州灘の港たる掛塚町字駒場に貯木場があつて、此處に出張して東京深川の久次米氏へ賣約されたもの（當時松下、稻垣兩氏も共同であつた）の受渡しのため一月より四月迄四ヶ月間日傭十名を引率して其衝に當つたのである、この受渡檢尺にはかなりの支障に逢着し、引率した檢尺人が相手方に二十圓の贈賄を受けたり或ひは花街で響應を受けたりして檢尺上面白からざる事があつて一たん檢尺人は名古屋へ歸し著者自身自身で檢尺をする。そうすると相手方の人がなるべく著者を河の中へ落さう落さうと計る著者も冬の眞最中に河へ三、四度落ちたり落されたりするなどしたが之れにも屈せず檢尺を繼續した、斯様に頗る苦心、困難、辛勞をなめ夜間一睡だにし得ざる日も尠なくなつたが志操堅固、鐵の如き意思の許によくこの難關打開して完全に任務を遂行して歸名したのであつた。

明治三十三年には大井川の上流より大倉喜八郎氏の伐出した唐檜、シラヒ、黒松など尺

×二萬本を濱木屋は愛知挽木株式會社の製函材料として島田驛受渡の七寸上（十六尺一間）

尺×一本一圓六十錢で買約したので之れが受渡のため四月島田より上流二里むかやの向谷に出張

し八月迄五ヵ月間に亘つてこの二萬本を完全に受取つて歸名したのである。この際も出水の厄に遭ひ、検尺の上に於ても種々なるいきさつがあつて想像だも及ばぬ苦心、辛苦をなめたるも之れ又大過なく豫期以上の成績を納めて歸名した。この時の本店に於ける支配者は河村彦助氏であつた。

## 實母の死

明治三十三年十二月八日は著者二度目の悲しい思ひ出の日であつた、即ちこの日實母「かぎ」の逝去に逢つたのである、實母は宿痾の胃腸病の爲に苦しんでゐたが、養生叶はず遂に大往生を遂げたのである、享年四十四才。之れこそ社會の表裏漸く判然たらんとするに到つた最初の悲しき日であつた。

斯くして年移り星變りて著者は濱木屋商店に於ても漸次手腕、力量、人物を認められ重用されるに至り、東京、大阪或ひは神戸等と絶へず商用のため出張を命ぜられ、殊に北陸線の開設に際しては其最中米原に出張して鐵道用材を多數納材に従事した事もあつた。

## 徴兵適齡

父の長逝に逢ふ

同時に召集令状

明治三十五年二十一才を迎へて徴兵適齡となり受檢の結果甲種合格の判定を受けた、實父はこの報に接し非常に喜ぶと共に反面に於て果して入營確定か否かを心勞すること尠からざりし状態にあつたが、同年九月上旬脚氣症に犯されるところとなり百方醫療を盡せども病昂進するの一途にあり、愈々轉地療養を試みんとせしも主治醫の勸告によつてひとまづ自宅に於て療養する事とした。夫程の重態であつて眞に醫藥人事の限りを盡したが、天貸ずに壽齡を以てせず遂に九月二十六日午前十一時頃突如として心臓麻痺のため長逝されたのである、享年四十六才であつた。この時著者は主家の要務を帯びて鐵道局名古屋出納事務所（今の笹島貨物驛、驛前に池があり、池の端が納品置場であつた）に於て池畔にて松の矢板の納材受檢中であつたがそこへ自宅よりの急使に接し父危篤の報に取るものもと

りあへず人力車を驅つて自家に走せ付ければ時既に遅し父は人事不着、何事をも聞くを得ず、唯悲嘆に一同涙するのみであつた、その日この混雑中へ午後二時頃輜重兵第三大隊入營の召集令狀が配達されたのである、當時家庭には十三才の清道と六才の信行と云ふ二人の弟あり、尙ほ前年に父は後妻を娶られてそれに八月に出生したばかりの異母妹あり、斯の如き一家は柱石たる父を失ひ、若き身空に召集の令狀は受取る全く途方にくれるの外なかつた、この間にあつて兎も角親族、知人にも協議の上實父の葬儀萬端を濟し供養の間に充分なる熟議をなし更に町惣代、管區警察官にも事情を具陳して徴召一ヶ年間の猶豫を請願する事としたが父の残したる僅かの蓄財のため遺族は徴召三ヶ年間些の生活上の困難なきものと認定されて請願は却下されたのである、茲に於て著者は國家の干城として勇躍召集に應ずる事に決心しまづ繼母と異母妹は里方に歸つてもらい、二人の實弟清道は西區袋町吉田伊助方、信行は中區正木町吉野丈太郎方の夫々親戚に預け重要な家財道具は主家濱木屋の倉庫に御預りを願ひ、其他は夫々賣拂處分をなして、一家を整理し、明治三十五年十二月一日伯父の小田原町一丁目野田屋（亡母の里方）より入營したのである。

「編者附記」明治三十二年より三十五年に至る我國文化の推移について記述すれば即ち三

十二年三月國有林野法公布、耕地整理法公布、同時に保證準備發行制限額の第二次増額を施行し一億二千萬圓に改めらる、其他商法の改正あり會社の免許主義を廢して準則主義とする事となつた、同時に農會法、特許法、意匠法、商標法の制定を見る、六月には英京ロンドンにて一千万ポンドの外債募集をなし、高橋是清、深井英吾の諸公奮闘、三十年三月十日治安警察法發布される。當時漸く労働運動各所に於て活癢さを示し來れり五月十二日には支那に於て有名なる義和團事件起り、當時貿易尻は逆勢を示し居たるを以て金融緊縮の徴あり、この事件の爲事件費の支出、對支貿易の杜絶に依つて金融市場重壓を受け、年末に至り銀行恐慌漸く九州一圓に瀰漫するに至る、越へて三十四年四月に至り大阪を中心に和歌山、奈良、京都、滋賀、三重、四國の關西各地に金融恐慌襲來し、暗黒状態を露呈し、支拂停止のもの三十四行を見、取付を受けたもの枚擧にいとまなき夥多に上る、依つて時の藏相曾我荒助氏は各府縣知事に内訓を發して、資本金五十萬圓以下の小銀行の設立を許可せざる方針を指令す、これより銀行の合併氣運各所に擧る、三十五年一月三十日記念すべき日英同盟調印の事あり、之の年は我が國製糖業界が進取發展の緒をみせたる年で臺灣製糖株式會社の操業開始と共に電力使用に依る製糖法

を用ひ當時に於ける最も斬新なる工場經營法を示したるものとして各方面の注目を聚めた。木材界に於ては有名な岐阜縣下麻生村と名古屋商材組合との大喧嘩が此の年の九月に起つてゐる、その當時の模様については名古屋材木商工同業組合編纂に係る名古屋木材市場の變遷（前編）に記載の前組合長鈴木惣兵衛氏の口述を要約すれば、

そもそも喧嘩の起りは麻生から来る筏の諸賃錢が年々高くなつてどうにも堪へられな  
いと云ふので名古屋の出材主が申合せて名古屋商材組合と云ふのを拵へて大いに反抗  
しようと思ふ事なつた、あの時の張本人は熊谷丈吉君で、私の宅に來られて君達は  
麻生のやり方を黙認してゐるかと思つて腕捲りしたのが發端で、當時深谷竹三郎、富  
士田寅藏、日下部さんもおいでになつて川口君、半谷新助さん、それから私など第一  
番になつて奔走したものです、そして熊谷丈吉、佐谷鐵三郎（日下部支店）などと云  
ふ連中が急先鋒になつて麻生へ出かけて行つて、筏の料金の協定が出来なかつたら自  
分らで搔くと云ふ、下麻生村の三鱗組は（编者註、明治十三年九年長谷川金左衛門、前  
島丈之助、篠田金八の三氏が下麻生村村民と提携して組織したものである）水面は自  
分の方に借りてゐる（註、明治十七年官有地使用規制布達に依り水面使用許可願を申

請同二十年許可のもの）から搔くなら此處へ來て搔いて見よと云ふ、それで私の方は  
對岸の上吉田に事務所を拵へて其處から筏を搔くと云ふ事になり次第に問題が訂じて  
ついに名古屋の材木屋は下麻生村に一人も泊らず、吉田に宿泊所を設けて對抗し双方  
から何かものを云ふと、すぐ殴り合ふと云つた按鹽で大變な喧嘩になつてとうとう愛  
知縣の書記官後藤松吉郎氏と岐阜縣の書記官笠井信一氏の二人が仲裁に入つた結果、  
仲裁案が出来ましたが、夫は米の相場を標準にして筏の乗賃を改正すると云ふ事で解  
決したのである、所が此の解決したのが私に濱木屋、半谷新助、富士田寅藏など皆な  
現場に出張して、奔走の最中で私の先代や服部小十郎の先代、井上信八外數氏に後藤  
笠井兩書記官と加藤重三郎君、岐阜の岡井藤之丞君などが立合つて和解の段取りが出  
來たのですが、これが私始め腹に落ちなかつた、それで早々吉田を引揚げて歸つて來  
たが今更何うする事も出来ぬので結局泣き寝入りになつたのですが、日下部、深谷  
富士田の三君が何うにも腹に落ちぬので遂に訴訟になつて執達吏を連れて筏を差押へ  
ると云ふ大變な騒動になつたわけです、結局岐阜で裁判をするやら筏を差押へる、差  
押させぬで殆んど流血騒ぎまで惹き起すうとしましたがこれがために、名古屋の材木

屋連中は三萬圓位の金を使ったでせう、下麻生村も大分金を使ったらしいです。

「編者註」下麻生町は其倍の五、六萬圓も使った由。尙ほ之の騒動の際に於ける下麻生村方面の動向に就いては同じ日の座談会で述べられた村瀬八重八氏（下麻生村出身）の興味ある御話しを参考までに記載すると次の通りである。

「從來綱料が幾ら、搔下げ料が幾らと云ふ定まりであったが高過ぎて到底堪えられぬ、假令水面使用權は下麻生が持つて居ても切下げは自由だと、名古屋側が主張したのが喧嘩の始まりで、今組長の御話のやうな騒ぎになったので、下麻生では悲壯な決心をした、懲役に行くもの死ぬものがあつたら食はしてやる、嬢も小供も全部これにかゝれ女は御宮にお籠りせよ、男は全部之に掛かれと言ふので、名古屋側は對岸の吉田の方から向つて来る、下麻生側は之に對抗して持つてゐると云ふ按鹽で喧嘩をしてゐる中に訴訟が段々訂じて、終いには執達吏が来る、一方は差押へをさすまいとして下し筏に二十人も乗るから執達吏が皆溺れる今度は執達吏が告訴する檢事が来て、やった連中は檢來すると云ふ、連れて行くなら全部連れて行け、と云ふので實にえらい騒動でありました云々。」

以上で如何に之の騒動が猛烈であつたかを知る事が出来よう。

扨て本題に戻り。

## 日露の役と出征

三十五年當時既に日露の風雲頗る險惡急を告ぐるものあり、ために軍隊に於ける練兵は極めて嚴格且猛烈なる訓練を敢行され一月、二月の酷寒にもシャツ一枚、作業服のみで演習に次ぐ演習を勵まされ、或時は乗馬のため内蜜にズボン下を用ひない等の事もたまにはあつたが、それでも更に寒さを感じず如何に勇氣のありしかと、精神の緊張し居りしかを、寒さに逢ふ毎に今尙ほ思ひ出す次第である、斯様な連日の軍務に忙殺され、家庭の事など色々と苦慮しつゝもいつしかに三十六年の春去り夏過ぎ秋も逝き一ケ年は無事軍務を遂行して二等兵となつた、三十七年となるや層一層日露の風雲は加速度的に險惡化し遂に二月六日、日露國交斷絶、直ちに動員下令となり、同八日には旅順口攻撃があり、同十日對露宣戰を布告するに至つた、著者も動員下令と共に歩兵第六聯隊第二大隊大行李附として出

征することになったが二時間程の間に變更され相州平塚へ向けて徵發馬匹委員助手を命ぜられて同日午後十一時出發したのである、其當時の市内其他の混雜状態は非常なものであった、平塚にて十日間徵發事務に當り十一日目に馬匹列車の列車長となつて歸名した、然して其後留守隊にあつて、病馬厩の助手に命ぜられ病馬の治療に専心したが此の間同輩の富永輜重一等兵は若干中等教育を受け居りしたため獸醫候補生を志願し結局非常時が幸ひして見習士官相當官となりしも著者は遺憾ながら其學問上の素養に足らざるところありて、爲せば爲し得る身の上ながら切齒扼腕、血涙をのみて日々獸醫助手として精勵したのであつた、かくして其年五月には輸卒の教管助教を命ぜられ留守隊に復歸して輸卒に對する軍務助教の任に當つて四ヶ月を過し、九月十日遂に出動命令を受けて名古屋出發、同月十八

タルニ

日清國盛京省青窪泥即ち今の大連に上陸、それより各地に轉戦、媾和締結と共に明治三十九年一月二十二日名古屋凱旋、西區袋町在延命院を宿舍として召集解除の日迄數日間を部下數十名と過した。次で一月二十六日召集解除され、著者は自己の住む家なきため主家濱木屋へ凱旋したのである、出征中の思い出として忘れ得ぬ事は種々あるが多くは割愛して最も印象に残る事柄に就いて述べれば、小學校の同窓生で且つ親身の從弟なりし佐治伍長の戦死である、これについては昭和二年に設立された二七會（即ち明治二十七年名古屋市高等小學校第二學年同机の者に依つて組織された親睦會團）の第三回發行に掛るパンフレットに記載された私の書翰を以つて示したいと思ふ。

二七會發起人の方々の手により再生した同窓會はぼんやりと過去といふ文字に秘め、忘れはてたその過去をたずね、現在の交誼を暖める所謂、溫古知新の有意義の會とし且不幸にして死亡した我が同窓の靈を慰むる催しと承つて私は如何に感激した事でありませう、そして御送附下されし會員名簿の消息不明欄中に日露役名譽の戦死者佐治藏三氏を見出して遂に今日我等打ち揃ふてその靈を追弔するを得るのも奇しき因縁と考へます、故人について當時の事を頭に浮ぶまゝ筆にしたいと思ひます。

時は日露交戦酣にして遼陽も遂に陥落し我軍は沙河へと兵を進めた、今日と云ふ日も沙河の突撃戦を以て終り、日正に西へ没せんとする時、私は第三師團兵站部の部員として同地を距る南一里半の煙臺附近に勤務致して居りました、そうして御國の爲に之の身を献げて疲弊困憊し切つた負傷兵に握り飯二個と鶏卵一個とを給與致してその勞をねぎ



らってゐました、夕もやはあたりを閉じ夜のとばりを下した満洲の野に立つたこの身はがやがやと忙しく立働らく部員の喧騒の中にあつて、何かしらむなさはぎがして氣が落付かなかつたのです、「おい加藤君じゃないか」と呼ばれてふりかへるとそれは負傷した一戦友でありました、お互に無事を祝して四方山の話に耽ける時第一に友の口を突いて出た言葉は佐治伍長の戦死でありました、名古屋から宇品、宇品からダルニー（大連）ダルニーから第一線に立つ爲に遂に袂をわかつて行つた彼が「お互にどちらが先にやられるかも知れぬが骨はひろつてくれ、又親許へも假令身は死しても草を結んで御國の爲に盡す覺悟だ」と傳へてくれとダルニー埠頭でたてた誓の言の葉、彼の姿、私の頭の中は何かでぐつとおしつけられた様な重苦しさを感じてじつとしては居られませんでした、任務終了後隊長の許可を得て曉明に滿洲の草原に馬を驅つて友に教へられた地点に つきました、それは沙河の會戦で歩兵第六聯隊の最も苦戦した地点でありました、嗚呼、何たる悲愴なる姿でせう、馬から下りて血に採どられた野の小さな草花を摘んで手向け私の手はかすかにふるつて止みませんでした、そこにひざまづいて瞑目合掌し今は

て早や幽明、堺を異にする友の亡骸を抱いて男泣きに泣きました、やっと支那村落にたどりついて茶碗を求め、友への最後の御別れをしました、私は友の死の様子を之れ以上書くに忍びません。

然し乍らこゝに數十星霜を経た今日皆様に友の最後を御知らせ申し上げて、我が二七會に榮光を添へばやと思ひ禿筆を運ばせたのであります、最後に共に故人も生存者も一堂に會し今は昔の思ひ草を、或ひは語り或ひは聞かせて一日を昔の眞の學生氣分で送れる事を過去、現在、將來と永久に忘れざる記念と致すのを誠に喜ぶ次第であります。

これが日露役出征中の思い出の一つである、扨て著者は明治三十九年四月一日に日露役の功に依り勳八等白色桐葉章並に一時賜金二百圓を賜り、皇恩の厚さに感泣した。

著者は出征中大なる負傷、病氣等に冒される事もなく、危険なる場面にも幾度か遭遇したるも兎に角無事に凱旋するを得たるに心の底から之れを喜び迎へてくれる人もなく誠に寂寥たる心中を如何する事も出来なかつた、勿論主人を始め伯父伯母等は喜び迎へては下すつたが其間尙ほ心中一抹の哀愁を禁じ得なかつた。

## 青年時代

再び濱木屋に入りて

在營三ヶ年間、出征中と雖も唯だ濱木屋に歸りて林木業に従ふ事のみを唯一の楽しみと凡てに空想を走らせて歸名し、愈々濱木屋に落ち付き、主家の現状を熟視するに及び意外にも濱木屋の現状は財政上にも營業所も面白がさる状況にて、今日迄の戦地に於ける想像は暁の霜の如く消え去り、その失望、落膽はけだし言語を絶するものがあつた。或る時親戚とも相談し此際主家を退身して自己の方針を立て直さんとまで決心したこともあつたが先輩たる伊藤千吉氏の切なる勸告挽き止めに逢つた、當時伊藤氏の言に、

「目的地は太平洋の彼方と假定し、お互にこの目的地に向つて一同横濱を船出したとして太平洋の荒波の上で君獨り下船すると云はれるのを黙視出来るか、たとへ行く手は難航でも苦樂を俱にして目的地まで到達されたい。」

と懇請され行方は時化か風かは知らねどもお互に運、不運にもあるし、又或る程度協力して努力すればたとへ難局と雖も打開することも不可能でないと考へ直して退身を思ひ止つた、が仕事に従事すればする程凡ての營業上、及び其他の面自からざる点もあり、且つ著者の上には尚ほ河村彦助、政木安三郎、伊藤千吉、相羽恒次郎、渡邊劍次郎、成瀬利三郎等の先輩があつたし暫くの間軍隊生活をしていた關係上實務に遠ざかつていたため、自己の意見を通さんとすれども通されない立場にあつて或る時はむしろ自暴自棄に陥入つた事もあり、然しこの時の行動に對する主家の寛容な執成と先輩各位の庇護とに依つて解雇もされず又暇もとらず、月日を送つてゐたのである、三十九年七月普通ならば直接主人と對座は出来ないのであるが親戚へ來られたのを機として長時間對座的に營業方針に就て自己の抱蔵する意見を吐露した、即ち主家のこの難局を打開するには山林事業を置いて他になしと力説進言した處主人も若輩の言をよく了解され然らば君の言を用ひて山林部へ出掛け出來る限りの努力をして欲しい、依つて山林事業で成功すれば特別賞を出すとまで言はれ

ひだのくにまじだくんまぜむらあさしちやまあつたに

勇奮躍如として飛驒國益田郡馬瀬村字下山厚谷の濱木屋出材事務所へ向けて出發することとなつた。時に明治三十九年八月お盆の前であつた。主人夫妻はせめて盆をすませてゆつくり休んでからにしてはと温い言葉を向けられたが既に意中決するところのあつた著者は

「商人が家を一步出ずれば武士が戰場へ出るのと同じである、なんぞ盆も正月もあらんや」

と當るべからざる大勇猛心にもえつゝ出發したのである、現今とは異なり交通不便なることは名状すべからざるもので、文字通りの深山幽谷、峨峨として切り立つ岩山、千仞の谷石塊の小径、想像はしてゐたるも少くとも濱木屋出材部と堂々と刷り込んだ封筒等を用ひられてゐるから、多少みられる社屋もある事と信じて登山したのである。

### 困難なりし登山

輕装に身を固め早朝名古屋市東區清水口迄徒歩にて出掛け清水口乗合馬車出發所にて馬車に乗者犬山に向ふ、犬山より鷓沼に渡つて之れより再び馬車便によつて太田迄出で、此處で仲繼ぎし下麻生へ夕景に到着する。翌日は下麻生より徒歩にて荷物を肩に振り合け、シモアソウ「七宗」越入をなすのである、(七宗は當名古屋より一番近い御料林で極めて立派な美林である)下麻生から飛驒金山迄八里二十六丁の道程があるが平地でなく峻阪、急阪の連続で

あり、峠の如きも小徑とは云へ殆ど岩石露出の部分が多く、歩程容易に抄らない、眞夏であるし阪道で暑い砂ぼこのサクサクの道を辿るのだから全身びつしよりとぬれぬところない位に全く流汗淋漓の文字通りの汗まみれとなつて目的地に向ふ様は今想ひ出しても良くもあゝした難行にこらへながら歩いたものだと懷舊の念に堪へない、然し林木に生き、林木と共々の暮しを我が信條と心に決し尙ほ新しき事業に對する意氣込を烈々と燃へ立たせてゐたから、難コース何者ぞと苦しみをじつとこらへながら山路をたどる。

現今では下麻生邊りから飛驒金山を経て下呂近在迄、又それから遠く飛驒金山迄は絶景天下に名だゝる觀遊の勝地で車窓からの眺めは右に左に應接にいとまなき飛驒川、益田川の清流を見るのだが、この頃は勿論汽車の便があるう筈なく、自動車も都會に於てさへ稀に存在する程度で凡ては足が最大、最強の交通機關であつた、最近著者が商用で飛驒高山ひだたかやま或ひは遊山に下呂等へ出掛ける時、車窓から過去の自分の姿を森陰に見出す様な幻影をしばしば眼前に見る、そして秀でたる山肌、勝れたる樹林、山水畫に見まはほしき風景を眺めて、それが曾遊の地でなく、苦難の道の一つであつたと思ひ實に何とも名状すべからざるメラノコリーにひたる、同時に過去の一頁に終生忘れ得ざる苦しい想ひ出を持つ自分に

ほゝゑましいいたはりの氣持を持つのである。七宗御料林の實に立派な立木の間を暑さを  
しのぎつゝ越へて行く、はるかに飛驒川の急湍が寛達な濃尾の平野へいそぐ進軍の響を立  
ててゐる、重疊と織りなす山々は雄大な姿もて我が苦行の道をじつと見つめてゐる、目的  
地たる益田郡馬瀬村字下山厚谷は未だこれより深い山々の間にあるのだ、遊山の自分ではな  
い急ぎの旅をかこちつゝ歩を早める、滿洲の荒野を幾轉戦、荒れに荒れまはつた自分だが  
眞夏の山路は流石につらい、足には底豆を生じ、草鞋三足を費して漸くにして飛驒金山の  
宿へ引づる様に着いたのが午後七時である、飛驒金山では先輩相羽恒次郎氏の案内で井桁  
屋に投宿することを得た、足の痛み、疲労其極に達しその苦痛はたとへ様がない位であつ  
た、金山の宿は馬瀬川と益田川とが合流して飛驒川と名を變へる分岐点である、益田川は  
遠く信濃と飛驒の國境御嶽山の西北隅を源とし灌流下るに従つて愈々早く野麥峠をはるか  
に眺め、渚、小坂と經て益々急湍の姿を整へる、その外無数の小川を合して上呂、萩原中  
呂、(禪昌寺)、下呂邊りから有名な中山七里の溪谷美を見せて金山まで、この川の思  
恵は限りなく飛驒の國々に幸をおしみなく與へてゐる。一方西の方馬瀬川はその本流を  
飛驒の國大野郡清見村のあたりに發して大原の寒村を過ぎ、川上、芋島、黒石の邊りより水  
嵩も増して馬瀬川の南北七里にわたる山野を下り、郡上郡に入り祖師野より和良川を合し  
て一氣に金山へ奔流の勢ひは強まるのである、かくして金山でこの兩川合せ太まりて飛驒  
川の本流となる。金山の宿で充分昨日の疲れを休めた著者は、荷物は馬車便に託して深谷  
經由送荷をなし身輕と、なつて跛をひきつゝ出發、馬瀬川に沿つて祖師野、相原と郡上の  
地を遊行して五里、卯之原新田と呼ぶ僻村を最後として飛驒の國へ入り、痛む足をふみし  
めながら下山村へ着いて、休む間もなく山の事務所へ愈々急な胸つき一里を辿るのだ、今  
までは縣道乃至郡道で道らしい道を通つて來たのだが、之れよりは道はなく、文字通りの  
草を分け、木をよじて岩にすがり難行せねばならぬ、途中に不動瀧といふ瀧がある、こゝ  
に於て先輩相羽氏曰く

「この瀧の水は動いているが不動瀧である。君が山を登り事務所に入ればどの様な苦勞  
があらうとも、動かざる事不動の如しで水は動くが身体は動かすな。」

此の言葉を心に銘じつつその瀧を右手にエス字形を描ひて山を登る、斯の如き深山に人  
家の果してあるかを疑問として登る事一里餘にして人家二戸あり、事務所の所在を聞くに  
其處にあるといふ、これが厚谷の事務所である、みれば彼方に丁度芝居で觀る大安寺堤の

蒲鉾小屋に等しい一戸がある、入口には蕙がつるしてある。之れを眺めた時の心中は唯だ驚愕あるのみであった、まづ蕙をあげて入れば七十餘の老人が居て

「帳元さんよく来て下さった」

まづ上つてくれとの事にみれば蕙とは名ばかりの黒ずんだものが並べてあり、そこへ出された茶が何とどうも其色はむしろ黒色、茶碗は茶澁に染り何とか飲まんとすれども咽喉に通らずといふ有様、茶釜は諸所缺けて古色蒼然たるもの、自在鍵も亦よくもすゝけたものだといった形ちで、言ひ知れぬ感じを受ける、次で奥の間に案内され、中の間を通つて入れば六疊位の一室で、疊とは名ばかりにて下には粗朶を積み、その上に薄べりが敷かれてある有様である、待つこと暫くにして事務員等一同が下山して来たが、其挨拶が亦頗る嚴格で秩序整然たるものがあるのに異様な感じを受けた、即ち山法さんぽうとて之れは尾州徳川藩時代以来の美風が尚ほ現存してゐるもので其の階級制度の嚴然たるは他に類が少ない、夜となつて、さて就寝しようとするにこの三日間も續いた難行程に身体は綿の如く疲れ切つてゐる事とて熟睡する筈の處、心が緊張してゐる爲か、谷川の永瀬の音と農家の水車の廻る音とが耳について眠れず、且つ蚤が身体を持ち上げる位多く、到底一睡も出来さうに

ないため止むなく深夜米俵の上に枝を並べて寢具を敷き眞裸で再び寢についたが之れでも一睡も出来ず白々明けを迎へた、翌日は朝食も疲労と不眠のため少し食べたのみにて半病人の状態で寢込んでしまつたのである、之れが登山第一の苦しみであつた。

次いで山の事すべて見るもの聞くもの、事毎に想像外の事のみで又食物の粗悪なること言語に絶し、味噌、荒布、豆位が主なる副食物で米の粗悪なこと、煮物等も殆ど食鹽のみで味つけをするので、これ等の経験なき著者の苦痛は格別であつた、一方事務の上から觀

あめのみ

ても殆ど文盲で自分の想像とは雲泥の相違である事にも驚かされた。山仕事の順序は風呂

いせんまは

たき、飯たき、菜煮、食器の洗廻し等を一日、二日やり、それが終ると山へ行き不參廻りする、切判切りもする、それから初めて目拾ひとなり次いで帳簿の整理、その次が帳元となる、かくて金銭出納を取扱ひ元締代となる順序である、著者も將來人を使役する立場になるには一と通りはどの仕事もやっておく必要があるとて慣れない仕事のため誠に苦痛であつたが十日間程は無我夢中で過した、が如何にしても居たたまれないので名古屋へ歸つてしまつた。さうすると主人や先輩に意見され再び苦しみに堪へやうと覺悟を呼び起し勇を鼓して歸山したのである。

歸山の途次著者は林木業を斷然癡めやふと飛驒川ひだの巖上(下山村釜と云ふ名稱の場所)に座して三時間あまりも色々と苦慮したこともあった、が自己の初志を思ひ、先輩各位や、御主人の言葉を想い起こして決然と山へ向つた、入山後は一生懸命に仕事に従ひ、一ヶ月、二ヶ月と時の経過と共に自分の職務にも趣味を生じ、粗食も蚤の苦しみも事業上の希望に燃ゆる氣持から、進んで如何なる困難にも打ち克つて進まふといふ勇猛心を奮起こし、山の跋涉も反對に愉快となつて來たのである、斯くして山仕事に精勵しつゝ九月の秋彼岸頃より順次土入れをすまし馬瀨川ませの急流を莊嚴雄大な響をたてゝ自分の伐採搬出させた木材が管流する様になりその時の感慨こそ實に言ひ表し得ない愉快さであつた、身は帳元、元締代として尊敬され、村々に行つても歡待され、頗る滿悅の氣持ちとなつて將來立派な山林伐出業者とならうと一層精勵に精勵を重ね幾多の苦心、慘澹たる努力の結果枕木一萬三千挺、木材尺々三千五百本を流下した、これにより約三千五百圓餘の純利益をあげたのである、この時の投下資本は五千五百圓であつた、そこで著者は主人に次の様に申出た

「事業の究極の目的は儲けにあるから仕事の途中で先輩や其他の意見は充分聴くが事業上に兎や角と容喙ヨウケされることは喜ばない、自分の心魂を打ち込んで儲ける事に一意努力

する考へであるからそれを許されたい、投下資本に對する儲けは少ないかも知れぬ且つ事業も小さいが階段は一段一段と上るべきで小刻みに目的地へ進みたい、それ故に本年の利益の内來年はその純利益だけ資本に加算してほしい、今假りに六千圓の資本に三千圓の利益金が上つたとすれば尚三千圓を加へ合計一萬二千圓を仕込金としてもらいた

一五

この進言を主人は認められて、前述の五千五百圓の投下資本に三千五百圓の利益と更らに右の承認に依る加算金三千五百圓、計一萬二千五百圓の仕込金を以て明治四十年は計畫を進め岐阜縣益田郡中原村字久能川を中心として火打、美濃國加茂郡佐見、黒川方面に於て枕木を主として多少の松、杉、檜、樅等を伐出し四十年度は約五千圓程の純益をあげ得たのである。茲に於いて主人は非常に之れを喜ばれ次年度の四十一年も一層の活躍を望まれ

たとへ借金をしてゝも仕込みをするからと鞭撻の言葉を受け勇躍恵那郡福岡村柏原を中心  
泉なくんぶくおかむらかひばり  
に黒川、蛭川、東白川等で従前の如く枕木を主とし杉、檜、松等の伐出を行つたが此の年は不幸にして一ヶ所山の觀測を誤りしたため損失はなかりしも不成績を招いた、即ち二萬二千五百圓の仕込金に對し純益金僅かに二千八百圓であつた、之の成績状態に依つて著者は

山林伐出事業が順風に帆を孕むが如く行くものではないといふ苦しい體驗を得たのである。

## 主人の急逝

明治四十二年には前年の屈辱を注ぐ大決心のもとに岐阜縣加茂郡佐見村字稻田に於て山林事業を開始し、事業も順調に進行の緒につきしに悲しむべし、好事多魔の例に漏れず四月四日主人の急逝の悲報に接したのである。

この急電に接し急遽歸名葬儀萬端も相濟んだが相續者貞次郎氏一身上の種々なる千系上多少の紛叫もあり、旁々濱木屋は組織を變更する事となった。

## 濱木屋

### 合資組織となる

この組織變更に當つては材摠の主人鈴木摠兵衛氏が色々干與、教導されて合資會社を設

立する事となった、資本金は二萬五千圓で先輩政木、伊藤兩氏が代表社員となつて著者は五百圓の出資社員として再び佐見村さみの事業をこの苦境の内に經續することとなった。

かねがね主人との間に前記の如き一つの堅き約束が交されてあり、それに基いて事業上に努力の限りを盡して來たのであつたが、柱とたのむ主人の急逝に逢つて挫折に近づいた事が何としても殘念に堪へられなかつた、が之れも一つの因縁と諦め一意恵心事業に盡瘁したのである。

「編者附記」明治三十九年著者凱旋の年より明治四十二年濱木屋合資組織に至る四ヶ年間に於ける世情一般に就て附記すれば。

明治三十九年三月鐵道國有法が公布せられて明治四十年末までに主要線十七鐵道、開業哩數二千八百二十二哩の買上げを決定。越へて同三十九年五月鐵道五千哩祝賀會が開催された。年末たる十一月に至り南滿州鐵道株式會社設立され、株式公募數九萬九千株に對し應募數は實に千七十倍たる一億六百七十三萬株に達し誠に稀世の盛況であつた、特に五圓の申込證據金領收證が四十二圓見當をもつて盛んに賣買されたといふ事で戰後景氣の熱狂振りはもの凄しい限りであつた。明治四十年は之等熱狂の反動が現はれ一月下旬

の東株新を初めとして諸株の崩落を端緒として金融界は不圓滑となり三月に至り銀行恐慌勃發して東京から關東一圓に蔓延し次で名古屋地方、九州、北陸に波及し銀行の破綻續出す、之の悲況は四十二年末迄持續された。此の年の二月に豊田式織機株式會社が設立されて斯界の注目を集めた。明治四十一年に至り十月一日戊申詔書降下あらせらる。これより先き八月には東洋拓殖株式會社法公布の事あり、此の年は金融不安去らず、銀行の破綻も續き時の桂内閣は時局收拾、材界安定の建前上、財政計畫五ヶ條を發表し、非募債主義の嚴守を聲明せり。明治四十二年には一月大日本精糖會社の不始末曝露し（所謂白糖事件也）續いて大日本水産、東洋汽船、實田石油、日本倉庫等大會社の失態が踵を接して起り、財界再び震撼す、十月一日には戊申詔勅煥發あらせらる。十月廿六日には伊藤博文公ハルビン驛頭に於て朝鮮人安重根に刺殺され我邦朝野憂愁に閉さる。尙ほ三十九年以來の打續く豊作の結果、米價は本年末十一圓に低落し、農民は豊年飢饉に苦しむ。

名古屋市としては明治四十年には熱田町を名古屋市に合併し今日の大名古屋發展の端緒となる、此の年市廳舎焼失す、四十一年には名古屋市を東、中、西、南の四區に別つ四十二年水道起工式擧げられ、市役所新築竣工す、財界關係としては明治十七年七月設置されたる名古屋區材木商營業組合は何時とはなしに組合の活動力鈍り、明治二十六年末頃よりは有名無實の商團となつて何等の脈絡統一なく自然消滅の状態なりしも、時勢の推運は獨り名古屋財界の情眼を救さず、三十九年十月九日鈴木摠兵衛氏、服部小十郎氏、長谷川武七氏、長谷川糾七氏、熊谷常光氏、半谷新助氏、水谷又吉氏等七氏發起の下に重要物産同業組合法に依る同業組合設立發起人の認可申請を爲し翌年四十年四月四日付愛知縣知事深野一三氏より認可を得、同年九月十二日名古屋商業會議所議事堂に於て創立總會を開いて定款を議定し、組長以下役員の選舉を行ひ、同月二十七日付を以て時の農商務大臣松岡康毅氏に設立認可申請をなす、越へて四十一年四月二日附設置認可の指令に接し、事務所を市内中區正木町乙七十七番戸に定め「名古屋材木商同業組合」と號して五月一日より組合事務を開始せり、之れ實に今日の名古屋材木商工同業組合の礎石をなしたるなり。

創立當時に於ける組合役員は左の通り

組長

鈴木摠兵衛



副組長 服部小十郎  
出材部長 深谷竹三郎

同部評議員 熊谷常光 前島支店 日下部支店

吉見徳四郎 吉村喜兵衛

問屋部長 名古屋木材株式會社

同部評議員 高濱與七

小賣部長 長谷川武七

同部評議員 水谷又吉 半谷新助 大鹿梅三郎

上井儀助 富田彦吉

然して當時の組合地區は

名古屋市一圓、愛知郡の内八幡村、千種町、愛知町、呼讀町であつた。

組合の業績の二、三を擧ぐれば、

明治四十一年十月二十日、明治四十一年より同四十六年四月に至る滿五ヶ年間に於ける綱料を明治三十六年四月二十六日解決書に基き、米價を標準として左の如く協

定を爲す。

綱料及桴組立費犬山鵜沼に至る乗下賃總て明治三十六年決定額に比し四分七厘七毛〇八を増やすこと。

同年十一月一日、木曾川筋乗下桴取締の爲め美濃國笠松町に臨時出材部出張所を設けて開所。

同年十一月三日、三重縣伐納稅所業務執行規則及び熱田桴扱所業務執行規則を制定す。

四十二年九月一日、名古屋材木商同業組合積立金規則制定さる。

### 東北材に着目

本題に戻つて、濱木屋として總資本金一萬五千圓にては事業遂行上誠に困難であつて度々苦しむ事があつた、が然し其當時名古屋財閥の錚々たる鈴木摠兵衛氏が所謂顧問の立場に在られたので、營業は何とか繼續することが出來た、成績は上らず堅實一方の營業方針で進み無配當或ひは一朱、三朱配當を續けて内容の充實に努めた、斯くて當時農商務省が青

森の大林区所管内の國有林で官行斫伐を爲したが抄々しく賣れず置場に大變困つて居た様であつて、その事情は著者の先輩岡本直次郎と云ふ人が濱木屋の山林部勤務にして居られたがある事情に依り退居せられ農商務省の雇となり順次登用されて青森大林区署の技手になつて居られた、その人が一度歸名されて色々青森方面の事情を聞き非常に有望なことと考へた、當時既に鈴木摠兵衛氏並に永田金三郎兩氏が青森縣津輕、南部各所拂下げを受けられたとの情報を聞いて此の方面へ出向きたいと考へたが前述の如き財政状態で積極的に遠方へ出られず躊躇して居たが、四十三年一月十五日に至り局面打開を企畫し岡本直次郎氏を頼る考へで同業者小出平藏氏と共に名古屋を出發した。その時は帝室林野局名古屋支局長磯山氏の御添書を戴いて青森大林区署に出頭し署長永田正吉氏に面接色々承ると岡本氏は不慮の死を遂げられた後であつたが初志通り津輕一圓及南部方面を視察した恰度其の時鈴木摠兵衛氏の店員の宮田さんに青森市の宿舎でお目にかゝつたが同氏曰く、

「君は一步遅れて來たのだから既に有望箇所は拂下済に成つて居るから止めたらどうです、強いて行くなら随分危険だから戒名を首にかけて行き給へ」

と云はれた、が折角來たのだから、一應は視察すると云ふので愈々行くことになつて積雪

背を没するといふ中を櫓に乗つて非常な困難と闘い蟹田、かにた内眞部、うちまんべ三厩野、みまいの小泊方面を視察したが何れも鈴木摠兵衛氏、永田金三郎氏等が拂下げて居られたし、小館木材株式會社も拂下げを受けた後だったので津輕方面では何等得る所なく直に青森大林区署へ歸つた、其處で當時營林課長であつた安浪榮藏氏から色々情況を聞き、下北郡の川内町及大畑村方面へ出掛けることゝなつた、が川内も材摠が拂下げを受けた後であり、次で大畑に着眼して、行つて見ると先づ自分の目的に近い材木があり且つ大畑でも非常に喜ばれて

「よくやつて來て呉れた、是非出來る限りの便宜を計るから、これを買取つて呉れ」

といふ話で、大畑には四日間滞在して海岸積取の具合或は汽船回航時季等を調査した、其の時が恰度二月二日と記憶してゐる、そこで拂下値段の点であるが自分の算當と役所の豫算とが一致せぬ、依つて役所の方でも公賣に附される事となり二月下旬公賣を執行せられ結局濱木屋と秋田木材株式會社とが拂下げを受けた、數量は一萬五千石程の檜葉丸太であつた、これが東北材に手を染めた第一歩であつた。斯くて明治四十四年末迄第一喜佐方丸、

磯辺丸、第二十七觀音丸、彌彦丸、盛祥丸、等をチャーターして檜葉丸太を主として名古屋

へ輸送し相當の成績をあげたのである。その間青森檜葉と前後して松島に野々島と云ふ島があつて、その島に貯材してある松角を六千尺締程拂下げを受けて名古屋へ入れた、俗に三陸の松と云はれるもので相當立派なものであつた、尙ほ當時青森大林區署に於ける檜葉材の拂下單價は一石一圓八十錢内外であつた、運賃及び諸掛は名古屋の尺締に直して、尺締一本一圓八十錢見當で、販賣値段は尺締最底四圓位から六圓五十錢見當迄位であつた、檜葉材の主な用途は中味は殆ど枕木、橋梁、橋板に使はれ、背板、端切れは現在の木取商及建具屋に賣つた、が青森檜葉が一時的に名古屋へ移入され一種の流行的用途擴大し檜背板、端切れ類の値段と殆ど同一になつたと云ふが如き珍現象を示した事もあつた、其後漸次青森、秋田、東北方面または東京方面迄買氣が兆して、拂下豫定價格も騰勢を辿り、明治四十五年末に至つては名古屋市場に引合はなくなつて、濱木屋も時こそよけれと全部打切つてしまつた、其時著者は商人は見切と云ふ事が非常に大切だと云ふ事をつくづく考へさせられた、即ち四十五年以降繼續して居られた方々は（名古屋として）意外の損失をせられたからである。

## 再び美濃飛驒材に從事

### 及び渡鮮渡滿の事

歐洲大戰後の好況時代

東北材は前述の如く明治四十五年末を以て打切り、再び美濃、飛驒木曾方面の山林事業に一意専心従事したのである、大正三年セルビアの一青年がサラエヴォに於て放つたピストルの一發から歐洲の天地を覆した歐洲大戰の幕開きとなり財界一齊に驚天動地の大好況活躍時代に入り、濱木屋としても成績頗る擧り、資本の運用も亦功妙を極め、大正四年には飛驒ひだのくにましたくんませ國益田郡馬瀬村にて十一ヶ所約四萬五千圓の不要存置林の拂下げを帝室林野管理局より受けるに至つた。之の拂下げに就いても色々苦心のある處であるが、結局主家の窮狀を東京の帝室林野管理局業務課長に開陳して同情を得、特別敏速なる手續きを受け大正五年より伐出に着手し之れによつて五萬五千圓の純益を計上した。この時の山代金は二ヶ年の延納が許されてあつた、この頃より愛知銀行渡邊頭取、鈴木、寺島らの重役に同情を受

け愛知銀行より多額の公債を借り出して居った、其金額は九萬九千圓であつた。

當時銀行當事者曰く

「無擔保で多額の貸出しをしてゐるのは大隈鐵工と濱木屋のみである」

と、然し乍ら今其當時を追想するに現在の智慧、才覺があつたならば尙ほ相當な大事業が遂行し得られた事であるうに何分にも若輩なりしたため意の如き活動の成らざりしを遺憾に思つてゐる次第である。

斯く困難のうちに努力を重ね鐵道省からも非常に同情を得た、即ち鐵道省が未だ汐留に本省のおかれてあつた明治四十三年當時傭船の契約のため滞中京鐵道省に於て法學士米原米次郎氏が木材について教示を乞はれたので著者は各材種に於いて産地、規格、木質其他詳細に亘つて自分の知れる範圍の事情を説述したがその代償といふ意味か、以心傳心でもつて枕木の注文を受けたものである、そこで汽船の引合は第二義的のものとなして連日鐵道省へ詰かけて濱木屋の現状を訴へ同情を得、相當多量の枕木類（橋梁用ポイント用）の注文下命を受ける事が出来た、即ち當時の官吏は所謂弱きを援けるといつた勇氣が多分にあつて、濱木屋の現状に對して深甚なる同情を寄せられて好意的援助を致されたのである

此の鐵道省納材に就いては材摠さんと結局競争の様な立場になつて、内面的には色々親密であつたが對外關係では所謂男らしい商戦を續けたのである、而して大正五年頃には成績頗る顯れ世の中から漸く認められて來たわけである、その間大正二年一月に朝鮮總督府鐵道局へ納材すべき橋梁用枕木（九尺九インチ角、十尺十インチ角金額約十萬二千圓）の受渡しの爲渡鮮することとなつた。

これは入札に依て新宮商行が落札しその下請けを材摠、長谷川、丸ヨ、永田、濱木屋が合同で受けたのであつて著者が日露戰爭に依り渡滿、渡鮮の經驗ありし爲撰ばれて總代理として渡鮮したのである。斯くて仁川港に於て無事任務を遂行した、其歸途鴨綠江材に就て研究すべく思ひ立ち今年四月當時の支那安東縣迄引返し採木公司以約一週間に亘り調査研究を爲したるも當時の清國の木税と、日本の輸入税の關係上採算點に達せず止むなく鴨綠江材に就ては思い止まり、奉天、大連等の市場の視察並に滿鐵沙河工場に至り納材指定人の運動をなして支那汽船にて安東縣へ戻つた、そして朝鮮各地を視察して歸名した。

この旅行中印象の深かつた事は日露の役で約三ヶ月間滞在した事のある、滿鐵本線沿線の煙臺驛西南蒲草溝に於て支那人の舊知を訪問した處非常に喜び大いに歡待を受けた事であ

った。この間著者は青木謙太郎氏、鈴木摠兵衛氏等より絶大なる信用と殊遇を受けた事は終生忘れる事の出来ない鴻恩と今尚ほ深く肝銘してゐるのである。

## 加藤式伐出法

昔時の木材伐出擔當者は主家を思はず唯私腹を肥す事のみ汲々としてゐたので事業の多くは不結果に終りしものがあつたが著者は我流で以て之れを改良した、即ち時流に即した方法を獨創で斷行したのである。

明治三十九年から大正四年頃迄十ヶ年間は材摠を初め、長谷川、前島、吉見、吉村、吉長、長瀬(竹忠)、犬山の舟木屋、松永源右衛門、細江宇吉(沖村屋)、村瀬八重八、其他の山林業者が多數あつたが、その大部分の人々の行動は古來からの習慣とは云え恰も大名のその如く贅澤の限りを盡したもので實業として斯様なことが永續さるべきでないと思はれた、儲かる事業も何れは儲らぬ時代が来るに違いない、だがその儲かる事に安んじて斯の如き行爲をしたならば破滅である、商賣とは斯の様なものではない、今こそ濱木屋は從

來の營業政策が多少拙劣であつたがために力が無くなつてゐるが、其の内に世の人々を「アツ」と言はせねばならぬと考へたのである。

此の當時の入山振りを見るとまづ名古屋から人力車によつて出發した如くみせて遊廓で一日、二日豪遊をなし夫れより犬山に於て又遊ぶといつた有様で人力車も二人挽き三人挽きのお抱へ車夫で、宿に着けばその宿を買切り、土地の関係者、宿の人々は遠く迄出迎へさせさながら大名式である、給仕女の如きも遠くから之れを特に招いて侍べらせたもので夜は賭博、大散財を盛に行つて金錢を湯水の如く費消したのである、著者は明治四十年頃より獨特のやり方で之れ等先輩者の逆を行き、まづ人力車には乗らずに歩く、宿に着いても當時材木屋仲間の寄附でもつて作つた立派な部屋があつたが特に之れを避けてなるべく悪い部屋を使い、宿泊料の如きも安く掛合ひ、時には宿の手傳ひまでもして冗費の節約に努めた、勿論出掛ける時は腰辯である、一般の山師はその様に驕りに長じてゐたが古諺に言ふ「驕るものは久しからず」でその結果は今日よく現われてゐる。之れ等の人々の逆を行つた著者の態度と同じ行き方をした人々に、松永源右衛門氏、犬山の舟木屋、岡田長作氏の嶽父等の諸氏があつた、兎に角著者は極端なる質素の方法で刻苦精勵し一意専心主家

のために努力したのである、大正三年にはオリンピック號と云ふ自転車を買求め山の見廻り其他に大いに利用して山又山を馳け廻ったのである。ある時は未明に飛出して山を出發し五時頃岐阜に着したこともあり、又或る時は郡上の八幡から最も峻険なことで有名なほろこじ堀越峠の難所を自転車をかついで郡上郡祖師野村より美濃金山に出るが如き又金山よりまぜがわ馬瀬川沿道を遡上し山道を馬瀬村迄自転車で夫々事業地を見廻ったこともあり又川狩期みのかなやま節に木鼻、木尻を早朝見廻る必要の生じた時は美濃金山下流飛騨川沿岸の相當の悪路を最寒の候に朝食前に四里の道を突破した事もあって實見者に驚異の眼をみはらしたことであった、その刻苦勤勉と活動の激しかった事は到底想像の及ぶところではない。こうした極端な質素、精勵刻苦する有様が大正三年頃より弗々と世人の注目するところとなり、之れが鈴木惣兵衛氏の耳に入り頗る信任を厚くし、

「君から申し込まれたならば何時にても資本を出す故一生懸命努力されたい」

と、鞭撻、賞讃の言葉を賜った。この事は當時名古屋財閥一方の雄たる鈴木惣兵衛氏の口より出た事なので勢ひ銀行家の耳にも入り對外的信用を得、銀行に關する事はすべて材總に聞かれないといふ遣方をとつて一層社会的信用を厚く、強固にする事が出來た。其他細

かいところに迄注意を拂ひ、山師の習慣としては多く山の仕込みは高山、金山、岐阜等で米及び其他即ち山で必要な物資を購入してゐたが、著者は大正五年に不要存置林の伐出に着手した時などは人用の物資を全部名古屋で購入して直送した。之は即ち山方乃至は岐阜で物資を購入すればその量で山仕事の状況が判るから之を防ぐ爲め名古屋で仕入れたのである、こうした些細な點迄配意して目立たぬ様質素に事を運び、内實は着々と大事業を遂行して行つたのである。

川狩の状況を眺めて

世人は一驚、注目す

斯の如く苦心に苦心を重ねて努力のすべてを捧げて事業に盡瘁し愈々川狩を始めた、茲に於て始めて世人の注目の的となり且つ驚きの目を以て迎へられた、伐木事業中は他の人の如く驕りに走らず頗る質素な方法で少しも人の目につかなかつたものが伐木が愈々川狩されるや誠に立派な材木が多量（約尺×壹萬五千本）續々と流下され、金山を初め下麻生かなやま  
しもめそう

高山邊りの評判は素晴らしいものであった。

事業は順調に進み大正六年には木曾で拾萬圓の山を買ひ、郡上・飛驒方面でも買い出し、郡上川、飛驒川、木曾川の沿線一圓凡てに亘って伐出を初めて、時期もよかつた關係もあらうが大成績を納めた。

この頃に至つて山の風潮、思想が漸次質實に變つた様である。即ち實業である以上驕るものゝ永續するものでないといふ事が自分の趣旨であつて、その通り實行して之れが多少でも山の風潮に好影響を齎らしたことは欣快であつた、要は質素に地道に事業を遂行するものは最後の勝利者となるといふ事を實證したわけで、常時驕り長じられた人々は現在に至つて山林事業に雄飛して居られず、どちらかと云へば衰退の道を辿られてゐる様である

## 壯年時代

### 濱木屋株式組織となる

大正四年から五年へかけて歐洲大戰の影響でインフレ景氣、大戰景氣は旺んなもので、

一大ブームを現出し、濱木屋も順風に帆をあげて事業益々隆盛に向ひ、尚ほ前述の濱木屋の相續者伊藤貞次郎氏は都合上別居退身せられ大正七年三河西尾町の舊家外山家より女婿を迎へられた、現在の濱木屋社長伊藤千里氏であつて、意志堅固温厚にて最も良き女婿であつた。この千里氏の許に諸員一致協力の結實は遂に大正九年に至つて資本金六十萬圓（三十萬圓拂込）の株式會社組織とする事が出來た。此處迄の苦難、努力は吾れ人共に筆紙に盡し難く、時勢の推運に依るところも亦大であつたらうが前述の如き幾多の泪の慘む様な辛苦の結果であつたことを想ひ切々と胸に迫るものがある。

「編者附記」濱木屋が合資組織となつて事業に更新の氣力が加はり、順調なる發展を遂げて株式會社となる迄の、即ち明治四十三年以來歐洲大戰休戦に至る間の世情一般、政治、經濟諸狀勢の主なるものを擧ぐれば

先づ名古屋市に於ては明治四十三年に第十回關西共進會が現鶴舞公園附近一帯に華々しく開催され、當時としては畫期的大博覽會の事とて内外の視聽を聚むる處となり、大名古屋市の發展は此の年より加速度的に進みたり、此の年は更らに名古屋で開府三百年記念祭が開かれ、共進會、記念祭と洵に素晴らしい大賑ひを見せた、明治四十四年には

中央線全線開通し、名古屋市に於て之が全通式が舉行せられて、國鐵の躍進を謳歌した事であつた。目を轉じて國內の狀勢に就いて觀るならば、明治四十三年年初政府は議會に工場法案を提出、政友會は之に反對、ために政府は案を撤回せり、五月、幸徳傳次郎大石誠之助、森近運平等の所謂大逆事件起り一世を震撼せしむ、八月廿二日韓國併合條約調印し朝鮮は吾が版圖となれり、初代朝鮮總督には時の寺内陸相兼任せられる。四十年は外資の輸入旺盛にして爲に金融は緩漫、東西銀行に於てシンジケート組織され、四分利整理公債發行の事あり内債借換に成功す、之れ即ち我國「金利の革命」と云はれる處なり。明治四十四年一月大逆事件の判決下り、幸徳、大石、森近等十二名は死刑、乗松與二郎、岡本穎一郎等十二名無期懲役言渡さる、同年三月工場法公布、同法は明治四十五年六月より實施豫定の所延期されて大正五年より實施さる、八月韓國銀行を朝鮮銀行と改む、十月十二日支那革命黨の亂興り、紡績業動搖、相當の影響を受く。同年は通商條約の改正行はれ、これより國定稅率時代に入る、然して改正稅率においては保護主義が採入れられる、この年の邦商の貿易取扱高輸出五二%、輸入六四%にて貿易の實權は從來外商の手にありしもが邦商の手に歸す、明治四十五年二月十二日清國宣統帝退

位、中華民國假政府成立、我が各地紡績會社中支那動亂終止と中華民國假政府出現に依り増資するもの多し、六日に至り米價騰貴のため各地貧民の窮狀を報ずるもの多く、七月之れが爲細民施米及び原價賣買米の鐵道運賃五割引實施せらる。

七月三十日

明治天皇御崩御被遊、國民齊しく憂愁に閉ざされ名狀すべからざる沈鬱哀借の念に打たる、大正天皇御踐柞被遊、大正と改元。

大正元年九月十三日

明治天皇御大喪、乃木大將夫妻殉死せらる、同十二月二日上原陸相はニヶ師團増設を主張し、閣僚の容るゝ所とならず、單獨拜謁辭表捧呈す、越へて同月五日西園寺内閣は後任陸相を得る能はず、總辭職、即ち陸軍全體がニヶ師團増設に決定したるためなり、依つて翌日より元老會議數度開かれたるも後任首相難に陥る。同十九日には憲政擁護大會開かれ朝野の議論沸騰す、廿一日に至り第三次桂太郎内閣成立、本年の經濟界の大勢は外資輸入杜絶し國際貸借全く逆調を示した、入超一億圓に達し外債の利拂政府民間の分を合して八千萬圓に上る、依つて正貨の流出多く、日銀の正貨準備の維持問題朝野識



者の深憂するところとなる、金融もまた逼迫甚しく下記には銀行會社の破綻多し、その裡著名なるものは九月下旬資本金二千九百萬圓、關係會社八十社に及ぶ才賀電氣商會の破綻なり。大正二年は政治界の動向が幾變轉を示したる年にして一月十七日憲政擁護全國記者大會開かる、同二十日桂首相新政黨組織を發表す、同廿一日議會は停會を命ぜらる、二月五日衆議院に於て内閣不信任決議案付議、爲に議會五日間停會となる、同七日桂首相の新政黨立憲同志會宣言書發表、翌八日桂内閣は西園寺公に會見し時局收拾を依頼翌九日西園寺公宮中へ召され、時局收拾の敕語を賜る、同十日政友會は西園寺公の勸告を容れず、不信任案を以て邁進する注意を示す、依つて議會は三度三日間停會を命ぜられ、帝都騷擾時局益々紛糾す。十二日山本權兵衛大將に内閣組織の大命降下す、同十九日政友會は山本内閣を援助するに決意す。之れに依り政友會と憲政擁護を共にしたる國民黨は政友會と提携を絶つに至る。五月三日米國加州排日土地法案兩院通過し我國は八日第一回對米抗議をなせつり、六月十三日陸海軍大臣の任用資格を現役より豫備役迄擴張、同月行政整理案發表さる、十月六日支那共和國を承認す、時の大總統は袁世凱也、十二月廿三日立憲同志會結黨式を擧げ加藤高明氏總理となる、經濟界の狀態としては、

東北地方水害凶作あり内務省より低利資金六百萬圓融通を決定、本年の景氣は沈衰の底に達し、對外支拂激増、在外正貨涸渇して兌換券の基礎危ぶまる、此の年鈴木商店の援助の下に米澤市に東北工業株式會社、ヴィスコース法による人絹製造工場を設立すこれ實に近年世人の耳目を聚めつゝ長期審理を續けられつゝある帝人事件の本尊たる帝國人絹株式會社（大正七年改稱）の前身である。大正三年、一月廿三日海軍收賄事件（所謂シーメンス事件）衆議院の問題となり、二月十日衆議院に海軍收賄事件に關する内閣不信任案提出されたるも否決さる、國民大會開かれ帝都騷擾時局混亂を來す、結局シーメンス事件の責を負い三月廿四日山本内閣總辭職を爲す、同廿六日議會閉會、これより元老會議數回開かれ、後任首相に徳川家達公、清浦奎吾氏等を推薦せしも實現せず、四月十六日大隈内閣成立。六月廿八日墮太利皇太子サラエヴォにてセルビアの一青年の爲暗殺せらる、八月一日露獨開戦し歐洲大戰初まる、同月十六日日本はドイツに最後通牒を發し同廿三日對獨宣戦、十月十四日には南洋獨領諸島占領し、十一月七日に至り青島攻略をなす、經濟事情については三月東京停車場竣工、九月、臨時軍事豫算通過し、工業

原料輸出制限法實施、戦時海上保險補償法施行せらる、不景氣未だ容易に脱けず、貿易

輸出入共に減衰の道を辿る。大正四年、一月對支要求交渉を初む（所謂二十一ヶ條要求也）日支交渉は容易に進捗せざりしため五月七日に至り對支最後通牒を交付す、之に對し支那は五月廿五日山東、南滿州、東部蒙古の我が利權に對し遂に全部承認し日支交渉條約調印成立す。

十一月十日大正天皇御即位大禮を京都に行はせらる。

此の年大戰の勃發により大打撃を蒙りたる蠶糸業救済のため官民合同の第一次帝國蠶糸會社設立し糸價維持の建前より六十八萬斤の生糸買入に當る、年末近くに至り大戰の好影響現出して出超一億七千五百萬圓を示し、通價膨張、諸物價騰貴、同時に米國の景氣回復により絲價昂騰、千百圓臺の相場現はれ、蠶絲業立ち直る。大正五年、此の年は昨年以來の好況續けられ株式市場も亦活況を呈す、大戰中なるを以て時局關係事業極めて殷振を告げ、化學工業、鐵鋼機械工業の新設されるもの多し。理研で有名な理化學研究所は本年三月の設立になるものなり。大正六年、三月ロシア革命勃發し、露帝退位、六月には期米昂騰し先物廿三圓六十九錢を唱ふ、九月金輸出禁止、十月に至り少額紙幣發行令發布、即ち小錢拂底のため兩替賃暴騰し小賣商、湯屋業等の金券私造盛に行はる、

貿易極めて順調にして出超五億七千五百萬圓、空前の大出超を現出せり。大正七年、昨年來の米價漸騰傾向は本年一月に入りて暴騰を演じ農商務省は米買占警告をなし、大阪の正米商續々検事局に召換さる、而して各地期米市場立合停止に至る。七月に入り米價の奔騰は依然熄まず、農商務省では米穀仲買人の米買占に對して頻々として警告戒告を發す、八月五日米價奔騰に依り富山縣滑川町に婦女達が一揆を起し同九日同縣西水橋に擴大し、やがて全國に波及して有名なる「米騒動」となる、米價の最高値は正米一圓臺乗せを示すに至る、従つて穀物收用緊急敕令公布され、米收用價格は一石卅圓乃至卅二圓と公定さる、十一月十一日に至りさしもの歐洲大戰も遂に休戰條約成立し終息す、我が國よりは後に媾和金權として西園寺、牧野氏等が巴里に派遣されることゝなつた、十二月には英米の鐵解禁のため關西の鐵商破綻するもの多し。一方名古屋木材界の諸狀勢に就て述べるならば明治四十三年五月十二日愛知縣會議事堂に於て日本材木業聯合會開催され山林局長、知事、大阪大林區署長、市長等三十五名の來賓と數百名の會員參列して盛會、翌十三日御園座に於て餘興を催す、明治四十五年四月十五日岡田名古屋市勸業課長清國動亂後の實業を視察せらるゝ旨組合に通知あり依つて該地方の木材狀況調査を

依囑す。九月二十三日大暴風雨あり、木曾飛驒兩川増水して川狩中の木材多數流散せり  
大正二年十月十四日出材部常任委員會を開き三鱗組が株式會社組織に變更して事業繼承  
の旨を承認し又綱料等の協定をなす、大正三年二月二十六日木場日傭人夫救護會設立さ  
る、同五月八日帝室林野管理局が御料林を拂下ぐるに當り本年度よりは從來の尺締法を  
廢止し、石建となりたるを以て當地方古來の商習慣に背き且つ計算上營業者の不利不便  
尠からずとなし總會の決議を以て其の復舊方請願書を提出す、同十月五日組合員にして  
汽船積材木業の從事せる有力者相圖り木材移入商同盟會を組織す。大正七年八月二十五  
日出材部常任委員會を開き下麻生しもあそうに於ける綱料及解搔下料は明治三十六年四月の解決書  
に基き五ヶ年目毎に米價を標準として改訂すべき契約ありて本年は恰も改定期なるを以  
て其の改率及三鱗株式會社の懇請に係る特別手當金の協議を爲したり。

「編者附記」多少前後に亘るやも知れないが歐洲大戰前迄の時代の變遷について自分の感  
じた事ども一、三を述べて見たいと思ふ。歐洲大戰前迄は文化の程度も低く、進み方も  
急速でなかつたと云ふ事が今から思はれる。それが大正三、四年頃から世相百般に亘つ  
て急速に諸狀勢の發達變化が齎あづかられたのである。自動車の如きも名古屋で最初に乗り

廻して居た人は中西萬藏氏位で、紳士の一つの娛樂物と一般人は視なして斯の如きもの  
は實用に適するものではないといふ觀念を持つてゐたのが明治四十四、五年頃である。  
著者が初めて東京へ行った時は明治四十年で今の汐留驛が新橋驛といつた時代で東京驛  
はなかつた（著者は之の時初めて洋服を着用）乗物は電車はあつたが主として田舎者は  
何れも人力車に乗つたもので之れが唯一の市内交通機關で自動車は東京驛が出来てから  
である、宿泊料の如きも二食付一圓位で日本橋蓬萊屋に泊れたものが現今では五圓乃至  
六圓位である。大阪は明治三十四年著者二十才の頃には電車無く巡航船と人力車（二人  
乗りもあつた）によつたもので、神戸の湊川新開地は當時河原であつた。

## 九州各地に於ける

### 山林伐出積極的進出

大正五年には九州日向國兒湯郡東米良村字白鏡こゆめらしるみに於て一大山林を買收し、其間種々なる  
難關にも遭遇したが伐採を開始し、引續き附近圓形十數里の間遠く熊本縣界迄各所に於て

大小山林を買添へ大正九年迄毎年一川瀬川を利用して宮崎市の北三里廣瀬福島港へ流送し同所より船積みをもつて神戸、大阪、名古屋へ輸送した、其材種は梅を主とし樅、松等であつた。

此の事業の五ヶ年間に於ける伐出方法、木馬きうま、小谷の堰出し、大川管流等には一大改良を加へ同地方の人心に新しい山林事業の諸法を知らしめた、此の地は日本祖先發祥の地であり、我邦で最も早く開けた土地であるのにこの當時としてはおそらく文化は最も遅れてゐる處だと思はれた。

其の一例としては

電氣の設備などはなく、村の娘は全部素足で繩の帶であつて明治末期頃迄袴、綿入れを知らず、著者が銀鏡村しろみに事業を開始した當時漸く袴を着用する事を知り、綿入れを見たる事なしと村人が明言してゐた位である。

道路等も充分のものではなく勿論山道のみで山の事務所より電信を發信するに七里餘の山道を越へて行かねば郵便局がなかつたので特使をたてゝ往復二日ばかりで電信を打つたものである、又木材はすべて角材に造材して出す慣習であつて丸太は坑木のみであつたが著者

が初めて丸太で出材することを開始したので土地の人々は坑木が川を流れる様になつたと驚嘆した、尚流送の方法も夫れ迄は天水を利用して本谷の川狩をなす風習であつたが著者

は木曾福島きそふくしま、上松あけまつ、野尻のじり、三留野みどの、付知つけち、小阪等各地から五十三名の入夫を募集して之れを引率して所謂木曾風の堰出し法を實施したので、九州各地の營林署官吏及山林出材業者

の見學引きも切らぬ有様であつた。天水利用法とは平水の時木馴きなひをなし降雨又は大水を待つて自然的に流し出すもので減水すると所々に引掛り居る故、次の出水の場合なるべく早

く流れ出る様に良い場所に木直きなおしをして第二の出水を待つ、之れを繰返して十數里の間を流し流して天然、自然的に流すといふのであつて、之の方法が日向の木材搬出の習慣であつた、夫れを打破したわけであるが、遺憾ながらこの木曾風搬出法は初年は大失敗に終つ

た、即ち歴大な費用を投じて廣瀬福島港へ木鼻が到着した時不幸大洪水に見舞はれ尺々二萬本は全部日向難に押し流されてしまったのである、之れが大正六年の事である、時に著者は名古屋に在つてこの大洪水による全部流出の電報を事業主任磯田芳松君（現在著者經營の大江合板株式會社に勤務）から受け急遽出發、陸路關門海峡を渡り日向線、鹿兒島本線

によつて吉松、都城を経て廣瀬福島へ二晝夜を要して到着、海岸へ駆け付けて見れば日向

難一面に白く木材が浮び潮につれて右に左に漂つてゐる、この二萬本からの流材の一塊を眺めた時は思はず流涕を禁じ得なかつた。如斯場合は最早や神を頼る外なしとして祈願をこめ、恰度流出後三日目に漸く風向も變り、海も和らぎ、延長二十里餘の海岸線各所に打ち上げられた、その中には他の同業者のものもあり其數約三十萬本であつた、此の流出當時一ツ瀬川の國道にかけられた橋梁（約三萬圓で架設されたもので西南戦争の時西郷隆盛が渡つた事のある由緒ある橋）及び宮崎縣で初めての試みたる杉安と云ふ個所に架けられた鐵筋コンクリート橋、日豊線建設假橋とを墜落流失せしめ、宮崎縣より若干圓、鐵橋架橋請負工事者より四千圓の損害賠償を申込み宮崎縣當局や各林業者との間に種々論議が交はされ結局林業者側から合同で沿岸關係者及び鐵橋請負業者へ約二千圓を提供して事を納め得たわけであつた、斯くして神の加護か全部沿岸に漂着した木材を集材し船積にするのであるがここにも又難關が一つあり、それは好景氣時代の頂點に達してゐた折として輸送船拂底、運賃は狂熱的昂騰を演じて居り、加之福島港は河口淺く積込困難の理由から運賃を奮發しても備船に應じない、で止むなく窮餘の策として伊勢の大湊で一隻、桑名で一隻の輸送船三隻を新造して廻送し、産地港と阪神間輸送の專屬船とした、斯くして第一回の

おきみなと

積込みを終り所謂處女航海に於て一番大きい濱成丸が瀬戸内海栗島海峡で暗礁に乗り上げ輸送力に大きな手違ひを生じたが然し天なるかな、斯く流材や輸送上に齟齬をすればする程木材相場は騰貴し不幸が返つて僥倖となつたのであつて最初阪神間で梅角尺々六圓位のものが逐次昂騰歩調を辿りこの輸送最盛時には十一、二圓になつた、その爲損失すべき事業が返つて利益を計上する結果となつたがその間の辛苦は亦格別であつた、之の事業は大正九年を以つて打ち切り揚げた、事業中損失を見ずに終つた事は全く天祐といふべきであであつた。

## 積極的改革と

北海道、樺太材に着目

大正五年鴻恩ある先輩伊藤千里氏が胃癌にて長逝され其後任として僥倖にも合資會社濱木屋商店の代表社員となり、益々積極的方針の許に、多年固守して來た古風、舊式な一切の風習を打破改革して之れが成果をあげることに努力したのである、其一つの例としてあ

げてみるならば

この當時製材方法は一般同業者間に於ては夫々時代に順應した所謂新式の機械によつて各種の動力を利用して製材工場を建設經營して居られたが、濱木屋は當時尚ほ多年の習慣たる古風な木挽きに依る製材を行つてゐたのであつて、之に對し先輩政木氏の言も尊重し久しく逡巡してゐたが大決心を以て著者はこの製材方法を一變して動力に依る機械を据へつけたのである、然しこの當時は景氣が最高潮に達せる時代であつた爲に、電動力を得るのに頗る苦心した、即ち一馬力引込權利料五十圓を以つてするも容易に得られなかつた、種々苦慮の結果漸くにして七十五馬力サクソングス發生機を以て動力を起し、之れで機械を動したのである、即ち大正八年から九年に涉つて之の改革を斷行したのである。

北洋材に着目したのは、大正七年に日本材木業聯合大會が當時の清國安東縣及朝鮮新義州と即ち鴨綠江を挟んで開かれたのでこの大會に參列し、鴨綠江材の伐出状況を視察して奉天、大連を經由して内地に歸る間に於て木材は前途尚非常な暴騰を演ずるであらふといふ感を抱き歸名後直ちに北洋材方面に着眼し、まづ北海道の雜木を仕入れて積極的に進出を試み、引續き初めて、エゾ、トドの中丸太に向つて手を伸したのである、當時濱木屋で

は皆な異口同音に北海道材は粗惡材としてかえりみなかつた、その當時の一例としては

北海道檜角普通材百石三百五十圓上等物で五百圓迄

エゾ、トド中丸太は五百一、三十圓

であつた、其他栓、桂、榎等も市場の相場を以つて充分なる研究もなくして見込みで相當の數量を買上げたがそれが全て適中して兩三ヶ月間に純益二萬圓を計上した、其間初めて中丸太に着目して殊に樺太材の賣買といふ方面に興味を持ち、當時松昌洋行（山本唯三郎氏經營）が大泊に出張所を設けて島外移出禁止であつた樺太材の特許を受け内地方面へ移出してゐたので之れを水谷孝三氏の手を介して名古屋入荷分に對し獨占的仕入れをしたのである。

木曾、飛驒其他各地にも

一層積極的伐木陣を張る

北洋材方面に活躍するかたわら大正八年には同輩伊藤増吉君と謀り信州野尻で帝室林

野管理局から御料林を十萬二百圓で拂下げを受け種々の關係上王瀧村の中越次郎吉氏を共同者として同年末から九年へかけて名古屋へ出材し約六萬圓餘の純益を計上する事が出来た、更らに同年は群馬縣の黒磯驛から奥的那賀川上流で丹羽一市民の關係で青葉農林株式會社から檜葉丸太一萬本を買受け黒磯驛より陸送で東京へ輸送し東平野町岡由及森源兩店へ賣込んだが又亦約六萬三千圓の純益を計上した、此の事業は水谷孝三氏の井桁商會と合併に濱木屋で五分、井桁商會三分、服部小十郎二分の配分約束にて(途中服部氏は脱退)行つたのである、尚ほ上州沼田兩毛製紙の伐出した檜葉丸太八千本を買受け、其他大正五年以降長良川上流、郡上郡奥明方村及小駄良村(現井桁藤商店支配人たる長田英雄君當時二十才にて主任たり)、飛驒川上流益田郡火打、久能川、竹原、下呂、萩原、上呂、馬瀨村、加茂郡黒川、東白川、佐見、長野縣王瀧村、西野、末川、等に於て各種木材及鐵道用枕木を伐出したが、その數量は實に夥多に上つた。

おくみょうがた

こたら

ひうち

くのがは

たけはら

げろ

はぎわら

じまろ

ませ

くまかわ

ひがししろかわ

さみ

あつたき

にしの

すえかわ

## 未曾有の材界狂熱時代來る

### 市賣會を開催頗る大成功を収む

大正九年二月、未曾有の好景氣と共に天井知らずの昂騰を續ける木材界を注視洞察した時、最頂上相場を握ることはよくするところではない、商家の戦法は腹八分目を最上とせねばならぬと考え、そこで各地に於て積極的に伐採したものゝ利喰いを或程度するが良策であると痛感し、まづ東京に於て一部の處分を爲すべく井桁藤商會との合併分を東京森源に賣却した、この頃より著者は現在の暴騰相場はあまりにも不合理、不自然なる相場である、やがてはこの大反動の襲來するあるを覺悟せねばならないと愈々手持材の一掃的處分をすべきであるといふ氣分を濃厚にした、當時市賣會は名古屋木材株式會社が常設的に開市を爲しつゝあり、それ以外は同社への遠慮氣味もあつて差控へられてゐたが、著者は斷固市賣會を開くことに決心し、一應名古屋木材株式會社に了解を得て、大正九年三月十日

愈々指名者のみを濱木屋に参集願つて開市する手筈を整へたのである、ところが熱狂時代のことゆゑ三井、三菱、辰（鈴木）といった錚々たるところまで参加を迄ふて前人氣頗る旺盛で最初二十名内外の有力者のみの豫定であつたのが驚く勿れ六十名からに達したのである、この市賣の出品物は長良川、飛驒川、木曾、上州沼田方面より輸送したもの及び樺太中丸太等であつた。

愈々三月十日の開市當日の白熱的人氣はけだし空前絶後の盛況であつた、相場の如きも全く驚嘆すべき高値で

杉丸太	六以下	尺	二十九圓九十五錢	吉見	落札
松丸太		"	二十二圓	香川	"
松角	合角	"	三十五圓	竹廣	"
檜葉丸太		"	三十二圓五十錢	辻駒	"
檜丸太	中目	"	三十四圓五十錢	親友會連	"
同上		尺	四十五圓	親友會連	落札

杉丸太	一上	"	四十圓	永田	落札
同中目		"	三十五圓	"	"
樺太中丸太	七九掛百石		千六百三十五圓	新宮商行	へ二千石賣約

開市二時間後金額二十三萬五千圓の賣上高で出品全部を賣盡した、右の相場が今日迄の木材價格の最高であつたと思ふ。入札條件は落札と同時に現金二割、殘四割三月二十五日拂込、殘四割は四月十日現金を以つて完納の事、但期日前に物件受渡要求ある場合は金額拂込みの事、と云ふのであつた。入札翌日になつて一つの事件が惹起された、それは交渉委員が出来て契約金を手形とされたいといふ事であつたが時節柄拒絶し種々折衝の結果公債又は現金とし更に殘額拂込期日を四月十日の分を四月二十五日に延期方を要求され同業者の事であるから之を承認したのであるがこの事が結局後になつて大いなる誤りであつた事が判つた、最初下見の場合は高く見積つても二十一萬五千圓位と考へたのが入札は白熱的人氣で大成功を收め約二萬圓弱の賣増しとなり一同欣喜躍雀、手の舞ひ足の踏むところを知らず、とはこの事であらふ、この市賣會こそ木材界に於ける所謂木材史上特筆大書す



べき一項目であつて此の入札会の結果同業者は東に奔り西に走つて各方面で積極的仕入れを初めたのであつて、引續き三月十五日には吉村松太郎氏が市賣を開かれたがこの時は既に人氣は下り阪にあつて稍々沈滞してゐたのである、そこで著者は過般の市賣會ではまづ出品の半數位は残るであらうと考へてゐたが全部落札して貯材は僅少となつたので此際内地材熱狂相場のを仕入れても趣味もなく又不得策であると考へ三月十五日名古屋を出發して北海道に走り、釧路に於てエゾ、トドの尺三上太丸太三千石、樺太中丸太材七千石を買約し夫れより北海道各地を視察し遠く網走迄も行き小樽に引返した時木材一般市況は妙な雲行きにあることを察知して早々仕入れを中止し四月十六日東京迄引返したのである。

## 反動時代の襲來

大暴落おしよせる

この日（四月十六日）が東京兜町の株式大暴落の日で早速歸名したが、約束の三月廿五

日拂込みの四割金は殆ど拂込まれてゐない、止むなく夫々要求して掛合つたが木材も時既に大瓦落を現出し同業者は平身低頭して契約金二割放棄して契約解除を申出でる者續出したのである、そこで出來得る限り契約の履行を迫つたが尙歎願される向には止むなく契約金沒收して契約解消を決行したが、それが約二分の一あつた、この時の大暴落の一例としては、杉六以下尺々二十九圓九十五錢で落札されたものが一度に十五圓五十錢となりそれが五月下旬には十三圓五十錢と云ふ崩落振りを演じたのである、こつした暴落のため北海道で仕入れた太丸太千五百圓が千百圓となり中丸太千四百五十圓が慘落して名古屋へ入津した八月頃には七百五十圓となつた、右七千石の中丸太は水谷孝三、長谷川糾七、永田商店、鈴木虎之助氏等から買約しありしも契約金一萬五千圓に尙五千圓追加し二萬圓の解約金を出すからと解約申込むも聽入れられず結局百石千二百二十五圓に値引の上引取つたがこの中丸太を處分する上に於て製板を開始したのである。尙ほ東京では岡由、森源に賣却せる檜葉丸太一萬石の手形不渡十一萬餘圓となり周章狼狽して上京し東京木材商組合長長谷川鏡次氏の多大の盡力によつて總額二萬八千圓を値引し一ヶ年間割賦支拂方法で受取る事に解決した。

好況時代の狂熱振りから一瞬にして反落時代となったこの有爲天變に際會して著者は自己の思慮の足らざりし事を深く銘記したのであった。其後困難な事に逢着する毎に之を思ひ出し慚愧に堪へず、夜も眠られぬ日があった、物事が順風に帆をあげて平穩な大海原を進む様に意の如く進行する時はそれに有頂天となることなく一步退ひて靜かに考へ直すことが必要であると實際に直面して痛感した。又一方製材工場の建設も三萬五千圓の見積豫定が五萬となり七萬圓となつたが、事業も順調に進んでゐた際だから建設に力を致し其結果店舗の改築等も加はつてはゐるが兎に角十六萬七千五百圓を工場建設及店舗改築に費つたのである、尙ほ調子にまかせて六十萬圓の内三十萬圓拂込濟の株式組織とした事も拙劣な遣方であつたと後日思つた、即ち一つ順調さが欠けると、最初に勢ひの赴くまゝに遣りつ放した事が如何にも杜撰であつたと感じるもので、充分心すべきは「勝つて兜の緒を締めよ」である、斯くて暴落に惨落を重ねた木材商況も漸く大正九年八月頃に至つて平靜状態に復したが、此の間相當の犠牲者が續出したのであつて事態止むを得ぬ次第であつた。

#### 中丸太の處分に苦心

##### 出來合製板を開始する

さて七千石の中丸太を處分するに當り山岸製材（本山岸）淺井製材等に話しを進めたが樺太材は北海道産に比して硬質であり且つ寸銘も細いので製材能率が二割落ちる、それだけの割合安くないと引合はぬと云ふので顧り見られず他にも買手がなくこの處分に苦慮した結果東京へ出張して信ずべき取引先たる數矢町の喜多商店に就いて種々消化さす意見を聴取したるに東京向けの板を挽いて汐留迄送つてはどうかといふことで半ば好意的商談をとげ、二間入一束汐留着尺建二圓七十五錢で三千束を契約し、直ちにマーク、毛判其他製板用小道具類を注文して歸名直ちに製板に着手した、それが大正九年末期であるが何分にも出來合品板製作販賣の經驗が乏しかったので先輩たる岩田助次郎氏に助力を乞ふて同氏の店員を助手に依頼して撰別、結束等を実習し、エゾ、トドの並四分二分七、八里六分尺板（三分五里）、板割長二間（六分五里厚）の製板を開始した、（板長さ六尺（三寸伸巾は尺で二分裕の伸びで役物は抜かず全部込であつた）此の當時製板業者としては服部清太郎

氏がずっと古くから少しづつ製産して居られた位で北海板は引合ぬと云ふのが當時の通説の様であった、従つて積極的に出来合品の製板に着手したのは著者が嚆矢であつたと思ふ此の大正九年に於る名古屋の製材業の状況を数字的に回顧してみると、

工場数 九四 動力三 七四二馬力(内譯 電力二〇五九、火力一、七七一、瓦斯五二二)

機械種別 豎鋸七七、帶鋸二九、丸鋸三九一 計四九七

従業職工 男一、二六五人、女三八人 計一、三〇三人

であつた。一般の製材販賣業者はエゾ、トド板は不引合だと云ふ先入主で濱木屋がエゾ、トド板の製産を初めたが、今に損失を招くであらふといふ世評を浴せてゐた。著者はこう云ふ評判が立てば立つ程益々力を入れて、市内近在のみならず京、阪、神に出向ひて同地方の製板販賣方法に就いて研究を遂げた結果、板の出来る時分には市況も幾分反動的好調を帯び來り、結局岩田商店(岩田助次郎氏)が名古屋で庭着で仕入れるから東京直送の要なしとの事で、且つはかねてからの恩義もあり岩田氏に契約することとした、その板が岩田氏の手によつて大阪へ販賣され出すと同時に大阪の井上製函が來店され是非共賣つてくれとの事で一千束を大阪片町着二圓八十五錢で契約した、之れが一つの動機となつて大

阪の各方面から束につき一圓の契約金を持つて顧客が殺到するに至つたので愈々機械を増設し職工を倍數に増し晝夜交替で徹夜操業をなすも尙注文に應じ切れないと云ふ盛況振に向つた。

この當時の原木相場は百石六百一、三十圓で製板一束二圓八十五錢乃至九十五錢に販賣して歩留りからすべての計算をすると百石に付き百圓乃至百五十圓の純益を計上出来得たのであつて、製板創始當時一般に冷笑的罵言を浴せられたそれとは結果に於て雲泥の相違で幸ひな事であつた。

### 北海エゾ、トド製板中興の時(大正十年)

大正十年となつて益々エゾ並四分板、六分板、板割の需要増加と共に値段も騰貴し結局五月に至つて大阪片町着三圓十五錢迄昂騰し、原木中丸太は端境期のため七百圓どころを唱へ、順次下落の徵が見へ初めたのである、然し名古屋の製材業者も一般的にエゾ、トドの製板に關心を持ち初め、一齊に之れを着手したが時既に遅く、退歩の一步に入つてゐた

のである、即ち製板業者が雨後の筍の如く増加すると共に生産數量は過剰となり相場も下落し東二圓七十五錢迄引下がったのである、之の當時が即ち名古屋の北海エゾ、トドの製板中興の時代である、この事から考へて

「世間の風評、デマ、流説は或る程度考慮に入れねばならぬ」といふ事を痛感するのである。

#### 大臺ヶ原山木材伐出事業計畫

##### 大臺林業株式會社創立

大正八年の秋、井桁商會の水谷孝三氏と謀り紀州大臺ヶ原山の立木伐出事業を計畫し、熊澤一衛氏の援助によって富士製紙株式會社より三十八萬圓にて買収し種々なる關係上、熊澤派、水谷派、濱木屋派の三等分にて大正九年大臺林業株式會社を創林し同社にて大臺ヶ原山の經營をなすこととしたと同時に著者は同社の常務取締役に就任した。

#### 米材輸入に着目し

##### 第一回到巨利を博す

大正七年夏滿洲より歸名した當時より米國材輸入に着眼し、將來相當に日本へ輸入せられるものと豫想して弗々之れが研究を初めてゐた、九州地方の山林伐出事業の關係で阪神間を往復する毎に其取引上滞在することが多かったので、大阪の北村梅七氏より米材の取扱い方を教示してもらつてゐたが、大正八年の木材界狂熱時代には驚く勿れ一立方呎二圓七十錢迄騰貴するといふ始末で殆ど初心者の手を染める時ならずとみて研究のみに終つた其堂時はボードメージャーが何であるか、ドクラスファーが何か、所謂名稱や材積、爲替等の換算に就いて未知の事が多く頭を悩ましたものである、然し種々研究の結果大正九年頃までにはかなりの程度まで會得することが出来、更に神戸に、又東京へ商用で出張する毎に何れは自分も米材を取扱はねばならぬものであるといふ固い信念のもとに之れが輸入方法、販賣方法を實地に就いて視察したが、未だ價格の點や何やかで名古屋へ直輸入する機會に恵まれなかつた、漸くにして大正九年末期となりその機運熟したりとみて大阪

の北村梅七氏を介してロバートダラーより松大角十八吋上百萬BMを四日市CIFで買った（當時は四日市より筏にて回漕）この時も尚ほ換算率が充分會得出來ず邦貨で立方一圓四錢で買った、之れが抑々伊勢灣へ大量の米材が輸入された嚆矢である、この入津は非常な注目をひき三井、三菱あたりからも色々見學に來られた、材質、規格共に非常に立派なものであつて着船荷役後曳船で名古屋へ廻材し

特等材立方一圓、一等材一圓三十五錢、二等材一圓二十五錢、普通材一圓十五錢

といふ値段で賣出した處二週間位で全部賣盡し、これに勢ひを得て田村商會、三菱等から五十萬或は百萬と仕入れ且つロバートダラーにも尚百萬の注文を發した、其他小角、レツドシダー等も見本的に輸入をなした、でこの第一回取扱數量は三百萬BMで純益五万五千圓を擧げ得た。

## ロバートダラー社の

### 一手販賣披露宴開催

大正十年二月十一日紀元節の佳日<sup>ボウ</sup>をトとしてロバートダラー社の日本總支配人マルム・ゲ

レン氏及び同社員西博久氏等を名古屋に招き大須七ツ寺宮房樓に於て同業者數十名を招待しダラー中部日本一手販賣の大々的披露宴を開き大いに米材に對する認識を得さすべく宣傳之れ努めたのである、この宣傳と云ふ事は即ち名古屋は東西兩市場に比して米材の使用遅れて居り、由來名古屋は舊習慣を固守すると云ふ仕來りがあつて新しい事に關心を持つことが兎角遅れる氣味があつたからである、この時更らにロバートダラーとの間に六百六十萬BMの契約をなし、引續き四百四十萬の大中小角を契約した、値段は大中角四分六込千BM四十二弗乃至四十四弗、小角は三十八弗五十仙であつたが之れが他日大損失を招く抑々の第一歩であつた、昔から縁起をかつぐ云々といふが、この宴會で多少氣に障る事があつた、即ち宴會場へ入つて行くと六枚屏風が立てゝあるのだが少し變である、今まで下り松の繪なんか屏風では見た事がない、變だと思つてよくよく見れば逆さに立ててある、早速女中に命じて立て直させたが何となく氣に障る、同席の水谷孝三氏も何だか心が浮かぬと云つて元氣がなく、契約は止めたいと云はれる、著者もそんな氣がしたが、この位の事で縁起をかついで見ても仕方がないと考へ、且つは第一回の素晴らしい米材へのスタートが身に滲みてゐるので、こんな些事にこたはる要なしと思つてどしどし事を運んだので

あるが、前述の如く他日大損失を招いたのだから愈々以て縁起と云ふ事も良く考へねばならぬ、例へ迷信だと云はれる事でもその程度、事と次第に依つては馬鹿にして掛れるものではない何れも深奥な宇宙の攝理に密接な關聯を持つてゐるものだと考へたのである。

ダラーとの契約を期として名古屋港へはそれ迄木材積載の外國船は入港しなかつたものであるが之れを入港さすべく縣市當局、商工會議所、港務所と各關係先きを奔走して一件書類を市役所を経てアメリカの夫々主要港灣へ向けて送附し、名古屋の木材市場を認識させるべく努力したのである、それ程に當時の名古屋港並に名古屋木材市場は外國主要港灣都市からはあまり認められてゐなかつたが、こつした努力の効果があつてか幾程もなくして直接名古屋港に木材積載の外國船の入港を見るに至つた。

## 大病の事

### 死を恐れぬ大覺悟

大正九年十一月下旬上京して取引上多忙を極めると同時に各方面で招待を受けたり、或

ひは得意先を招待したりして多少不攝生であつた爲健康を害して十一月三十日歸名、十二月一日より病床につくに至つた、初めは普通の胃腸病だと思つてゐたが主治醫はじめ森田博士、杉山醫師の診察に依つて胃潰瘍と斷定されて恐愕した、經過は益々惡化して十二月十日に至り重態、危篤に陥り、自分も愈々死期の近づいた事を覺悟して、遺言をなし、枕頭に花を飾つて慰めとなし、僧侶に讀經、引導を授けてもらつて、死を待つばかり、大往生の時はいつかと靜かな心境にひたつてゐた。こつした状態だつたから近所の人、縁邊の人々、知己、友人は著者は最早死んだものと思はれて弔問の客引きも切らず、ところが著者は未だ息がある、靜かな悟りの床にあるので何れも面くらつて歸られるなどと云ふ有様であつた、斯うして死を決し、悲しまぬ、恐れぬ氣持が起死回生の妙藥となつて、十四日には危険期を脱して其後日一日と薄皮を剥ぐ様に快方へ向ふ様になつた、こつして病床に在つて十年の初春を迎へた、が未だ勿論足腰は立たず臥床のまま、ぞうにの代りに餅のスーパーを攝つて正月氣分を味ひ、それより二月、三月兩月間は固形食物は控へて流動食のみで攝養に努めて、四月上旬全く全快するを得た、此の體驗から大病などの時はよくよせず大覺悟をもつて靜かに養生すべきで、命が無ければ止むを得ない、前世からの因縁とあ

きらめて大悟徹底すべきだとつくづく感じた次第である。

## 北洋組合の創立と

### 樺太材積極的進出

この時代は著者としては林木業界からはその地位を益々認められ、従って最も得意の時代であったが、ロバートグラ―との米材賣買、取扱ひに就ては流動資本の關係上大臺林業と共同經營を續けたのである。尙ほ大臺林業に於て北洋林組合を創立し之れが理事長に水谷孝三氏を、理事には著者と永田愛三氏、梅村好太郎氏らをもつて共同出資の許に樺太材伐出事業を開始した、この匿名組合の資本總額は二十五萬圓であつた、而して著者は大正十年四月に樺太へ出張し事業の地たる留多加るーたか、芳内よしない(灣内)、泥川どろがほなどを巡視し、尙ほ西海岸まおかきんじう眞岡山道を経て前記留多加の奥地事業地を親しく視察したのである、此の當時は樺太に於ける森林に虫害の猛烈を極めた頃であつて樺太の森林はこのため實に慘澹たるものであつた。樺太廳では大正十年以前は島外移出は同廳山林局に於て或る程度の制限を附してゐた

がこの虫害のため其の禁を解いて虫害木は迅速に拂下をなし内地各地への移出を反對に獎勵する時代となつた、この機會を利用して所謂大臺林業内の北洋林組合は積極的方針のもとに前記巡視地以外にも東海岸といはず各地に伐採權を獲得或ひは造材師を利用して各地で買材を盛んになした、そして汽船をチャーターして適當な港に廻船し或は芝浦、清水、名古屋、和歌山、大阪にと夫々輸送し販賣をなして非常な好成績をあげたのである。斯くして第一年は四割の配當を各出資者に行ふ事が出来た。

當時の北洋材中丸太の價格は市場で六百圓乃至六百二、三十圓を前後して居つた。樺太の各事業地視察に就ては、昨今に比較して言語に絶した不便さであつた、まづ大泊おほどまりに於て一日百圓で小蒸汽船を借切つて、それによつて巡視したものである、西海岸眞岡まおかの如きは大泊おほどまりから船で迂回して上陸したのであつて今から考へると今昔の感に堪へない次第である、又各事業地を視察するには馬車によるか徒歩の外方法がなかつた、冬期は積雪を利用して犬橇によるのであつて、當時の交通不便は現今から考へて全く想像以上で、従つてその地方で仕事するには並大抵の努力では目的を達成することが至難であつた。

不便なる時こそ巨利を博する

## 木材事業

總て木材事業は不便な時代こそ利潤の多いものである、交通、通信機關が発達すればする程之れに反比例して利益は減少するのが原則である、北洋材組合もこの原則にもれず翌大正十一年には順調に進んで三割の配當、十二年度は二割の配當といふ有様で純利益は減少して行くのであつた、然し之れと同時に伐出も、買材も、船の運用も容易に實行出來得る様になつて來たのである。そこで一方著者の主たる責任ある濱木屋の營業上に於ても、第一に美濃、飛驒、木曾の山林伐出やら本社の直營事業としての鐵道省納入の枕木、橋梁用ポイント、其他並枕木、附隨せる鐵道用材料の營業も漸次利潤薄く、經營上にも非常なる困難を生じる様になり其經營上には一方ならぬ苦心を拂ひつゝあつた、又更に第二の主要なる製品としての北海板なども漸落を辿つて大正十二年八月末頃には束二圓三十五錢を示すに至つた、斯くて經營上に種々苦惱を重ね兎や角と苦慮しつつある所へもつて段々賣行きも鈍り製品の滞荷となり又經木を製造し該品を大阪で委託販賣させてゐた店の支配人

が費ひ込をなしその調査も兼ねて忘れもせぬ大正十二年九月一日の朝六時二十八分下り急行で製板主任を同伴して大阪に向つた、湊町驛で下車して大黒橋を渡ると同時に午前十一時五十八分。

## 關東大震災と

### 積極的活躍

何となく地面の動搖を感じた、そして相當大きな地震があつたと直感したのである、そこつうにするうちに附近の人家からも人が飛び出して來たりして益々強震であると思つた、まづ定宿たる吉岡旅館に着くと同時に本社へ急報をもつて電話を申込んだところ不通であるとの事、そして幾何もなく大朝、大毎などの號外が早くも配達され名古屋以東は未曾有の大震災のため一大混亂に陥り、殆ど全滅といふ第一號外をみて驚愕したが其時は新聞の所謂誇大な報導だ位に解譯して半信半疑で目的である取引の各板類問屋數軒を前日から豫約してあつた「はり半」の宗右エ門町支店に招きその席へ出頭し四分板約六千束の契約を結むたのである、其間に第二、第三、第四とひっきりなしに大震災の號外が配達される、



そこで之れは半信半疑であったものが最初の豫想を裏切つてかなり惨害の甚大なことを信ずるに至り、そこで席上に於て著者は各板問屋の方々に對し

「若し號外の如くであったならば今日の商談は解除することにして戴きたい」

と申出たところ、それは非常時の場合であるからとて承諾した人もあり又せぬ向もあつた斯くて商談を打ち切つて宿に引返し名古屋へ電話を申込んだがやはり不通である、で直ぐ様梅田驛へ馳け付けて驛構内の有様を一見して其雜沓振りにいたく驚愕した、何れも東京方面へ出發する人で構内は充滿し戦時の如き有様である、そこで自分の隨行者を直ちに伊勢方面へ向けて出發させ、伊勢松阪方面にある木材を買約するために行ける處まで行き一時も早く着き値段にかゝはらず買約する事を命じ、自分は大阪に一泊し様子を聞き合はしと見ると、東京方面の大震災の實狀が判明したので翌朝の一、二等急行で名古屋へ引返し震災對應策を講じた。即ち災害を被むつた人々は誠に御氣の毒であるが本業としてはまさに千歳一遇此好機にありとして出來得る限り各方面に活躍する事と決した。

此時初めて製材製板同志會を設立し自分が主唱者となつて、其團體の申合せにより北海エゾ、トド四分板束五十錢値上げを發表したが、九月一杯は關東を中心とした諸銀行の金融機關が或程度停止されたため商品界は鈍狀を呈したまゝであつた、されは前記の積極策はとつて見たものゝ聊か不安にかられ、一應災害地視察の必要を痛感するに至つた同月下旬、東海道線、中央線で二ヶ所程徒歩聯絡のとれる所があつたが同志相謀つて中央線によつて上京するを安全と考へ九月三十日夜出發上京したのである、その出發に際しての名古屋驛に於ける乗車の混雜は實に言語に絶し話しには聞いてゐたが其時こそ窓から飛び込むといふことを實地に經驗するといふ物凄しい状態でやつと席について發車、眞に生命がけである、又千種驛でも乗車客殺到、黒山の如く列車の屋上にまでシガミ附くもの或ひは連結の間立つもの等驛員の制止も聞かばこそ實に野蠻國でもへ行つた様な有様で全く大變なことであつた、そして乗客は無論總て東京へ行く人達であつて、これを見て東京も治安恢復し商取引を開始しつゝあるものと推量して千種驛から多治見驛迄の間に

「賣り物は目を閉じ耳を塞いで買へ、東京より通信する迄は買ひの一本槍で賣るな」と手紙で店へ命じ勇奮して東京へ向つた。

入京は東京の手前から徒歩聯絡で新宿へ到着した、新宿からは電車が通じてゐたので乗車して被害地を視察しつゝ丸ノ内竹中組本部へ出頭して竹中藤右エ門氏に面接した、そこ

で注文される數量の多いのと納付期限の短いのに驚きつゝ竹中組の指定で内幸町の芝虎館に投宿した。尚ほ其當時には一通三十字より電報を取扱はぬことになってゐたのでこの帝都の有様と實況、それに名古屋で今迄どれ程買約出來たかを問合せた至急電報を十二、三枚の頼信紙に書き露天の假設中央電信局前に整列して、それだけの意味を兎に角名古屋へ向けて打電したのであった。其後得意先たる數矢町喜多商店から十三萬圓程の注文を引請け、それが半金現金であつたから六萬五千圓を風呂敷に包んで持つてはみたものゝ毎日七千圓より送れないので止むなく先づ現金二千圓を受取り残は毎日七千圓宛六萬五千圓に達する迄送らせたとして残り半金は品物芝浦着現金といふことで契約し勇躍して東海道線によつて歸名したのであつた、其時を回顧してみると

東京では尚ほ餘震が治まらず深川の貯木場には屍體の腐敗したのがボカボカと浮んで居り到底正視出来るものではなかつたし永代橋を渡つた住友倉庫あたりは尚ブスブス燃えて居つた。それから丸ノ内の内外ビルディング邊りには百五、六十名が生埋になつたまゝであつて蠅が盛んに破壊されたコンクリートの隙間から無数に出入りしてゐたのを實見した程である。

こつした悲惨な摸様を見て何とも言ひ知れぬ感慨に打たれながら自分は巻脚絆に水筒を持って歩いた。

又急な場合には小型自動車（ベビーフォード）を一日三十圓で借切つてそれもなるべく粗末な車を撰んだもので美しい車には氣が引けて乗れなかつた、これで各得意先の避難所へ慰問に又は商取引に馳け廻つたのである、その當時憲兵、警官に對してはいつ如何なる場合、場所でも便乗させねばならなかつた、兎も角、注文も相當量引請けて好成绩を擧げるに至つたがその間の苦心は實に筆紙に盡し難いところである。

「編者附記」濱木屋が株式組織となり愈々伸び伸びとした大活躍を開始した大正九年より關東大震災の大正十二年に至る前後の社會狀勢の動向について述べれば

大正八年、二月には前年たる大正七年末に於ける英米の鐵解禁に依る關西地方鐵商の破綻續出に對し製鐵業救濟問題起る、三月朝鮮京城に萬歲騒動起り、後各地に波及、朝鮮獨立運動の嚆矢と見られ此種運動は後年種々姿を變へ最近迄繼續された、六月廿八日巴里に於て歐洲大戰媾和條約調印さる、時の帝國代表は西園寺公、牧野伯也。八月烟草値上げされ、九月に入りて白米一升六十錢と云ふ騰貴値段出現す、十月政府は（原敬内閣）

物價調節に關する施政方針を發表し暴利取締令を公布、更らに十一月政府は投機抑制のため全國銀行に對して貸出引締めに關する訓示をなす、同月米國ワシントンに於て第一回國際勞働會議開催され、八時間制、幼年工問題につき日本は「特殊國」と認定さる、十二月に至るや日本銀行の兌換券發行高は十五億圓を突破し、コール日歩三錢三里を示す、同年は投機熱に煽られて一大ブームを現出、年度末に於ける歳入剩餘金六億三千万圓に達し戰時中國際貸借受取勘定金は合計廿七億四千萬圓にして戰時景氣の最頂點に達せり、併し既に貿易は逆轉し入超を示しはじめたり。大正九年、一月投機熱衰へず諸商品市場はいづれも全く天井知らずの昂騰相場を露呈し、生糸現物相場最高四、三六〇圓、大阪綿糸現物相場最高五九八圓六七錢、深川正米相場最高五五圓一〇錢、鐘紡先物大引相場の高値五四一圓九〇錢と云ふ商況であつた。二月廿六日政府は衆議院解散を斷行、この解散の主旨は憲政會、國民黨提出の普選案が議會に上程されたる爲原首相は議會に於ては政府勝つとは信ずるも一應國民の批判に訴へるといふのであつた、五月十日右解散に依る第十四回總選舉施行せられ、政府與黨たる政友會大勝す、三月十五日に至るや數年來の狂熱的景氣の反動顯れ株式市場は東株百圓安、紡績株六十圓安と云ふが如き大

暴落を示し大恐慌襲來す、次いで商品市場に波及し諸商品總崩れを示現し慘憺たる市況を呈す、四月増田ビルブローカー銀行の破綻を端緒として金融恐慌勃發し、株式、生糸期米、綿糸各市場は更らに一齊崩落、立合停止に次ぐ立合停止を演じ、遂に各地に銀行取付騒ぎ起り、日本銀行は財界救済資金として貸出額一億二千萬圓を決定す、同月アメリカニューヨーク市場にも恐慌勃發す、五月アメリカの恐慌に依り茂木合名は破綻するに至り、七十四銀行の整理休業、波紋は愈々擴大され、大瓦落は次の大瓦落を誘起して止まる所を知らず、取引は一時杜絶の状態を呈示せり、四月以來七月に至る迄の四ヶ月間に現金の取付を受けたる銀行は本支店を通じて百六十九行の多きに達し實に國內金融界は暗澹として未曾有の危局にありたり、この間工業會社の操短が盛んに行はれ、各紡績會社、毛織會社は二割の操短を決定し各地操業も五、六、七、三ヶ月間の休業を實行して生産量のカバーをなし、又鉄鐵同業會、産銅組合、糖業聯合會等いづれも減産協定を行ひオーバーストックの一掃に努力せり、特に生糸恐慌は益々惡化し生糸價は千百圓を示す、即ち同年初に於ける最高値段四千圓臺の四分の一に崩落し新繭も亦暴落を演じ養蠶家は愈々窮迫す、依つて政府は第二次帝國蠶糸會社を設立し三千萬圓限度の損失補償

を決定して蠶糸業の救済に當れり、十月第一回國勢調査施行せられ當時の人口五五、九六三、〇五三人と發表さる、同年の入超額は四億九千萬圓を示現せり。大正十年、一月深川正米相場最高二八圓九錢を示し、白米標準相場は一圓に付き二升六合九勺となる、

三月三日 皇太子殿下（今上陛下）御外遊被遊

四月に至つて物價指數に就き檢討を行つて見ると戦前基準として大正九年三月の最高指數三三八より一年間に一三八ポイント方激落して二〇〇を示すに至れり、同月米穀法及米穀需給特別會計法公布さる並に職業紹介法發布せらる、五月となるや昨年設立された第二次帝國蠶絲會社の補償生絲買収完了し買入總高七萬二千餘捆に達す、これに依り市場は漸く安定の兆見ゆ、七月十三日、我が國は米國大統領の日英佛伊に對する海軍軍縮會議の提議に應諾して、加藤友三郎、徳川家達、幣原喜重郎諸氏を全權としてワシントン會議へ派遣する事に決せり、全權は十月出發せり、八月頃より中間景氣現はる、我國の物價水準は世界の大勢に反して昂騰に轉ず、此の物價高は輸入を促進して貿易逆調の勢愈々激しく依て爲替は低落を辿るに至る。同月農商務省は小賣商人の暴利取締方の訓令を發す、十一月四日原首相東京驛にて中岡良一の爲に刺殺された。

同月廿五日 皇太子殿下（今上陛下）攝政の任に就からせる

この年重工業部門各方面に反動顯れ職工の大量餓首行はれ爭議頻發す、就中神戸の川崎三菱兩造船所の爭議は罷業参加人員四萬餘人、罷業日數四十六日に亘る大ストライキであつた、然し職工側は何れも慘敗に終れり、同年の入超額は四億四千萬圓に達す。

大正十一年、二月ワシントンに於て海軍軍備制限條約成立し八々艦隊建造計畫は中止となる、而して造船業に一大打撃を與へたり。同月石井商店は八千萬圓の債務を残して破産す、之に關係を有する銀行は三五行に達せり、四月信託法及信託業法公布さる、六月六日高橋首相は内閣改造を企て、元田、中橋兩相反對をなし内閣不統一にて總辭職をなす、六月十二日加藤友三郎内閣成立し、同内閣はワシントン條約に従ひ海軍縮小を行ひ同時に山梨陸相をして陸軍々縮を行はしめた、九月には新取引所法施行せらる。本年々初には中間景氣現はれ下期に入りて金融梗塞を來し商取引の沈衰となり大勢は愈々恐慌後の不況期に入る、年末十一月になるや積善銀行は不善を曝露して破綻し、報徳銀行にも取付騒ぎなどありて、全国各地に於て破綻を曝露するもの二十九行に及べり。

大正十二年、三月陪審法案貴衆兩院を通過す、四月産業組合中央金庫法公布され全國購

買組合聯合會創立さる、九月一日關東地方大震災に見舞はれ國家の損失は實に五十五億圓と稱せらる、同日東京市及附近郡部に戒嚴令施行さる、同日地震内閣と云はれたる第二次山本權兵衛内閣成立す、同十六日帝都復興審議會組織され、同廿七日帝都復興院官制公布されたり、同月の經濟關係事項としては暴利取締令、支拂猶豫令、治安維持の三大緊急敕令發布せらる、八日には東京六大銀行は營業を開始せり、廿七日震災手形損失補償令公布さる、同時に日本銀行は有價證券に對する無制限貸出しの聲明をなし、政府は日本銀行に對して救濟資金一億圓融通を保證し、震災手形二ヶ年間支拂猶豫を發令十月下旬に至り早くも復興氣分起り商内は頗る殷振を極む、年末に於ける兌換券發行高十六億九千萬圓に上り通貨の大膨張を示す、而して入超額は六億一千三百萬圓の巨額に達せり、十一月十五日戒嚴令撤廢さる。

同時に大正八年以來十二年迄の名古屋木材市場の動向推移につき述べれば

大正八年、七月五日名古屋材木商同業組合事務所に於て愛知製材組合の委員會開かれ席上同組合を解散して名材組合へ合併の件を可決す、同製材組合は後七月廿日東海樓に臨時總會を開き組合合併を可決せり、越へて同七日名材組合は評議員會を開いて愛知製材

業組合の名材組合加入の件を協議可決、九月廿八日定時總會を開き製函及製材部の増設に關する本組合定款變更の件を協議、十一月廿日に至り右定款變更の認可ありたり、即ち名古屋材木商「工」同業組合と名稱を變更し從來の出材、問屋、小賣の三部に製函、製材の二部を加へ之れに伴ふ關係條項の變更を見たるものなり。大正九年は別して大した事もなく財界のパニックに依り多少の動搖ありたる位にして、十二月七日には名材組合評議員會を開催して次の如き決議をなせり、即ち、國有鐵道貨物輸送賃の値上は目下の經濟界の狀勢に背馳するを以て當局の反省を促すべき意見書案を可決。大正十年十月十八日、區制變更により組合事務所々在地を南區西古渡町字中島五十八番地と變更さる大正十一年十二月二日、帝室林野局へ御料地拂下陳情の爲（名古屋市南區熱田西町字幣懸一番地ノ四）正副組長、書記等上京林野局へ出頭、十二月二十五日臨時組合總會を開催、製函部の名稱廢止による定款變更の件を可決。大正十二年、新市制施行に伴ひ組合定款第六條の但書を削除し（組合地區に關する但書、名古屋市一圓愛知郡の内八幡村、千種町、愛知町、呼續町）地區を名古屋市一圓と改正す、同六月二十六日組合最初の代議員選舉總會を開き左の如く各部代議員を選舉せり、

第一部	正員	三十名	補缺員	十五名
第二部	"	十名	"	五名

十月十八日帝室林野局より左記の通り地所の拂下許可に接したり。

名古屋市南区熱田西町字幣懸一番地ノ四

御料地外三筆地上立木共（面積八千五百五十六坪一合五勺）右地所の内組合事務所建築  
 豫定地及び長谷川糾七、平野増吉兩氏への贈與地を除きたる六千六百五十四坪六合八勺  
 を三十口に分割し大正十二年十二月十八日組合員に限り借受人札を執行し大正十三年一  
 月より貸借契約を締結せり右に依り、十二月二十七日臨時組合會を開催し不動産の監理  
 に關する條項追加の爲定款變更及不動産部規則を設定せり。

## 關東大震災と

### 名古屋市場の影響

著者自身も關東大震災には色々と活躍、苦勞せられたが、編者は名古屋木材市場全般に

亘つてその影響を述べたいと思ふ、それには色々と文獻もある處であるが編者は名材組合  
 編纂に係る「名古屋木材市場の變遷」後遍に収録しある故愛知縣林務課長高瀬伍助氏の談  
 話並に震災救護用材調達状況に關する原稿をそのまゝ再録して高所より眺めたる名古屋市  
 場の影響を偲ぶよすがとしたい。

### 故高瀬伍助氏

”談話”實は私はあの大正十二年の關東大震災の時の木材供給につきまして記憶のまゝ  
 に書いた原稿がありますから之を見て頂きたいと思ひますが、關東大震災當時の救護材  
 調達の事でも御話しして震災當時の状況を偲びたいと思います。兎に角あの震災には  
 通信機關といふものは全部杜絶してしまつたのでどうにも手の下し様がなかつた、震災  
 が起ると直ぐ横須賀の海軍鎮守府からこちらへ注文が來たが、向方の様子がどうなつて  
 居るやらさつぱり判らない、手紙は無論、電信、電話あらゆる通信機關を使ったが少し  
 も向方に通じない、もうぢりぢりしていろいろと對策を講じてみたがどうしても駄目だ  
 こんな事が約一週間も續いたでせう、もうどうにも仕方がないといふので最後に傳書鳩

を使って漸くそれで向方と通信する事が出来たが、まあ其間の苦勞といふものは一通りではなかつたです、それですぐ様市内の各工場に製材を依頼し諸君の努力に依つて罹災民が救はれるのだといふ様な事を云つて各工場を一々激勵して廻つたので、各工場とも非常な熱をあげ晝夜兼行の大馬力でもつて僅か四日間位の間には二萬石から出来てしまつた、之れは製材した材積ですから非常に大きなものです、それでそいつを輸送するといふ事になつて又一苦勞して漸く其責任だけは果しましたが、當時堀川には二百艘許りの舳があつたが、そいつを約八十艘ばかり押さへてしまつて、それで以てどんどん本船に積込んだのです、さあその爲に名古屋の動脈である堀川の貨物が積めない、どうするのだといふ事で正に重大なる社會問題まで引起そうとしましたが、實にあの時の狀況は今思ひだしてもひやひやする様なことです、それに未だひやひやした事は、何でも二萬噸ばかりの船だつたと思ひますが、米國から重油を積んで来る所の重油船が横須賀から救護材積込の爲にやつて來た所が名古屋港からは多らい沖合に碇泊するといふ事だつたのでとても其處までは木材が持つて行けない、それで色々交渉の結果四日市港に其船を入れて貰つて、そつして非常な危険を冒して名古屋港から四日市までランチでもつて木材

を引張り漸く其船へ積込んだが、あれが波でもあつたり又ロープでも切れ様ものならそれこそ大變な事で、あれだけの木材が散亂してどうにもかうにも手がつけられない事になつたゝらうと思ひます。實にははらする様な事をやつたものです、然し救護材を辯天丸に積込んで私も其船に乗込み、九月十六日の朝こちらを出帆して十七日の朝芝浦につきましたが、あの芝浦の海岸に救護品を格納するバラックがずっと出来てゐるのをみた時には嬉しい様な悲しい様な何とも云へぬ心持に打たれて思はず涙が滲みましました、それからと云ふものは私の方の課のものが一週間交代位で二、三人づつ出張して芝浦の三業組合事務所を占領して其處を事務所にして引渡業務を執つて居つたのです、ところが藝妓置屋、待合、料理屋といったものが十月の末頃から營業を開始したので、それからと云ふものは待合も引渡事務所と云つた様な格好な事になり、もう晝夜兼行の大車輪をかけたものです、まあ御話しすれば色々な事がありますが、名古屋港の事業といふものが今日の如き隆盛を招くに至つたのはあの關東大震災の時の木材供給といふ事が今日の名古屋港を築くに至つた劃期的動機になつたと云つてよいと思ひます。

## 震災救護用材調達状況

(愛知縣林務課長故高瀨五助氏座談會提出原稿)

時は大正十二年九月一日午前十一時五十八分突如天地の大震動は關東地方一帯に襲來し、爲に無數の屋舎は倒潰し多大の人命を殺傷する一大凶變が惹起されました、之に次ぎ火災を繼發し、猛火凶焰は天を焦し、僅かに二晝夜にして遠が文化を以て誇る帝都の大都も灰燼し、遂に廣茫たる焼野原となりました、尙帝國の關門たる横濱市を初め其の災害の及ぶ所一府六縣の廣きに亘り十數萬の貴き生靈と巨億の財貨とは須臾にして烏有に歸せしめたのであります、蓋し有史以來未曾有の大禍難で、世を擧げて戰慄驚愕したことは今尙吾々の記憶新なるものがあります、而して此の凶變一度傳はるや緊急之が罹災地救護の聲は各地を通じ誠に喧しきものがありました、政府に於ては直に臨時震災救護事務局を設置し、罹災地の救護並に復興に關する諸般の事務を開始せらるゝことになつたのであります、即ち九月七日午後二時二十五分臨時震災救護事務局より我が愛知縣へ「小屋掛材料板、檣、小丸太、小角取混ぜ三萬石至急送れ」との急電は到着致しまし

た、仍て即日午後三時に左の返電を發したのであります「小屋掛材料は十日までに全部集まる見込にて目下船舶の交渉中」茲に於て我が林務課は直に課員の總動員を行ひ各般の實行に着手しました、即ち當名古屋市場に於ける材木關係の有力なる各位の御參集を求め各材料の單價各商店に對する割當の種類、數量、發送方法等の事項を數刻にして取纏め、翌日より直ちに材料の檢收並に發送に着手致しました、實は其當時斯くの如き多數の製材品を短時日に取纏め得るや否やを憂慮したのであります、誠に手際よく計畫通り進行するを得ましたのは各位の御努力は勿論ながら當市場の潛勢力の偉大なるに今更驚いたことであります。即ち初日發送は九月十六日より十九日迄に三隻の汽船に依て前記材料を滿載し、名古屋港を出帆致しました、斯くて恙なく順次震災事務局に引渡を了しました、次に横須賀海軍戒嚴司令官よりバラック用及海軍々事用木材(板類、小角檣、垂木、小丸太)五千石の購入依頼があり、軍艦千早、特務艦神威に依て横須賀に送付しました、續て九月二十八日午前九時二十分東京市長より知事宛來電「バラック用木材を十月中に手に入れたし臨時救護事務局にて取寄せたる分の値段にて御買付けを願ふ事出來得る數量何程位ありや、若し買付得るものあらば何程にても御買付の上御送り願



度し」九月二十八日午後五時返電「本日電報を以て御依頼の「バラック」用木材購入の件は前と同價又は幾分低價にて十日間につき五萬石づゝ買付け得る見込」の返電は發せられました十月一日午前十一時五十七分着電「バラック用材の件御配達を感謝す用材の割合は板十石に對し柱類六石、小角六分石、檣類一石、敷居鴨居三分石の見當に願度し成可く多くしさに發送ありたし御買付の値段及船名芝浦着の豫定日時承り度次の五萬石は更に御願ひする迄發送中止ありたし」右東京市長よりの電報に接し私は詳細打合せの必要あり直ちに上京致しました、本件は取扱上縣山林會に於てなすを便宜と認め其旨交渉の結果バラック用材五萬石購入の件愛知縣山林會の名を以て全部の手配をなすことに決定致しました、茲に於て再び業界各位の御參集を求め買付、發送等各般の事項を決定し直に着手したのであります、此時各位の工場は全能力を擧げ罹災民の救護一日も早かれと念じつゝ日夜奮闘努力せられ恰も戰時動員下令の下にあるの感がありました、然して十月十日より十一月十四日迄に亘り八隻の汽船に依て前記材料五萬石を完全に發送し夫々東京市に引渡しを了したのであります、此間吾々は各位と共に不眠不休眞に寢食を忘れて活動を續けたのであります、十ヶ年を経過する今日茲に當時を回想して誠

に今昔の感深いものがあります、只微力によく此の大業を果して罹災地當局の期待に添ひ得たことは一に各位の深甚なる御協力の賜でありまして、深く感謝すると共に自ら満足に感ずる次第であります。

官廳關係から眺めた正確な狀況は以上で盡きてゐるが、業者側としての當時の狀況に對する感想、實驗談を更に附記して震災關係の記録を終止したいと思ふ。

(名材組合編纂、名古屋木材市場の變遷後編収録座談會筆記録 水谷孝三氏談話)

『其時の記憶がありますから一寸御話致しますが、山王橋際に組合事務所があつた時で彼處へ午後四時頃に一ペン來いとふ事で行つて見ると、服部さんも(先代服部小十郎氏)、長谷川さんも(長谷川糾七氏)それから、高瀬さん(前愛知縣林務課長故高瀬伍助氏)と縣廳の方が居られる、あとは製材屋さんがずっと並んで居て、其時の注文の板が十萬束、小角が五千石これを十日以内に造れといふ話で、製材屋さんは板は引受るが小角は何んとしても出來んと斷はられた、夫れは不可んどつしても造れといふことで、長谷川さんが最後に私を呼に來て行きました、他の木材市場からもどんどん出して居るから他所に遅れては愛知縣の面目問題だ、どんな手段でも講じて造つて貰い度いと云ふ事だ、そこ

で考へると私の店に米材の小角丈では足らぬが北海材の丸太は澤山所有して居る故之を交て良ければ期日通り小角を一手に引受けましようと話しました、北海道材はあの時分六百三十圓位だったので七百五十圓位に見て才十五錢位の割合で引受ければ良いと云ふので任せて頂いて、その代り縣廳で市内の有数の工場へ是非此製材を引受けて呉れと云ふ依頼狀を五、六枚書いて頂いて、そうして製材屋を呼んで頂いて、とうとう十日間に豫定通り製材して辯天丸に積み込みましたが、其爲に解がなくなって他の荷が運べないといふので問題が起りました、兎に角築港へ持つて行つて港務所長の奥田さんに（奥田助七郎氏）無理を云つてやつと積んだ様な事ですが、其船が東京へ行つたのは兎に角日本中で一番名古屋が早かつた、高瀬さんも非常に喜んで居られた、其後數回注文が入りまして私の店は勿論、今度は製材屋の山岸、濱木屋さん等も大變お挽きになつたが、今度は材木が七百五十圓から八百五十圓にもなつて七百五十圓の割合で最後迄相當の數量を提供いたしました、六百二、三十圓の材木が七百五十圓なら良いと思つたのです、尙此非常時に東京で此小角類が第一の御用に立つた事を嬉んで居ります云々。』

## 關東大震災と

### 濱木屋の成績

狂熱的相場は逸早く冷卻

關東大震災に依り結局濱木屋としては非常な好成绩を挙げ、約十二萬圓内外の純利益を計上する事が出來た、然しこの精算をした時尚ほ震災復興材引當にアメリカ材を豫約して未着のものがあつたので之れは損失となるものと考へ補填金として三萬圓を豫備金に保留しておいたのである。斯くて愈々米材は大正十二年十二月頃注文せる翌年一、二、三月積の豫約材が十三年二、三、四の三ヶ月間に入荷した爲結局五萬圓程の損失を來し三萬圓の補填金に尙二萬圓不足の有様であつてそれ程震災の狂熱的相場は早くも冷卻したのである。

### 會社經營上の苦心

其當時から著者自身としては非常に會社を經營する上に於て年々の經常費の負擔上各大株主始め一般株式に専務取締役としての責任上營業成績と經常費の比例を考へると苦心の

あることを痛感した。相當の成績をあげるには或る程度の冒險も加味した思惑もせねばならぬ、堅實主義一點張りで進めば成績上らぬ、といふ大きなジレンマに陥るといふ事を考へ出したのである、同時に著者は大正十三年は經濟界は暗澹であらうと推察した、即ち國富を有形無形に百億圓以上をも一朝にして灰燼消失せしめた大震災後であるからその痛手は時を経るに従つて漸次地方にも波動するし、又百億圓以上の國民の財産が夫れだけ減少したのだからその恢復には相當の紆餘曲折を経なければならぬことは常然である、従つて十三年の材界は伸びんとして容易に伸び得ざる苦しい年であらうとの見透しをつけたのである。そこで之れはまづ第一に大臺林業を次には濱木屋の重職を後進に譲る、そして著者は勇退する時であると考へ熟慮の結果それを決行することゝした、前述の如く自己の地位をもつて大正七八年後の好景氣時代に處して、種々の苦心は伴なつたが意の如く順調に進み、著者個人の地位は益々向上し、且つ關係會社も夫々順調發展するに至つたが、著者自信の一身上、家庭上に就て反省する時、あまりにも家庭を顧みる事を疎略にしてゐた事

を發見した、今迄は會社經營上に一意専心せし爲家庭は全て放りっぱなしとなつてゐたがいとしい吾子に父として一家団樂の楽しみを得さしめたいと痛切に思ふ様になつた。それ等が結局著者が濱木屋を退居せんと決心するに至つた一つの原因となつたのである。

遂いに

大臺林業取締役

濱木屋専務取締役

共に辭任

こつした理由から内心深く決するところがあつて重職より身を退くべきだと考へるに至つた先づ大正十三年五月頃大臺林業の常務取締役を辭任して取締役となり續いて十二月にはこの取締役をも辭任し、同時に濱木屋へも正式に辭任を申出たのである、ところが社長を始め副社長、其他重役一同は意外に思はれ、極力留任方を主張されたが前述の關係から深く決するところのあつたのと若し事業上に失敗することあらば主家を一層ないがしろに

して凡て事を自己本意に運んで損をさせ、失敗させたと云はれることとなり、それ等を考へた時此の上重職に甘んじてゐる事は出来ない、是非曲げても社長を始め後進者で經營は出來得るから聞き届けられたいと歎願し漸く十四年一月に至つて内諾を得、三月末日の年度替りを以て三十有一年間勤務した濱木屋を退社することになった。其時の自分の感慨は實に無量、何とも言葉に言ひ現はせぬ、寂寥といふか、名状し難い気持ちであつた、人生の大部分を暮し、住み馴れて來た主家、幼年時代から非常な鴻恩を受けた主家を去るのだから其の氣持は全く唯々胸に迫る悲しみ、こみ上げて來る淋しさをどうする事も出來なかつた、然し遠くへ去るものではない、自分の生命のある限りはこの恩を忘れず精神上にも亦事情の許す限り物質上にも報恩の誠を盡さねばならぬと心に誓つたのである。

尙ほ茲で附言しておきたい事は濱木屋對著者はロバート・ダラーの一件から主家としては著者の一擧手、一投足に多少の疑惑の眼を向けられた様であつたが、何等疚しい處なく且つ水谷、永田、長谷川諸氏と共に樺太の落葉松を買占めた時などは美事に適中し十割の配當を行つた事もあり手を染めること何一つとして適中せぬことなしと云う有様で兎にも角にも三十有一ヶ年間眞に主家の爲を思い紛骨碎身努力を重ねて來たのであつて、尙ほ著

者の力が足らざりし爲、一層の盛大を招く事が出來なかつたが顧みて主家の厚恩に聊かの報恩を果し得たと自ら信じ自ら慰めてゐる次第である。

## 井桁藤商店愈々創立

著者の個人經營として大正十四年四月一日開店

愈々獨立を以て名古屋市南區東築地五號地三番地に井桁藤商店を創立、小出治郎太、宮戸新一、長田英雄、堀勝義、蟹江忠作、清水弘和等を店員として中丸太及米材を主として堂々十四年四月一日に營業を開始した。一方三井物産支店に出入して特に信任を得、木材部主任安立辰彦氏、山村專三氏らと肝膽相照し、同年六月には支店長諒解のもとに三井物産とジョイント計算で三十萬圓内外を限度として中丸太の買約に取掛つたのである。井桁藤商店といふ名稱は著者の祖先は「井桁屋<sup>みげたや</sup>」といふ屋號を唱へてゐたが、父の代に町内等では「井桁藤」と呼ばれてゐたのであつて、それを繼承したのである。

## 三井と提携し

### 中丸太界に活躍

まづ第一回には米山丸積二萬石を當時の最低價格七九掛百石につき四百三十五圓を始めとして六萬六千石程格安物を買占めたのである、この時一般材界では自分が如何なる方法でどの方面から資本を得たのか不可思議に感じてゐたが、この時が尤も迷惑の時期であつて、適中し二ヶ月餘りを経過した八月下旬に至つて日毎に騰貴し始め其間盛に轉賣もしたが結局百石六百三十五圓相場が十月に現はれたのである、この時名古屋材界はもとより東西市場共に井桁藤の加藤は十數萬圓の利得をしたと其評判は素晴らしいものであつたが開店初年度の事でもあり世の風評の如くは儲からなかつたが純益六万圓位を得たのである之の成績は初年度の成績としては良好であつて、頗る得意の頂上に達しながら朗らかな大正十五年の春を迎へたのである。

### 新築中の本宅の竣工

尚ほ大正十二年以來逐次建築中であつた名古屋市中區葛町五十四番地の本宅も十五年の春愈々竣工を告げるに至つたので事業は隆盛の極、得意の絶頂にあつたところから親戚、知人、得意先を招いて竣工祝賀の一大賀宴を張つたものである。

### 事業思はしからず

#### 不愉快な年（大正十五年）

大正十五年の春再び三井物産に對して昨年度の如く共同で中丸太の思惑を開始せんことを慫慂したが、何時も柳の下に鱈はゐないから熟考の要ありと主任から諭されたが何しろ商賣好きの著者として矢も楯もたまらないので独自の立場でもつて今が絶好の仕入時期とみてアサカ丸積中丸太を買つたがさて損をせぬまでも意の如く儲からない。尚一方三井物産に對し共同買付開始を迫りつゝある時ハドソン丸積中丸太を共同で買付けたが思ふ如き利益も計上されぬ、止むなく米材に力を加へることにしたが、その米材たるや昨年とは事

違い之又豫想の如く行かない、米松大中角、小角、檜杉丸太計百五十萬B M程を手持ちしたまま越年したのである。

### 事業上の蹉跌

#### 難局に逢着す

年は昭和と改まって二年、この年も年柄とは正反對に不愉快なる年を迎へたもので斯うなつて來ると人生は妙なもので、爲すことがすべて志と喰い違いを生じ、市内共二材木店（假名）、鹿山材木店（假名）、知多郡乙川の田中製材、蟹江の鈴福製材、市内高井杉治郎（假名）等のために驚く勿れ合計四萬三千圓の引懸りを生じてしまった。一方當時手持残りの米材約八萬立方呎が値下りの爲一萬五千圓程の損失となり合計五萬八千圓の損失を受けた、そこで當時十萬圓内外の推定財産があつたと思ふがこの様な大損失を招いたゞめまづ所持の有價證券不動産を處分してこの難關を切抜けるより方法がなかつた。

其の當時は日本の經濟界の動搖の眞最中であつて前途は暗愴たるもので四月には國家的に

モラトリアムが布かれるといふ有様で、非常に内部的整理の上に苦惱の日を送つたもので兎に角所持の證券も不動産も全物一物も残さずに處分してしまつたが其當時の勇敢なる行爲は今考へてみて、よくもかほどの決心をし英斷的な處置が出来たものと再々思ひ出す次第である。こつした處置をした事が今日の存在ある所以であつて、あの場合著者に勇猛心がなかつたならば今日の自分は到底存在しなかつたであらうと考へる、こゝで思ひ至るのは恰度家康公の遺訓

「人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し云々」

の如く眞に人生は重荷を負ふて阪道を上りつゝある様なもので若し足を踏みはずしたとか車の調子に狂ひを生じ逆轉し出した場合には決して無理をせぬ事である、まづ重荷をおろして身輕になつて頂上に達することが必要であるといふことは體驗上からしみじみ感じたのである。自分は確かにそれを實行したのである、然しこつした斷行は言ふべくしていざ實行となると容易に出来ない、之れには血涙が伴つた、新装成れる新本宅は全部處致して立退き假住居のさゝやかな借家に入る、全く悲壯な氣持であつて、この場面は子孫も共に深く銘記されたい、そして其際残つた資産としてはひいき目にみて三萬圓内外であつた

この秋に當り隣家にして株式界大成功者安藤竹次郎氏及び前警視總監安立綱彦氏令嗣安立綱彦氏兩氏の進言に従ひ且つ兩氏の助力を賜った事を茲に明にしたい。著者は此の後三井物産本店に向けて感謝狀を謹呈した次第である。

#### 築地本店を閉鎖して

#### 中店を本店とする

斯の如き事情から止むなく南區東築地の五ノ三にあつた本店を閉鎖し、南洋材取扱専門店として大正十五年七月に開設しありし中店(現本店、名古屋市南區熱田西町米田四十七番地)を本店としたのである、時に昭和二年五月であつた。然して自から進んで各銀行、業界新聞社等を歴訪してこの間の事情を公表し、内心では若干社會を呪つたのである。一方營業方針に一大變革をなし、投機を加味した思惑を絶対に廢して獨立獨歩堅實主義によつて將來有望と認めた南洋材及び之れに附随する加工品を主とし、附帶事業として中丸太の委託を神戸の内外汽船より引受けて、打つて變つた堅實主義の營業を繼續して行つた、

之れには三井支店主腦部の方々の指導と援助が與つて力ありし事を今尚ほ感謝してゐる次第である。

#### 南洋材を主に

#### 堅實主義に進む

其後三井物産名古屋支店では約十萬圓迄の範圍内の南洋材及附隨の商品を取扱ふ事を許されたがその代り社員一名宛毎日弊店へ詰切りで日報、週報、月報を提出したもので、斯くして苦境を切り抜けつゝ進んだのである、其間著者始め長田英雄支配人(小出治郎太は東築地本店閉鎖と共に退店)其他従業員一同眞に涙ぐましい活動を續け逐次基礎を鞏固ならしめつゝ昭和三年を迎へた。

「編者附記」大正十三年著者が濱木屋を退店する様決心を固めた當時より、獨立開業して逸早く好調を得、そして幾何もなくして逆轉悲境に沈倫し、又好調子を取戻して漸く店隆昌に向はんとした昭和三年春迄の社會狀勢の動向推移に就て記述すれば、

大正十三年、一月一日清浦奎吾氏に組閣の大命降下し同七日清浦内閣成立す、同月神戸に生絲検査所開設さる、即ち生絲輸出の一港主義（横濱港のみ）が二港主義（横濱港並に神戸港とす）に變改された爲である。二月ロンドンに於て英貨六分利附二千五百萬ポンドの公債並にニューヨークにて米貨六分半利附公債一億五千萬ドル成立す。七月奢侈品輸入關稅十割の法律公布さる。同月小作調停法公布、並にメートル法實施さる、十二月日本製紙聯合會成立す。同年の入超額七億三千萬圓と稱せらる。大正十四年、三月各地機業不振を極め休業續出、重要輸出品工業組合法公布さる、同法に附帶して輸出組合法も公布さる、米穀法改正され從來數量調節を主とせるを價格の調節を行ふ事となれり時制の進運に伴ふ進歩的改正なり、同月農商務省は農林省、商工省に分接されたり、農業、工兩國策の遂行の爲に當然分離さるべきものがこの年に實現したのである。四月に至り大藏當局は地方銀行の合同、預金協定の勵行並びに整理減配の獎勵法につき地方長官に通牒を發した、この布達に依り八月に至り年初以來の全國の減配銀行總數は千百二十餘行に達せり、同年十月國勢調査施行せられ人口五九、七三六、八二二人と發表さる

同年の貿易額は五十億圓を突破し、入超額は三億圓臺に減少し稍々順調なり。

大正十五年、一月廿八日加藤高明首相死去し、同三十日若槻内閣成立す、若槻内閣は組閣早々稅制整理案を發表せり、その内容は通行稅、賣藥稅等を廢止し營業收益稅、資本金子稅を新設せり、議會閉院後松島事件及朴烈問題等起り世論罵々たり、二月に入り株式投機熱教興し諸株は大正九年以來の高値を唱ふに至る。三月關稅定率法改正實施され貿易保護主義愈々濃厚化す、

十二月廿五日 大正天皇崩御被遊

同日 今上陛下御踐祚被遊

昭和と改元。

昭和二年未曾有の金融恐慌の年なり。

三月片岡藏相の失言問題に依り震災手形所持銀行の内情曝露され、此處に金融恐慌の發端となり、十五日東京の渡邊銀行及び、あかぢ貯蓄銀行の支拂停止あり、續いて中井、村井、中澤、八十四、左右田等の諸銀行休業せり、四月には鈴木商店破綻し、臺灣銀行の四億五千萬圓に上る不良貸付曝露し深刻なる金融界不安を露呈し、政府は臺銀救濟緊



急敕令案を樞密院に諮り、否決され、若槻内閣は四月十七日遂に總辭職するに至る、田中義一内閣同廿日成立、依而臺銀は臺灣島内を除いて他の支店は全て休業する旨發表、續いて近江、十五兩銀行休業、特に十五銀行の休業は世の耳目を震撼す、全國至る處の銀行取付を受けたるもの擧げて數ふべからず、全國銀行は廿二、三の兩日臨時休業し、二十二日には向ふ廿一日間を期間とする支拂猶豫令（モラトリアム）發布さる、然して休行の止むなきに至りたる銀行は三十二行に達せり、誠に未曾有の金融恐慌なり。日銀の非常貸出高は廿億九千萬圓、兌換券發行高廿六億六千萬圓と實に空前の巨額に達す、この金融恐慌に依りて資金は弱小銀行より郵便貯金及び一流銀行に集中するの傾向濃化す。五月三日第五十二回議會召集（臨時議會）、議會に於て政府提出の日銀特別融通及び損失補償法案並に臺灣金融機關融資法案が兩院を通過し、九日公布施行されると共に臺銀も開店し、財界には漸く安堵氣分漲る、五月廿八日田中内閣は山東出兵をなせり、七月の新系出廻最盛期に入って糸價千三百圓を割るに及んで、蠶糸中央會は臨時總會を開き第三次帝國蠶糸会社設立を決定、五萬梱の買上げ及び擔保貸付をなす、九月に入り政府は蠶糸救済のため五千萬圓の低資融通をなす。

著者獨立開店の井桁藤商店も之の金融恐慌の波動を受けて營業上の一大改革をなすに至つたのである。

### 組織の變更と

#### 南洋材へ一層の活躍

昭和三年三月三十一日に資本金三萬五千圓（出資振合、金三萬一千二百圓無限加藤清吉、金一千五百圓無限長田英雄、金一千圓有限吉野信行、金五百圓同宮崎胤雄、金五百圓同長谷川光治、金三百圓同村瀬信夫の合資會社井桁藤商店を設立して著者の個人經營たる井桁藤商店の業務一切を繼承したのである。其間南洋材は關東大震災當時から兎も角僅少ながらも各市場へ輸入されつつあった、名古屋としても吉見、江口、材摠などが何れも相當の苦心を拂つて研究された結果は市場販賣品として見込みのない材種であると考へられて顧みられなくなつてゐたが、大正十五年七月三井物産から派遣された佐藤孝一氏が南洋材の主産地フィリッピン、ボルネオ、スマトラ附近に視察を遂げての歸朝談を同社三階で開か

れたのを拝聴して、之れは将来性のあるものといふ感を深くした。同時に東京、横濱、大阪等の市場に就て審さに研究調査し名古屋としても等閑に附すべきものならずと考へ前記専門店を開業したのであって、中丸太、其他木材の投機的營業は廢止し、南洋材を終始一貫名古屋を中心に宣轉擴張し將來の本業とすべく勇往邁進したのである。斯様な立場上南洋材の環境に就き、より一層その信念を深からしめたと共に、一方生活程度の低下を計りあらゆる方面に細心の注意を拂つて奮闘努力したのは勿論、この商賣から得られる利益は全部販路擴張に投入しそれに依り自分が日本に於ける南洋材取扱業者として最も著名な立場になるのを目標として粉骨砕心した、だから他の方面では井桁藤商店の行動を客觀的に見て狂人視されてゐた、夫れ程に凡ゆる方法をもつて宣傳したのであって或時はホテルに百餘名の顧客を招いて披露宴を張り、更に豊橋、静岡、金澤、宇治山田等で宣傳披露會を開き又業界新聞はもとより、日刊新聞の廣告、種々なるポスター、電柱、電車内の廣告利用をなすなど各種各様の方法にて南洋材そのものを一般的廣く利用されることに努力を傾注したもので更らに一方名古屋市中區日置町出郷露橋の荒川源蔵氏と協議して同工場でラワンベニヤ板の製作を開始した。

## ラワンベニヤ板の

### 製作に着手

然して荒川源蔵氏が製作されるラワンベニヤ板製品は全部引受けるといふ特約のもとに製造に着手せしめた、この當時既に日本プライウッド、新田ベニヤ等の先輩者は之れが試作販賣を始めて居られたが何しろ單價が高い關係から一般向の需要とならず、むしろ特殊向のものとされてゐたが、著者の着眼點としては價格は夫程高價にはつかぬ筈だから或程度利用されるものと確信して製作を初め、製品は遠く西は鹿児島、長崎、博多、東は新潟水戸、高崎方面等各知名の材木問屋へ一、二束宛歎願的に販賣方を申込み新販路の開拓に努力した、その間の苦勞も亦非常なもので、一般は之の新製品に對する智識殆どなく賣擴める爲に拂つた苦心は全く並大抵でなかつた、或る時、山陰筋の有名なる某材木問屋の如きは殆ど香具師と同一視し、こんな欺瞞的商品は取扱はぬと劍も水口口の挨拶を受けた事もあつた。著者並に支配人長田英雄、社員宮崎胤雄、村瀬信夫等はこうした世相の中を東

奔西走席の温まる日とてなく萬難を排して極力ラワンベニヤ板の利用普及に献身奮闘を續けた、が當時の製品は全くお話しにならぬもので仕上げの如き手削りであったから頗る粗悪な製品であった、斯くて不屈不撓の努力は漸く實を結ぶ時期が到來し、日に月に販路の擴張を見るに至り、南洋材の聲價が認められるにつれてラワンベニヤ板の用途も擴大され價格も製作技術の進歩と共に逆に低下をみたので一層用途も増し年と共に製産量も増大して植民地初め遠く大連、青島、上海、マニラ、アメリカ、歐洲諸國等所謂世界各地方迄もラワンベニヤ板の輸出を見るに至った、この間漸く十ヶ年間、最初豫想だになかった現今の發展殷盛振りをながめる時うたゝ感慨無量なものが多々ある。ラワンベニヤ板を中心に發展をの段階を辿った本邦のベニヤ業界が或ひは全國ベニヤ板業者聯合會、全國ベニヤ工業會、愛知縣ベニヤ板工業組合等の統制團體の許に益々發展しつゝある現在、その草分けとも云ふべき時代に筆紙に盡し難い苦闘を経験した事を想ひ自ら欣快を禁じ得ぬ次第である。

### 三井の監督から

#### 單獨に開放

#### 店運隆盛に向ふ

昭和四年三月となつて三井物産では井桁藤商店は最早や單獨營業の基礎出來たりと鑑定され又事實もそう見えるからといふので監督を解除され、三井から出張の社員は引揚げられた、斯くして日々店運は隆盛に向ひ加ふるに一般の信用も回復したのである。當事恰度内外汽船株式會社では中丸太の伐出賣材を責極的に行はれたのでその委託を引受け、昭和四年以來同八年迄、少ない年で十五萬石、最も多い年は二十七萬五千石といふ様に名古屋揚げを一手に取扱ひ幾多の苦心と販賣上困難が伴つたが之れも大過なく受托し終せた、そしてこの歴大な受托木材もよく義務の履行が出來、従つて手数料なども相當の額を得られたのである。

## 横堀倉庫賣場

### 新堀川出張所新設

昭和七年四月、名古屋市中区堀江町三丁目に新堀川出張所を開設して（同出張所は昭和十一年末閉鎖）主としてラワン挽材、北海雜木乾燥材並にベニヤ板の販賣を行ふ事とし、翌昭和八年八月名古屋市中区東出町二丁目地先（中川運河東支線六號地）に横堀倉庫賣場を開設してベニヤ板床廻材等を主として販賣することとした、同支店は今日尚ほ盛に販賣商戦を繼續してゐる。斯くして社運愈々隆盛に向ひ、昭和八年八月一日資本金八萬二千圓（出資振合、金六萬四千七百圓無限加藤清吉、金五千三百圓無限永田英雄、金一千八百圓有限宮崎胤雄、金一千五百圓同佐伯市次郎、金一千五百圓同村瀬信夫、金三千圓同横井ふさ、金七百五十圓同加藤清道、金五百圓同磯田芳松、金七百五十圓同小島萬九、金六百圓同蟹江忠作、金五百圓同清水弘和、金五百圓同平野茂、金五百圓同横井光儀、金八百圓同加藤房子）に増資し層一層の活躍をすることとした。

### 樺太敷香氣材の入札

前述の如く内外汽船の委託材を受けて相當の成績をあげたことにより、昭和八年度樺太敷香氣屯材十萬石の官行材入札に際して内外汽船では著者の名儀で四十九萬四千九百餘圓で落札するといふ有様で名實共斯界に宣揚されるに至つた。尚一方南洋材も年と共に需要一般化し最初の特需の範圍を去つて現今では木材界には無くてならぬ重要商品となり最初は消化力も一ヶ月一千石乃至二千石未滿なりしものが順次増大し來り今日の南洋材時代を現出してゐるのであつて、この點も十年以前に着眼した事がよく偶然と云ふか適中と云ふか符合した事はけだし快心の至りである、すべて物事は三年以上十年の苦節を経過せねば實績を上るものではないといふ事を事實の上に行つてみて感じ入つた次第である。

### 南洋材によつて

#### 井桁藤の名高し

大正十五年から昭和二年に亘つて南洋材に着眼して之れに主力を注いだからこそ我が國

材界に井桁藤のある事を認められたが之れが中丸太、米材、内地材にのみ従事してゐたならば到底今日の名聲は得られなかつたと思ふ。

### 滿鮮に進出

#### 落葉松を買ふ

昭和七年度には北滿及北鮮に着眼し敦賀から清津に活躍し先づもつて栃木商事の落葉松を伊藤菊三郎氏と共同で買付けて北鮮の事情をよく認識し、次いで北村梅七氏との關係で東拓と昭和八年度落葉松一萬石の買約をなし、斯くして昭和八年春も同九年にも北鮮地方を踏破して朱乙港から小型汽船で三千石内外宛武州、對州、相州等の汽船に積み大阪、名古屋へ輸送した、之れが積込の時などは土地不馴れと言語不通のために實に苦心困難を重ねたのであつた。

### ラワン製品の

#### 鮮滿、臺灣進出

昭和七年には取扱主要販賣品たるラワンベニヤ板、各種ベニヤ板、ラワン挽材、北海雜木乾燥材などの販路擴張のために朝鮮、滿州、臺灣などに着眼し先づ朝鮮釜山、木浦、大邱、大田、京城、仁川、平壤、新義州、其他各地に販路を求めて種々なる難關を経て遂次之れが擴張を見つゝ、昭和八年に至つて滿州方面にも取引を開始し、昭和九年に至つては相當數量の消化を期待出来る様になった、臺灣は昭和九年度より開始し之れとても三、四回宮崎社員の渡臺結果によつて販路も遂次擴張され、今日に及んでゐる。

### 競争激甚のため

#### 利益減殺さる

南洋ラワン材原木及ベニヤ板共に一般需要家が認識を持つと共に取扱業者も増加しこゝに自由競争の結果利益は漸次輕減されそれが常道ではあるが結局井桁藤商店としても益々取扱數量の増加を計らねばならぬし、又取扱商品の種類も各種各様に取扱はねば營業上差支へを生ずる故、昭和八年秋以降北海道雜木挽材も漸次開始し九年三月に久方振りて北

海道へ出張した。

## 北海雜木材取扱と

### 現地視察の爲に出發

まづ三井物産小樽支店木材部佐野清氏と共に昭和九年三月十五日吹雪の中を小樽を出發し、途中瀧川三浦華園へ雪中を難行して到着宿泊す、翌十六日朝出發留萌を經由し古丹別を視察して再び留萌へ引返して宿泊、十七日留萌を出發旭川にて土場を一巡して稚内迄行き一泊十八日は稚内を出でて附近沿岸樺岡、聲問、鬼志別等を馬橇にて筆紙に盡し難い苦行を続け知來別、内太留呂を経て時前へ午后八時に到着した、この間の行程は一方はオホーツク海に臨み一方は斷崖絶壁の危険極まりない道を通るのであるから全く生きた心地がしない、途中馬橇は數回轉覆して雪中に投げ出され幾度となく念佛を唱へた次第であつた。聲問の附近からは宗谷海峽を距て、遠く樺太の南端を望み見る事が出來り度明治四十四年、津輕、南部方面を駆けめぐつた當時青森から北海道の空を眺めて何れはあ

の土地も自分の足で各所を廻らねばならぬと心に念じた當時を思ひ全く懷舊の念を禁じ得なかつた。十九日は時前より鬼志別へ引返し、更に濱頓別迄行き一泊、二十日濱頓別發小頓別へ行き馬橇にて六線を経由して枝幸へ到着する、この日のコースでも馬橇は何回も轉覆した、枝幸にて山本興吉と云ふ人の招待で或る料亭へ行つたがその設備の御粗末さに一驚を喫した、翌二十一日早朝山本氏の案内で明治二十九年八月九日日蝕觀測の行はれた遺蹟を見學した、英・米・佛其他各國の有數なる天文學者が集まって觀測されたが概して不成功であつたと云ふ、この時土地の人々は眞の親善振りを示したので之れに感激したアメリカの學者は洋書二百九十圓を寄附されそれを基本として、又用材は觀測の時の材料を用ひて立派な圖書館が建設されてゐる、この觀測隊の隊長は米人ダビット・ビートット氏であつて、同氏は歸米後コロナの寫眞を送付して來られて今だに立派に遺されてゐる。そして枝幸を出發して音標へ向つたが途中から猛烈な吹雪となり枝幸より途中の徳志別迄は僅々三里の道だが馬橇にて二時間半もかゝつた、徳志別に着くと吹雪は一層猛烈となり暴れ模様である土地の人や馭者はこれより音標へ行くのは止した方が良くとすゝめるのだが血氣の著者はこれ位の雪が……と多寡をくゞり同行の佐野氏もこの方面は馴れてゐら

れたので大した事はないさと云ふ様な譯で、北海道の恵問家の佐野氏が太鼓判を押されたから大丈夫、それ出發と勇み立つて徳志別を發つた迄はよかつたが、さてこれから著者等一行は生死の堺ひを彷徨する事となつた徳志別と音標との丁度中間邊り迄來ると愈々暴風雪となつて煙幕でも張つた様に吹雪で直きに馬の足が埋まり既に馬の腹の邊迄雪が積もつて咫尺を辯じ得ぬ。馬櫓は一寸も動かない、雪が降るのではなく降つた雪を一塊つつ風がまとめて吹きつけて來るからじつとしておれば忽ち雪達磨になり生埋となつてしまふ。

三人は櫓から降りてシャベルを振つて自分たちの周圍に雪のバリケードを造るのである。もう力のある限り根かぎりシャベルで雪を掘り上げて周圍にうづ高く積むのである、そうすると吹きつける雪はバリケードに當つて益々高く吹き上げられて行く、吾々はやうやく空洞の樣の中で小康を得られるわけである、こうして進退極まつた吾々はこの空洞の中で暴風雪の鎮まるのを待つ、一分が一時間に思はれ一時間が一日の様に思はれる。やがて暴風雪は稍弱くなつた様だ、吾々は洞の一角を崩して外へ出る、全く外へ出る感じである。渺然として果てしない雪野原に未だ雪は降つてゐる、身體全体は既に知覺を失つてゐる。馬櫓を急がせて音標へまっしぐらに走る、日がどつぷりと暮れた午後八時頃漸く音標の宿へ着

オトシク

オトシク

くことが出來た、宿の人達は吾々の姿を見て茫然としてゐる、そして吾々の無鐵砲さに非常に驚いてゐた、音標に着いてから再び暴風雪となり宿屋はミシミシギシギシとゆれる

オトシク

始末に著者は宿の各部屋のランプを消して廻つた様なことであつた。この夜中即ち二十二

オトシク

オウム

日午前函館に大火があつたのである。二十二日朝同じく吹雪をついて音標を出發し雄武へ

オウム

オウム

向ふ、雄武で中食を認め小憩の後興部へ行き一泊、この日も幾度となく轉覆をした。翌二

オウム

アハシリ

カミシヤリ

十三日興部發、遠輕、留邊蘂を經由して網走へ着く、二十四日早朝網走を發つて、上斜里

カミサツル

テシカガ

テシカガ

シツチャ

クシロ

上札鶴へ寄つて弟子屈へ出て一泊する。二十五日弟子屈發、標茶經由で釧路着一泊、二十

オウム

アツトコ

ニシク

オカシク

六日は午前三時半と云ふに早くも起牀して厚牀、西別等を巡視して中春別に中食、それ

オウム

より尾岱沼本材迄、此間は殆ど休息の暇なき強行軍であつて輕便鐵道、ガソリンカー、馬櫓等を利用して息つくひまない強行を續けた、途中巡視の山林が貧弱であるのに一驚を喫

オウム

した次第であつた。尾岱沼は丁度天の橋立の様な松並續きの島が海へ突出した處で自然の灣をなして良港となつてゐる、その突出した島に馬が多數放牧されて全く大陸的氣分が汪

オウム

溢してゐる、尾岱沼では原木が悪くて閉口した、この方面では流石にスキーが盛んでどんな人でも皆スキーが一番輕便な交通機關で重用されてゐるが著者はスキーが出來んの度

々困った。中春別で大力の女に逢ったがこの人は今村運送店（とは名ばかりでバラック式の貧弱な運送店）のおかみさんで体重二十四貫あり、ガソリンカーからの荷降しは一人で樂々やつてのけると云ふ大力振りである。この人の娘が又大女でち彘子と云ひ十三才で十四貫からあると云ふから大したものである。二十七日は昨日の逆コースを辿つて厚岸アッケシへ来て一泊。二十八日厚岸より釧路へ戻つて一泊。二十九日午前十時に釧路を發つて帯廣オシロ經由上土幌へ上土幌より帯廣へ戻つて一泊。三十日は帯廣を發て帯尾へ出て帯廣へ引返して再び宿泊。三十一日帯廣より砂川經由小樽へ出て一泊。以上の各コースを恙なく終へて四月四日無事名古屋へ歸着した。斯くて雑木産地の認識を深めると共に實に好参考となつた、その時約五千石の雑木を買約し四月六日名古屋へ歸着した、其後昭和十年二月には支配人長田英雄が北海道へ出張し天塩、北見、釧路、日高などに於て約一萬六千石程買約をなし再び七月出張して四千石程の買付をなした、其當時の氣持としては南洋材、ベニヤ板などの薄利から將來雑木界に於ても一層活躍すべき事を痛感してゐたのであつて、現在に至る迄繼續して北海雑木の移入を行つてゐる。

## ベニヤ板保税工場

### 大江合板株式會社設立

時勢の進運に伴ひ昭和八年に南洋材輸入を主とした加工品の保税工場設立を目論見種々研究の結果昭和九年春當局へ願書を提出し昭和十年一月十四日附をもつて大阪税關官房より許可の内達があり、よつて同年三月四日の吉日を卜して名古屋市南區笠寺町加福三ノ切四五六に水上保税地域二千坪、陸上保税地域三千坪を定めて地鎮祭を執行、建設に着手した、然し之れには相當の固定資本乃至流動資本を要するが故に獨力をもつては若干井桁藤商店の營業上に幾分影響することあると考慮し一、二の同志と共同經營を諮つた結果鈴木商會（鈴木鐵次郎氏）が同意せられ、出資は双方半々と云ふ事で資本金十萬圓二分一拂込をもつて五月設立、名稱を大江合板株式會社とし、七月十八日諸機械の試運轉をなし、越へて八月保税工場（合資會社井桁藤商店保税工場）として正式認可が發令され、九月十一日正式開業したのである。著者は同社の取締役社長に就任し、専務取締役鈴木鐵次郎氏、取締役長田英雄氏、監査役日比野德次郎氏諸氏と共に社運隆昌の爲に努力し、第一期には



若干の利益を挙げ、十萬圓金額拂込満株となし、昭和十一年五月廿八日附で資本金を五萬圓増資（四分一拂込）して第二期營業年度を經過し昭和十二年三月には尙ほ一層の發展性を確保し得るに至つた、その間同社は保税工場なる爲製品たるラワンベニヤ板は外國にのみ販賣を許され（内地に賣る際は輸入税を賦課される故内地市場では他製品と競争不利）る關係上販路の開拓には實に並々ならぬ苦心を拂ひ現在では南阿、歐洲、南洋、滿洲、中華民國、各地方に強固なる得意先を獲得して、製品の優良、規格の正量をモットーに保税工場獨特の地歩と相俟つて層一層の發展をなすべく懸命の努力を致しておる次第である。

## 井桁藤商店

増資と共に一層の活躍

井桁藤商店では業務の擴充と共に資本金増加の必要に迫られ昭和十二年一月十萬圓に増資をなし（出資振合金七萬五千圓無限加藤清吉、金七千圓無限長田英雄、金二千五百圓有限宮崎胤雄、金千五百圓全佐伯市次郎、金千圓全小島万丸、金千五百圓全村瀨信夫、金

千圓全横井光儀、金八百圓全蟹江忠作、金七百圓全清水弘和、金三千五百圓全横井ふさ、金千圓全加藤房子、金千圓全加藤清道、金千二百圓全加藤周一郎、金八百圓全加藤俱子、金五百圓全伊藤政治）益々業界に雄飛する事となった。然してラワン丸太の輸入は比律賓産並にボルネオ産の良材を以て各方面に名聲を拍すると共に、挽材方面に於ても各官廳、會社納入の乾燥材は獨特の良質挽材を供給して確固たる地盤を築き、ベニヤ板も内地其他諸外國に向けてその取扱數量は國內有数の地位を占め、其他チーク材、フローリング等に就いても獨特の優良製品、信用ある商戦を續けて井桁藤の名聲日々に高し。

「編者附記」昭和三年著者の個人經營なりし井桁藤商店の組織を變更してより今日の隆盛を見るに至りたる間の社會經濟狀勢の動向推移に就て述べれば

昭和三年、五月日本商工會議所創立さる、昭和二年五月に山東出兵の擧ありてより支那に排日氣勢揚り、同三年五月に至り益々熾烈となり上海、廣東方面一帶排日氣分に包まる、六月四日張作霖が奉天驛附近で爆死す、七月に入り諸銀行は土曜日半休を實施す、八月勳章問題其他の疑獄問題起る、八月廿七日不戰條約調印されたるが、この條約文中

の「人民の名に於いて」と云ふ字句が政治問題となる。

十一月十日 今上陛下 御即位の大禮を行はせらる。

昭和四年、三月糸價定融資補償法公布（同法は九月より實施されたり）、六月拓務省新設、七月田中義一内閣滿洲某重大事件に關聯して總辭職をなし、同日濱口雄幸内閣成立す、同月工場法施行適用工場に於ける少年工及び女工の深夜業廢止さる、十月ニューヨーク株式市場大崩落を演じ世界的恐慌の發端となる、十月十五日官吏減俸問題起り相當物議を醸す、十一月廿一日濱口内閣は昭和五年一月十一日より金輸出を解禁すべき旨を決定發表す、依つて正金銀行は金解禁に備へ英米財國に對して一億圓のクレジット設置交渉をなし成立す、昭和五年、一月十一日金輸出解禁され十七日に至り外銀はまづ正貨輸送を開始す、三月に入りて各市場大暴落をなし就中生系恐慌甚だし、政府は糸價安定補償法を發動し融資を開始す、此の時の融資豫定總額は一億五百萬圓にして貸付豫定數量は十五萬圓と定めらる、四月二十二日ロンドン海軍々縮條約調印成る、八月國勢調査施行、人口は六四、四五〇、〇〇五人と發表さる、十一月十四日濱口首相東京驛にて狙撃され重傷を負ふ、年末までの正貨輸送三億二千萬圓に上る、本年米作は大豐作にし

て六千六百萬石を數ふ、米價は崩落し米穀法の無力を曝露す、夏、秋籾の平均値二圓四錢と云ふが如き恐慌的安値出現し農村の窮乏益々つふる。昭和六年、六月重要産業統制法を實施、同時に工業組合法實施さる。七月に改正米穀法實施、之の米穀法改正は昨五年度産米の農作に依り無力化した米穀法に米穀基準價格及び外米輸入管理の二項目を制定したるものにして注目されるべき改正なり。八月には不戰條約批准問題あり、九月十八

日滿洲事變勃發す、同月廿日イギリスは金本位の停止を發表し、之等に刺激された我が財界各方面では十月初旬よりドル買熱昂まり、漸増の傾向を辿るに至りたる爲、政府は金利引上と統制賣とを以て對抗したるも、正金の金現送は既に十月下旬に於て一億圓に達するに至り之の狀況に對する官民合同の財會時局懇談會開かれたがドルの思惑買は絡熄せず、十一月にはドル買合戦の場面を見せ、日銀は利上げを續け、正金の統制賣爲替は二億圓に上る、第二次官民合同時局懇談會を開いて、財界有力者間に金本位制擁護の申合せありたり。十二月十三日金輸出再禁止斷行せられドル買側に凱歌が上つたわけである。同月兌換停止緊急敕令發布せらる。本年の貿易額廿五億圓にして戦後に於ける最低であつた。昭和七年、一月八日櫻田門不祥事件起る、一月中旬より爲替低落し始め二

月に入り圓爲替、並に外貨債暴落を演ず、一月廿八日上海事變勃發して益々擴大、三月一日滿洲國建國を中外に宣言。五月十五日いはゆる五・一五事件起る。七日日銀は保證準備を十億圓に擴張す、同時に納付金制度を採用する事と決定され、又一方資本逃避防止法を實施す。同月「全國勞農大衆黨」と「社會民衆黨」と合同して「社會民衆黨」成立さる、委員長安部磯雄氏、書記長麻生久也氏、九月農林省に經濟更生部設置され、農村經濟の更生策實行に乗り出す。同月日滿議定書調印成る。十月郵便貯金の大口利下げ行はる、即ち四分二厘より一舉に三分に引下げ也。同月王子製紙は富士製紙、樺工兩社を合併して大製紙トラスト出現、木材界への影響大なり。即ち北洋材の内地各市場入津量の漸減に直接間接の影響を齎したるが故なり。昭和八年、三月廿七日我が帝國は國際聯盟脫退を通告す。米國に金融恐慌勃發しルーズヴェルト大統領は金輸出禁止をなす、同月ヒットラードイツ獨裁權を掌握す。五月爲替管理法實施さる、六月帝國人續株の肩代り行はれ臺銀所有の帝人株十萬株を生保團（昭和五年十月生命保險會社の共同投資機關として生保證券株式會社創立され同社は昭和八年二月解散されたるも有力生保會社間には尙ほ斯種團體存續され居り生保團といはれるものなり）及び大阪綿絲商に賣卻せり後に帝人事件として世間の耳目をあつめつゝある、その發端とも云ふべきものなり。十一月戰時インフレの所産たる臨時工問題起り政府は臨時工にも工場法の適用を命じた。本年は未曾有の大豐作にして米穀實收七千萬石を突破すれども農村にはかへつて「豐作饑饉」の聲高し。昭和九年、一月資本金二億四千五百九十四萬圓の日本製鐵會社創立せられ八幡製鐵所、釜石、富士、三菱、九州、輪西等の各製鐵會社合同し一大鐵鋼トラスト成立。五月貿易調制及び通商擁護に關する法律公布實施さる、同月帝人事件起る、これにより時の齋藤内閣總辭職す。九月廿一日關西地方に颱風襲來し大災害を受く、本年跛行景氣の徵歷然と現はれ軍需インフレ景氣は股振を極め、中商工業者、農村、特に小農は飢餓に瀕するの狀況を示せり。昭和十年、四月國體明徵問題起り、美濃部達吉博士の「逐條憲法精義」「憲法提要」「日本國憲法の基本主義」等發禁處分に附され、八月三日、政府は國體明徵に關する聲明を發表、九月美濃部博士は貴族議員を拜辭し起訴猶豫となる、これより先き三月には日露間に北滿鐵道讓渡交渉成立し、代價は一億四千萬圓、滿洲國はロシアに對し三分の一を現金で支拂ひ、殘額は物品にて支拂ふ事と協定。七月カナダの關稅政策對抗の建前より通商擁護法を發動。十月國勢調査施行、入口

六九、二五一、二六五人。同年の貿易額五十二億圓に達し空前の記録也。昭和十一年、二月、いはゆる二・二六事件勃發し朝野は擧げて戦慄、震撼し一時は國民全般は非常な不安氣分に包まれ色々派生的感情の動搖が見られたが次第に冷靜に歸し、兩三年末急進的偏倚に移り來つた政治社會狀勢の動向を靜かに回顧する餘裕を持ち得るに至つた、その間僅々の日數であつて日本國民獨特の敏感性と沈着さとを如實に示現せる次第であつた。二月二十七日帝都一帯に戒嚴令布かる、二十九日叛亂軍鎮定さる、三月九日廣田内閣成立し馬場藏相は故高橋前藏相の方策たる公債漸減主義の放擲を聲明せり、財界に統制經濟論旺んに行はれ、四月政府は低金利政策を採り五分利債の低利借換をなす、五月一日第六十九議會招集、五月四日の開院式に際し二・二六事件に關し特に言及される敕語を賜る、本議會に於て臨時工問題に就て大論議あり「退職積立金及手當法」通過す、但し全産聯の猛反對により政府案は大なる修正を受け、五十人以上の工場のみに適用を限定された。六月對濠通商擁護法發動さる、七月改正重要産業統制法施行され、八月商工組合中央金庫法定款認可となる。十一月廿五日、日獨防共協定成立、十二月二日、日伊協定發表。十一月には秋田縣尾去澤の三菱鑛山貯水池決潰し、死者六百、罹災者千六

百に及ぶの大慘事あり國民等しく哀悼の意を表す。

#### 名材同業組合

#### ベニヤ業界の

#### 公職關係に就て

附 愛知縣ベニヤ板工業組合設立

著者が濱木屋専務當時より今日に至る迄の間名古屋材木商工同業組合並にベニヤ業界關係の公職に就任したる事項について述べれば、

同業組合代議員

自昭和二年九月

至昭和三年四月間就任

自昭和四年九月

至昭和十一年四月間就任

同業組合評議員

自大正九年九月 至大正十一年八月間就任

自大正十二年七月 至大正十四年六月間就任

昭和十一年五月より更び組合評議員となり今日に至る。

名古屋材木業經濟聯盟會副會長

同業者相互の取引圓滿、不拂者に對する團体的制裁等を目的として昭和六年八月二日せられ總會に於て副會長に推され昭和八年迄就任。

名古屋材木協讚會

昭和九年一月右經濟聯盟が提題の如く名稱を變更する事となり全三十一日總會を開催副會長として留任し以來今日に至る。

名古屋材木仲立業組合長、顧問

大正十五年著者は問屋なりしも仲立業者の統制大同團結を企畫して提題組合を創立し組合長に互選せられ其後は顧問として今日に至る。

名古屋ベニヤ協會會長

昭和八年九月一日名古屋ベニヤ協會設立されるや推されて會長に就任以來今日に至る

全國ベニヤ板業者聯合會副會長

昭和九年四月一日紀州白濱に於て同會第二回大會開かれるや、それ迄名古屋のベニヤ業者は個人加盟の形式で参加してゐたのが此の會より名古屋は正式参加する事となり同大會に於て撰ばれて副會長に就任、以來今日に至る。

一部聯合會副理事長

昭和十二年五月十五日日本木材新聞社主催の全國ベニヤ板業者懇談會が名古屋市公會堂に於て開催された際ベニヤ板販賣業者のみに依る會團結成の氣運が起り、其夜八時から名古屋市中區大須の旗亭八千久にて結成の準備委員會が開かれて大阪側業者川井

義貫氏外八名、名古屋側業者著者外八名席の上で種々打合せをなし、一部聯合會の名稱の許に販賣業者一致團結して進む事となった。翌十六日名材組合にて創立總會を開き互選の上副理事長に就任以來今日に至る。

#### 愛知縣ベニヤ板工業組合理事長

愛知縣ベニヤ板工業組合に就ては聊かその設立の經過を述べたいと思ふ。

昭和十年八月二十三日午後四時より名古屋材木商工業組合事務所樓上に於て全國ベニヤ板業者聯合會名古屋支部主催のベニヤ板研究座談會が開催せられたる時著者はベニヤ板工業組合設立の急務を力説し、出席組合員萬場一致賛成依つて結成委員詮衡方を著者に一任されたので、同廿五日次の如く結成委員を指名して一路組合結成に向つて邁進する事となった。

高山音次郎、名古屋合板、熱田合板、加周合板、カクタ合板、田中平三郎、淺井領助、丸八ベニヤ、富田ベニヤ、天野ベニヤ、荒川工業所、鈴木鉄次郎、加藤清吉以上十三名。

依つて右結成委員は九月四日午後一時より名材組合會議室に參集し組合組織の要綱に就て慎重研究討議をなしその大體を決定した、その要綱は大體次の様なものである。

目的「ベニヤ板業の改良發達を圖るため共同施設をなすを以て目的とす

地區「愛知縣一圓

名稱「愛知縣ベニヤ板工業組合

組合員「地區内に於るベニヤ板の製造を業とするものを以て組織す

出資一口の金額「金百圓とす

事務所「名古屋市に置く

事業「本組合は左の事業を行ふ

製品の検査並に規格の統一

設備の検査

生産數量の調節

販賣價格の統制

共同販賣

#### 資材及び材料の共同購入

營業に關する指導研究及調査其他組合の目的を達成するに必要な一切の事業越へて九月十二日名材組合事業所に於て名古屋ベニヤ協會定時總會が開かれたので、參會協會員一同に前紀組合組織の大綱を委員より説明をなし諒解を求めた、同時に中川名古屋市商工課長並に川合愛知縣商工課屬兩氏より工業組合に關する指導的講習を受けるところあつた、同月廿五日午後六時より工組結成準備委員會を開催して定款草案の審議を爲し前記十三名の結成委員を發起人に專任した。發起人は以來六回に亘り會合を開き昭和十一年一月八日發起届けを提出し同月廿八日には午前十時三十分より名材組合樓上大會議室に於て吉田愛知縣商工課長、中川名古屋市商工課長、吉田愛知縣林務課主事、川合愛知縣商工課屬各來賓並に組合員二十名、委任狀十名、合計三十名出席の許に創立總會を開き著者は發起人を代表して挨拶並に經過の報告を述べ議事審議をなす。當日議定された議案の裡重なるものは役員選舉の件で選任された役員氏名は

監事 元木喜平、種村鐵之助、天野忠三郎

理事 宮崎賢一郎、阪口七郎平、田中平三郎、小栗儀造、淺井領助

白川一雄、鈴木鉄次郎、淺野哲三、荒川源藏、加藤清吉以上

其後一件書類を具備して三月十二日主務省宛申請提出をなす、著者は四月二十日上京して商工省に出頭、工組認可促進方を具申す、其後南阿聯邦の我國ベニヤ板に對する高率ダンピング税賦課問題が起るや著者に商工省貿易局長寺尾進氏より同問題の對策協議懇談會出席方の通達があつたので商工省第三會議室に出頭の際重ねて愛知縣ベニヤ板工業組合發起人總代の資格にて認可促進方を開陳したのである。斯くて加盟組合員が鶴首して待つた工組認可指令が五月二十九日愛知縣商工課へ通達あり、六月六日には縣當局より名材組合内創立事務所へ之が送達があつて、愈々組合は成立したのである、依つて之が經過報告發起人會を六月十一日開催して左の諸點を決定した。即ち

一、事務所設置の件は名材組合の一室借受申請書を提出する事

二、出資金第一回拂込一口廿五圓は七月五日迄とし取扱銀行は名古屋銀行古渡支店とする事

三、施行細則起草委員選定の件は監事、理事を以て委員とし草案を作成する事

其後の經過は六月三十日役員認可申請を爲す、七月四日第一回出資金拂込完了、七月九日

役員認可指令到達、七月十一日、十二日理事會を開き理事長、副理事長の選任をなし

理事長 加藤清吉（大江合板株式會社）

副理事長 淺野哲三（熱田合板工作所）

兩名就任。七月十八日登記申請をなす、斯様な過程を経て着々その形態、内容を整へると共に事業開始の緒に就く事となり、九月八日名材組合會議室に正式認可後最初の臨時總會を開き「製品の格付と製品検査事業」に就いて審議をなし愈々十月一日より製品検査、レツテル貼付等の實施第一次の事業を開始する事となった、以來極めて良好なる成果を擧げつつある、今本組合が制定せる規格に就て詳細を示せば次の通りであつて、名古屋で製産される工組加盟工場の製品は全國、海外何れの地方に對しても充分誇り得る立派な規格を保持しているのである。

内地向製品規格

一等品（完全無缺點なる製品を指す）

一、表面に裂け、節、蔦疵、虫害及變色なきもの

一、芯重なり及甚しき芯離れなきもの

一、寸法充分にして厚さ正確なるもの

二等品（一等品に適せざるもの）

一、表面しみは全平方尺に對し一〇%以内のもの

一、表面裂け木口より三 糎以下のもの二個所以内或ひは一五糎以内のもの五個所以内

一、表面節直經一 耗以下のもの三個以内

一、表面蔦疲直經一 耗以下のもの三個以内

一、甚しき虫害なきもの

普通品（ラワン材製品のみに適用）

前記一、二等品規格に準ずるものの混合を指す

輸出向製品規格（歐洲）

柾目 Sawnded or Sliced

A 兩面一等品級

兩面共左の如し

一、柾目にして節、裂け目、割れ、白太、入皮、埋木等なきもの



- 二、材質上の變色なきもの但し材本來の色濃淡なるもの差支なし
- 三、膠シミ、皺、仕上げ上の缺點矧ぎ目の重なり開き、及びベニヤテープの蹟なきもの
- 四、矧ぎ合わせる各片の木目模様鈞合良好なるもの
- 五、鉋掛け又は金剛砂仕上げせるもの

B 片面一等品級

表面のみ両面一等品に同じ裏面は左に適合するもの

- 一、柾目又は板目にして生節又は直經 $\frac{1}{2}$ 吋以内の死節（抜節なきもの）五個以内のもの
- 二、割れ又は裂け目幅 $\frac{1}{4}$ 吋長五吋以内のものにして埋木四個以内のもの
- 三、幅 $\frac{1}{4}$ 吋長一吋以内の入皮二個以内のもの
- 四、材質上の變色なるも板の強力の甚しく減殺せざるもの
- 五、シワ、矧ぎ目の重なきもの
- 六、矧ぎ目の開き幅 $\frac{1}{16}$ 吋以内長十吋以下にして皺割れ三個所以内のもの
- 七、鉋掛け又は金剛砂仕上げせるもの但し表面より劣る事差支なし

C 両面二等品級

両面とも左の如し

- 一、柾目にして直經 $\frac{1}{4}$ 吋以下の生節又は $\frac{1}{8}$ 吋以下の死節（抜節なきもの）三個以内のもの
- 二、割れ、又は裂け目幅 $\frac{1}{4}$ 吋長五吋以内のものにして埋木二個所以内のもの
- 三、白太甚しからざるもの差支なし
- 四、幅 $\frac{1}{4}$ 吋、長 $\frac{1}{2}$ 吋以内の入皮二個以内のもの
- 五、材質上の變色輕微にして膠シミ見苦しからざるもの
- 六、仕上げの缺點輕微なるもの
- 七、シワ、矧ぎ目の重なり、矧ぎ目の開及ベニヤテープの跡なきもの
- 八、上記の諸缺點は六吋×三吋の板に於て片面に合計五個以内のもの
- 九、鉋掛け又は金剛砂仕上げせるもの

D 片面二等品級

表面は両面二等品級に同じ、裏面は片面一等品級の裏面に同じ

板目（一枚モノ）Rotary Out joint

A 両面一等品級

両面共左の如し

- 一、 柁目にして短きなきもの
- 二、 直徑 $\geq 4$ 吋以下の生節又は $\geq 8$ 吋以下の死節（抜節なきもの）三個以下のもの
- 三、 裂け目、割れ目及び白太なきもの
- 四、 幅 $\leq 8$ 吋、長 $\leq 2$ 吋以下の入皮二個以内のもの
- 五、 材質上の變色なきもの但し材本来の色濃淡なるものは差支なし
- 六、 膠シミ、シワ及仕上げ上の缺點なきもの
- 七、 上記諸缺點は六吋×三吋の板に於て片面に合計五個以内のもの
- 八、 鉋掛け又は金剛砂仕上げせるもの

B 片面二等品級

表面は両面一等品級に同じ

表面は柁目・片面一等品級の裡面に同じ

C 両面二等品級

両面とも左の如し

- 一、 板目にして短き目又皺なきもの
- 二、 直徑 $\geq 2$ 吋以下の生節又は $\geq 4$ 吋以下の死節（抜節なきもの）三個以内のもの
- 三、 裂け目、割幅 $\leq 4$ 吋、長五吋以内のものにして埋木三個以内のもの
- 四、 幅 $\leq 4$ 吋、長一吋以下の入皮二個以内のもの
- 五、 材質上の變色輕微にして膠シミ見苦しからざるもの
- 六、 仕上げ上の缺點見苦しからざるもの
- 七、 上記の諸缺點は六吋×三吋の板に於て片面に合計五個以内のもの
- 八、 鉋掛け又は金剛砂仕上げせるもの

D 片面二等品級

表面は両面二等品級に同じ

裏面は柁目片面一等品級の裏面に同じ

板目（矧合せ物）Rotary Out up to 3 joint

A 両面一等品級

両面共左の如し

- 一、板目にして、節、裂け目、割れ、白太、入皮及埋木等なきもの
- 二、材質上變色なきもの但し材木來の色濃淡なるものは差支なし
- 三、膠シミなきもの但し幅 $\geq 23$ 吋を越へざる矧ぎ目の膠シミは差支なし
- 四、皺仕上げ上の缺點、矧ぎ目の重なり、矧ぎ目の開き、ベニヤテープの跡なきもの
- 五、矧ぎ合せたる各片は木目模様釣合良好なるもの
- 六、鉋掛け又は金剛砂仕上げせるもの

B 片面一等品級

表面は両面一等品級に同じ

裏面は柾目片面一等品級の裏面に同じ

C 両面二等品級

両面共左の如し

- 一、板目にして直經 $\geq 4$ 吋以下の生節又は $\geq 8$ 吋以下の死節(抜節なきもの)三個以内のもの

- 二、裂け目及割れは幅 $\geq 4$ 吋、長 $\geq 5$ 吋以下のものにして埋木三個以内のもの
- 三、幅 $\geq 4$ 吋、長 $\geq 4$ 吋以下の入皮二個以内のもの
- 四、材質上の變色輕微にして膠シミ見苦しからざるもの
- 五、仕上げ上の缺點見苦しからざるもの
- 六、皺、矧ぎ目の重なり、矧ぎ目の開き及ベニヤテープの跡なきもの
- 七、上記の諸缺點は六吋 $\times$ 三吋の板に於て片面に合計五個以内のもの
- 八、鉋掛け又は金剛砂仕上げせるもの

D 片面二等品級

表面は両面二等品級に同じ裏面は柾目片面一等品級の裏面に同じ

- (一) 以上は六吋 $\times$ 三吋面を基準とせしに付き差支なき缺點數は板の大小により其の平方吋の比率に應じ加減せらるゝものとす
- (二) 芯板に付きては特に指定せざる限り樹種、品質其他總ての點に關して組合員は何等の拘束を受けざるものとす

- (三) 木目模様につきては組合員は何等の拘束を受けざるものとす、前各項は柾目、板目

の各全般に適用せらるゝものとす

以上の規格を基いとして検査員は嚴重なる審査を施行し愛知縣製品の向上を目指して一路邁進してゐるのである、幸ひにして検査施行後は各消費分野各方面の需要家筋が此の愛知縣ベニヤ板工業組合の熱意を充分斟酌せられて極めて喜ぶべき好結果を得てゐる。検査を受けた品物に對してはその成績に該當するレットルを工場自ら自制貼付する建前となつており、こうした明朗な氣分で造られる製品はどの地方に於ても安心した取引が出来る。簡単に申せば、ベニヤ板の正量取引である、レットルには工場名の代行番號が記入されてゐるから消費者の便益は倍加される。必然的に最近の取引の傾向に就て見ても、工業組合加盟工場製品に對する需要の聲が一段と昂まつてゐる事實を吾人は明白に見せられてゐるのである。

一時的とは云へ名古屋地方のベニヤ板に對する不評判を吾々は聞かされて洵に残念に思つてゐたものであるが、現在ではその聲は蔭をひそめて好評凡く昂揚されてゐる。

其他組合は工場操作上の統制に就いても組合成立以來實施した経過に依つてその効果を充二分に知るを得た。本昭和十二年上半期には原料たる木材（原木）膠着劑、其他の騰貴

甚だしく各工場共操作上經營上に多大の苦心を要し、難關に逢着したのであるが、組合は統制施設として加盟工場の操短を施行して製品の採算維持を計り、好成绩を収める事が出来た、又最近に於てはベニヤ業界の不振に直面するや工業組合では鐵道省、運送業者と種々交渉をなして共同保管倉庫の施設をなし製産過剩に依る一層の低落を防止すべき事として又好成绩を挙げ其後實施中である。斯様に統制の賜は隨所隨所に發揚されて、組合員は一糸亂れざる聯携を保ちつゝ、今後の諸事業を考究すると共に一層の發展を目指して進みつゝある。尙ほ著者が快心を禁じ得ないものは、之の愛知縣ベニヤ板工業組合の好成绩に徴して東西各地のベニヤ市場に各々工組成立の氣運が濃厚化し、着々實現の日が近づきつゝある事で、全國打つて一丸とした工業組合聯合會の結成が日ならずして具體化し、今後爲すべき業界の諸施設發展策が一層の強度を加へ擴大充實されると信じられるのである。日本のベニヤ業から世界のベニヤ業へ、地球上に覇を唱へる日も遠い將來ではあるまい今吾々はその目的地へ一段づつ上昇前進しつゝある、そして業界最大の恩人たる故淺野吉次郎翁に對して餞けの印として、業界殷盛の狀況を地下に報ずる事が出来よう。

これ程の喜びはお互にまずあるまいと思ふ次第である。

## 結びの言葉

以上拙文を以て纏述し來つた著者今日に至る迄の想ひ出の數々は拙文故に盡きぬ感が深い、尚ほ色々述べたい事もあるがあまりに長くなつては讀んで下さる諸士に對しても相済みぬ次第であるが、巻後回顧する時、著者の半生は全く幾變遷を経てゐる、そしてそれが國家材界に及ばした功罪に至つては、著者自信が省ふ苦難の過去に比して何等とり立てて云ふべきものなく、唯々自己の力と學識の足らざらしきを憾むのみである。

然し著者半生の人生行路難の諸相は巻頭に述べた如く、これから伸び伸びとした人世の春に逢ひ、豫測する事の出来ない苦しい山阪を幾度か經て行かねばならぬ若い人々が過ちを避けて中庸の道を進むべき好参考となり、刻苦精勵大成される楔にともならば望外の喜びとする處である。

以上蕪辭を連ねて結語とす。

昭和十二年六月

## 附録

### 香港・中南支遊行記

私は一兩年前から香港、中南支地方へ旅行をしたいと思つてゐたが仲々機會に恵まれず漸く店務其他公職關係に餘暇を得て昭和十二年五月廿二日午前八時十五分關西線で名古屋を出發した、大した旅行でもないでござり出掛けるつもりであつたが、驛頭には親戚、知友三十名餘りの見送りを受けて仲々賑やかだつたし、畏友神野鑛逸君が音頭取りて萬歲々と壯途を祝つて下さつたので思はず顔が熱つて同時にわけもなく目頭らが熱くなつた。

乗船豫約の加茂丸（郵船濠洲航路船）は名古屋、大阪、神戸と經て長崎を廿四日に發つのでその都合上私は大阪、神戸で商用を濟し廿四日長崎へ到着したのであるが、船の豫定が一日遅れたゝめ長崎で一泊して、廿五日市内を見物旁々長途の一路平安を祈る爲、諏訪神社に參詣して御祈禱を受けた、祈禱の先客があつたので待合す裡に刻々乗船時間が切迫する、終へて早速自動車で波止場へ駈けつけてみると出帆の銅鑼が鳴つてゐる、取るものも取りあへず解で本船へ急ぎブリッチを駈け登つて豫約の一等室へ落ち着いた、そこで失

敗をしてゐるのに氣附く、それは乗船時には水上警察署でパスポートに認をしてもらはねばならぬのだが、その時間が無かつた爲に認めをもらはずに乗船したのであつた。止むを得ず乗船官吏に認め方を依頼したが陸上でないと出来ないとの事である、この認め云々は戻つて來てから乗船地の警察でやかましい事となるので困つたが乗船官吏のとりなしで航行するを得た、先づこゝで赤毛振りを發揮したわけである。

一等船客の九割は外人で日本人は數名である、そして香港に上陸するのは私一人で他の人々はマニラ、メルボルン方面へ行く人ばかりであつた。日本人の乗客は

貴族議員醫學博士 男爵 高木喜寛氏（帝大教授）

（マニラ在住フランス婦人の直腸癌手術の爲特に招聘されて（マニラでは外國人醫師の手術施療等を禁止してゐるが直腸癌の権威たる氏を特に招聘されたのである）六週間の豫定で渡比されるのである、同氏はマニラで極めて好結果の手術を施こされて日本醫學界の爲に萬丈の氣をはき六月二十二日氷川丸で歸朝された）

騎兵中佐 岡田親秀氏

（陸軍省の命に依りシドニー、メルボルン、ニュージールランド、南米各國を経て大西洋岸に出てニューヨークへ行き大陸横斷してシャトルより歸朝、約六ヶ月の豫定で海外視察に赴かれるのである）

大日本ビール技師 吉田憲介氏

（大阪貿易がマニラにビール會社を設立するので技手數名（二等船客）を引率して建設の爲に派遣されて行かれる）

教師 黒澤敬一氏

（マニラの日本人學校より招聘されて先生として赴任される）

前述の様に一等船客の九割迄が外人ばかりなので吾々は自國の船に乗りながら何となく肩身狭く暮さざるを得なかつた、サービスも全く外人本意となつてゐて不愉快な氣持を抱

かせられた、高木博士は海外生活十二ヶ年の経験を持つてみられるので凡て伸び伸びとした船中生活を送ってみへたが吾々赤毛布は自らを卑下してゐた點もあるだろうが外人本意のサービスの環境裡に多少縮こんだ生活を送らざるを得なかつた。船長の話に依れば何時の航海でもこうした状態で外人客が多いので勢ひ外人本意にしなければならず、日本人の海外發展力が如何にも微弱であるのを平常殘念に思つてゐるとの事であつた。

長崎出帆以來晴天の日なく、霧が深く、而も加茂丸は臺灣海峽を通過せず臺灣の東側を南下するので四面見るものもなく、結局船室に閉ぢこもつて本店、支店、滿鮮地方出張中の宮崎社員との間に盛に電報の交換をなし内地、滿鮮各方面のベニヤ板、厚木其他商況の推移を知ることが出來た。

船は一路故障なく南下して五月二十九日朝香港の對岸九龍(Kowloon)の郵船波止場に安着した、埠頭には香港八達公司の蒙主人、揚支配人、並に先着の日神海運商會名古屋支店長日比野幸盛氏諸氏が出迎へてゐて下さつた。船上から眺めた香港の景況は實に立派である、ビクトリア・ハーバー(Victoria Harbour)には英國の軍艦、其他各國の商船が碇泊してゐる。神戸をもう一廻り大きくした感じである。要塞地の兵舎は何れも堂々たる

立派さで且つ華美で質實剛健と云ふ氣風は見へない。

旅券の査證と檢疫を受けて解で九龍の波止場から香港へ渡り上陸するのである。吾々が解で着いた香港の波止場の隣りが商船波止場であつて、例の南米移住の同邦を乗せた堂島丸の爆發椿事は此處で惹起されたのであつて、吾等は雄途空しく異郷に散り行きし同邦の靈に對して冥福を祈らずには居られなかつた。

香港上陸と共に警察署で旅券を示して上陸届けをなし承認を得て、宿舍たるアイスハウス街(ice House Street)の松原ホテルに旅装を解いた。小憩後楊氏の案内で市内各所を見物したが大廈高樓、結構の美は下手な文字で粉飾するより巻頭の寫眞で御紹介しておく。

木材業關係の視察をしたが先づ第一に目についたのはボルネオ産南洋材の原木、板子、カポールの板子、原木、チーク材(三等品級)其他種々なる木材が各材木屋の店頭、土場に置かれてあつて、その裡支那政府の國產獎勵に依る福州の杉、松等が多數取扱はれてゐるのが更らに特に目をひいた。大體の業態は内地の業者と比べれば規模は小さいが、こじんまりとした商賣を續けてゐる。ベニヤ板も夫々取扱はれてゐるが大部分私共(大江合板

株式會社製出)の製品が陳列してあって非常に愉快であった。

流石は老大国英國の租借地だけに大陸的氣風で、要塞地の撮影等は禁止の高札が麗々しく掲げられてはゐるが撮影したいがどうかと巡邏の警官(印度人)に尋ねると三脚を使用することはまがりならぬが唯々寫すだけならかまはぬと至極鷹揚である。

夜の香港は亦格別である、九龍方面から眺めた夜景の美しさはチョット形容の言葉がない、その夜私共は蒙氏の御招待で金龍と云ふ支那料理家で純粹の支那料理を味ふ事が出来た、山海の珍味とはこの事を云ふのであつて純粹の支那料理のうまさは内地では本當に味はくれないと思つた、然し吾々菜食の國民はこれを主食としては油濃くてやり切れないのだが時たまの攝取だからたまらなくうまい、支那美給の仲々の愛想よいてもてなしで時の移るを忘れ、眞夏の夜の微風が心持ちよく酒樓の窓邊から入り、じっとり汗ばんだ肌をくすぐる。

夕食後ホテルへの歸途ダンスホールへ寄つて多勢の人々が歡を盡して踊り戯れる様を観察した。

翌三十日朝、ホテルで同行の日比野氏と今後の旅程や八達公司へ提出のオファーに就て色々打合せをなし、蒙氏、揚氏の來訪を受けて後自動車にて宿より南方約四里の裏ホンコンとも云ふべき場所にあるホンコンホテルの別荘(The Repulse Bay Hotel)へ案内されてドライブを試みる、同ホテルの様式は巻頭掲載の寫眞の様にその規模は帝國ホテルに似てゐるが、到底比ぶべくもない、壯麗、華美である。ホテルの前庭は更らに海邊に連り海水浴が出来る、テラスから眺めた花園の美しさ、太陽の輝かしい光に照り映へる緑の芝生等ホンコン第一流のホテルの名にそむかぬ。尙ほ視野を擴げればホテルの南方海上にミッドル島(Middle Island)が繪の様に浮びその先に東ラム海峡(East Lamma Channel)を距てラムマ島(Lamma Island)がどしどしとひかへてゐて丁度和歌山縣紀井三寺の前庭から淡路島並に遠く四國の諸山を望見するに似た明媚な風光で、南國特有のゆつたりとした氣分にひたる事が出来る。

丁度日曜日の事とてホテル前の濱邊は大變な賑ひで外人連が盛んに海水浴を楽しんでゐて、ビーチパラソルに憩ふもの或ひは夫婦が腕を組み合つて水へ飛び込むもの、兎も角兎に等しい有様を呈してゐる。

ホテルでは午後ティーダンス(Tea Dances)が開かれるとの事であつたが私は中食後口



ーヤルホンコンゴルフクラブ (Royal Hong Kong Golf Club) のクラブハウス、コースを視察して引返へす事にした、同クラブはホテルから歩いて數分で行かれる處にあって、ホテル宿泊のエトランゼーが多數、ゴルフに打ち興じてゐた。

自動車で海岸通り (Bung) 迄引返した私達は今度は同じく自動車でピークトラムウェイ (Peak Tram Way) の終點迄ドライブを試みた。トラムウェイの終點迄は急阪の連続であつて、右に左にドライブウェイは曲りくねつて登るに従つて益々急である。神戸の街から六甲へ登るに似てはゐるが道路の素晴らしさと急なことは比較にならぬ程すごい。丁度トラムウェイの終點へ登りつめると眺望は愈々托けて九龍の街が眼下に黒ずんだ姿を見せて、一方東ラムマ海峽、西ラムマ海峽 (West Lamma Channel) が清翠な水をたゞへて、小帆の漁船が小さく浮んで見入る。自動車を乗り捨て、私達 (日比野氏、揚氏と私、蒙氏は車で待つてゐる) は頂上を尾根傳ひにあちらこちら散策した。ビクトリアピーク (Victoria Peak)、ハイウエスト (High West)、マウントキヤメロン (Mt. Cameron)、軍事療養所 (Military Sanitarium) 等を見て廻つたがかなり疲れた。歸途はピークトラムウェイで降りた。このケーブルカーは六甲の様に垂直でなく斜線的にS字型を書いて上下してゐてス

ピードは猛烈に早い。

そしてホテルで夕食をとり夜の香港の街を見て歩いてその夜の十時英國汽船のシャッター號 (SS Shatter) に便乗して廣東 (Canton) へ向つた、船はビクトリアハーバー (Victoria Harbour) を右にランタウ島 (Lan Tau Island) の右側 Kap Shui Mun Pass を通過し救河 (Kant on River, Quikiang) を遡上して九十哩翌日の午前六時廣東 (Canton) の波止場へ着いた。

まづ河岸に碇泊してゐる日本軍艦吳竹、若竹の勇姿に云ひ知れぬ心強さと畏敬の念を覺へた、廣東市は香港と比較すると何となく田舎じみて居り市内の様子も雜然としてゐるが、道路はかなり整つてゐたし、河岸通りには大厦高樓軒を列べて堂々たるものである。廣東は例の十九路軍の發祥の地だけに排日、抗日の本場であつて、市中の勢力は英國人が第一で邦人は在留者數も少ない關係か微力のように感じて誠に遺憾であつた。

新亞ホテル (New Asia Hotel) で朝食 (早餐) をとり、食後中山大学、中山記念堂、其他を見物すべく自動車で出掛けた、中山大学は面積十七萬坪、文學院、法學院、女子大學部、女子寄宿舎等が既設され其他の各科學院は目下建設中である。吾々が視察で特に異様

に感じたのは學校正門前に機關銃が据へられてゐた事で、文化の殿堂に迄こつした施設をしなければ何事も晏如たり得ない隣邦國の諸情勢を淋しく感じた。次いで七十二烈士の墓十九路軍記念碑等を見物したが何れの碑石にも抗日、失地恢復云々の文字が刻まれてあつて極めて不愉快である。その近くの軍官學校では式典でもあつたらしく分列式を舉行してゐたが支那が將來力強い國家たらんと努力してゐる様子がうかゞわれた。その後五層樓へ行つた、小高い丘上にあつて仲々ガツシリした威容を誇つてゐる。内部は博物館になつてゐて色々な物品が陳列されてゐたがわけても抗日の爲の陳列物などは特に吾々の目をひいた。五層樓を出て孫文記念堂（中山記念堂）を見学したが鐵骨コンクリート破風造りの廣大なる建物であつて、内部は公會堂式で色々な會合が出来る様になつてゐる、三百五十萬ドルを費したゞけに裝飾、器物は結構の美を盡してゐる。

中山堂を辭してより六榕寺花塔を視察した、外觀は八層となつてゐるが内部は各層が二階となつてゐて十六階である、それを上まで登つたが丁度内地の七月中旬頃の氣候で炎暑厳しく流汗淋漓となつてせつせと登る、内部には夥しい佛像が安置されてゐて五百羅漢堂を順拜するに似た何となく敬慮な氣持ちとなる。

市街へ戻つて晝食をとり、少憩してから木材業者數軒を視察訪問した。大體に於て香港と大同小異であるが何となく田舎じみてゐる、こゝにも大江合板のベニヤ板が八達公司、三井等の手で送荷せられ店頭に陳列してゐるのを見かけた、將來は尙ほ相當ベニヤ板等も多く消化せられるであらうと觀測した、業者訪問の途次八達公司の支店である德鱗行へ寄り清談を交へる事が出来た。

斯くして廣東に於ける視察を終へて午後五時廣東發九龍行の汽車に（廣九鐵道 Canton Kowloon Railway）乗るべく驛へ急いだ、發車時刻より十五分程後れて汽車は出發し

た、列車の前には前驅車が走つて鐵路を調べながら行くのである。この鐵道は英人の支配下にあつて全てが英國式である。途中に四川と云ふ處で賭博を公認されてゐて最近禁止になつた小驛があつて宏壯なホテルの廢墟が軒をならべありし日の榮華の名残を止めてゐた、この驛から南方は榮國の租借地であつて鐵道線路も完全して動搖少なく従つて速力も倍加されて氣持よく九龍へ急ぐ、午後八時半九龍驛到着する。早速私共は八達公司の蒙主人初め社員一同を日本料理家の千歲樓へ招待して一夕の清宴を張つたのである。翌六月一日午前中は香港市内見物をなしホテルで八達公司の諸氏と將來の取引上に就て研究懇談を

重ね日支商取引上益する處があつた。午後は金龍で御別れの宴會を開いて名残りの香港の夜を充分エンジョイした、午後十時には秩父丸に乗船、船でも亦大騒ぎをやって午後十一時半頃漸く寢についた。

六月二日早朝六時秩父丸は九龍の波止場を迂る様に出帆して一路上海へ向ふ。午後からは風が出て波が高く流石の秩父丸も動揺が激しい、終日船室に閉ぢ込もつて色々書類の整理や讀書をして暮す、翌三日も海上は荒れ模様で動揺がひどい、船室で暮すより他に方法がない、夜に入ると動揺も鎮まり午後八時頃からトーキーの映寫があり仲々賑やかであつた。四日朝漸く海水が黄色を帯び来り揚子江近しを思はせる、江口が見へ初める頃黄色の濁流は益々濃くなる、上海事變で有名なる吳淞 (Wosung) の砲臺を右手に見つゝ黄浦江 (Wangpoo River) を遊行して午前十一時郵船波止場に安着する。

碼頭には上海野村公司の荒巻氏、池田氏等が出迎へてゐて下さつて御案内で同行の日比野氏と共に萬歳館ホテルに入り旅装を解いた、ホテルで中食後野村公司の自動車で市内各所を見物すべく先づ内上海へ視察に行つた。

上海は衆人承知の國際都市である。市内の殆ど大半は列強の共同租界、佛蘭西租界と占められ支那自身の勢力の及ぶ處は僅かに猫額の地のみである、そこで最近より自分の支配下に置くべき街を建設すべく黄浦江下流の舊上海市に接續する地に先づ道路網を完成し住宅を建築し、電氣、ガス、水道等文化的施設を整へて中央に市政府を置き之を内上海と稱して、市行政はこゝにおいて司掌し、支那官吏は全て強制住居を命ぜられてゐる、舊上海市からは内上海行の定期バスが運轉されてゐる。

市政府の前で著者は豫て聞知してゐた集團結婚式の有様を見る事が出来た、支那では結婚式となると少なくて數千圓多くは數萬圓の費用がかかるのが普通となつてゐた、こうした冗費を省くために十數組或ひは數十組一纏めの結婚式を擧げさせるのであつて、廣東で感じたと同様に支那が將來立派な國家たらんとして遠大な計畫の許に諸施設を行ひつゝあるのだと思つた。然し短期間の爲支那魂までは知る事が出来なかつた。

翌日は上海の郊外西南方龍華 (Longhua) にある龍華寺へ日比野氏、野村公司社員と同行で參詣に出掛けた、上海南站停車場より滬杭甬鐵道 (Shanghai Hangchow Ningpo Railway) で八時半發車、八時四十五分龍華着。龍華寺は立派なお寺で樓門、五重塔、本堂、奥ノ院全てが支那中世期の文化華やかなりし頃の佛を残して古色蒼然たるものがあり、七堂

伽藍の雄大壯美は全く筆紙に盡し難い。堂宇内部を巡拜すれば四天王、十六羅漢、布袋、釋迦牟尼如來等種々の佛像が安置されてあつて、内地の大寺へ參詣するのと同じ敬處な氣持を抱く然し掃除が行きとゞいてゐないから何となくコミコミしてゐるし、日本の僧侶と同じ服裝の坊さんがつきまといつて寄附を強要するし、乞食がゾロゾロつき従つて全く不快で、折角の參詣に來た敬處な氣分も打ちこはされてしまふ。午後五時頃上海ほホテルへ歸る、午後六時には歸朝中の野村公司の社長野村久一氏が來滬されるので出迎へる、野村其氏他の諸氏と歡談を交へ、佛租界にあるキャニド・ルーム (Cano Room 逸國、犬の競争場) へ見物に出掛ける、途中福州路 (Fochow Road) の梅園酒家 (Merry Garden Restaurant "Mayune") で純上海料理 (特式時菜) を食べた、然し吾々日本人はごつても日本料理の淡菜が戀しくなる、長崎出帆以來船中でも香港でも全て西洋料理と支那料理の連續で、勿體無い話しだが支那料理もチョット鼻について來た。キャニド・ルームの盛さは想像外である。甲子園野球場位の廣さで周圍のスタンドは全て有蓋になつてゐて數萬の各國人色とりどりの觀衆が競犬の一擧一投足に血眼になつてゐる。スタンドに腰をおろすとむせかへる様な人いきれと、ものすごいどよめきに、もうポーツとなつてしまふ、

そして「代客買票員」と云ふ狗票 (犬券) の代買をする丁度競馬の豫想屋といった連中が盛んに買票をすゝめに來る。この代客買票員と云ふのは胸にマーク、番號をつけ、制服を着用して、急がしくスタンド内を右往左往してゐる。

第一レースから第九レース迄あつて三百碼、四百四十碼、五百碼の各普通レース (平賽) と五百二十五碼のハードルレース (跳欄) 等が行はれる。著者は三レースを見ただけで外へ出た、素人の事とて買票はしなかつた。逸園外のスタンドの周圍には自動車は何百臺と云ふ程横づけにされてゐる、その種類の雜多なのに驚いた、ボロボロのフォードからロードスター、ロールスロイス等の高級車迄何十種類と云ふ自動車の陳列でこれを見て廻るだけでも仲々面白いと思つた、ホテル迄スピードをスロウにして街景を見物しつゝ歸る。

翌六日早朝起床、日比野氏と色々打合をなし野村公司の支那人社員の家内で杭州 (Hangzhou) へ出掛ける事にした、上海北站停車場を八時二十五分發の急行で杭州へ向ふ

(Shanghai Hangchow Ningpo Line Chinese National Railway 中華民國國有鐵路=

滬杭用 上海 杭州線) 南京行の急行も相前後して出發した。途中松江 (Sungkiang)

嘉興 (Kashi ng) 硤石 (Yehzoh) 長安鎮 (Changant seng) 等の大驛を過れし十二時二

十八分杭州へ到着した。車中日本人はおそらく著者と日比野氏だけであつたらうか支那憲兵、支那巡警がウルサイ位に取調べる。思いなしか彼らの目がキラキラ光る様だ、杭州驛へ着いて再び憲兵、巡警の取調べを受ける。十数名の彼等が吾々を取りまいてダラリと下げた手にピストルを抜き身で持つてゐて物騒である、が度胸は坐つてゐる、微笑を浮べつゝ平然と彼等の取調に應じる、二十分位たつてやっと彼等の圍みから開放された。杭州府は古い都であるので例の城壁で圍まれてゐる、驛から自動車で艮山門と云ふ城門をくぐつて城内へ入ると車はグンとスピードを増した、スロウではどうも危険だと云ふ、どんな古都へ行つても、どんな街でも排日氣分が旺盛で全く困つたものだ、自動車で見物をしてゐるとどこから飛ばしたのか母指頭大の石が車内に投げこまれ案内の野村公司の支那人揚氏の額にあたつて著者の胸をかすめた。見れば案内者の揚君の額からは血が流れてゐるではないか、日本人と見れば無暗に排日氣分が起ると見へる、車窓から眺める街景は古びて雑然としてゐる、苦力の汚い風姿、崩れかけた土塀、グルグルと城内を見物して私達の車は西湖の湖岸岳王廟(岳王の陸墓)の前にピタリと止る。(廟は立派な丁度京都の南禪寺の様な寺)こゝだけは全く地上の樂園である、その風物、遺跡全てが南畫に見る明美な風景である。

私はこゝで杭州並に西湖に就て少し詳しく説明を加へたいと思ふ。

杭州は浙江省の首府であつて人口約百萬を數へる舊都である、杭州が有名であるのは歴史的古都であるばかりでなく西湖がある爲だと云ふ事が出来る、歴史的に見れば古代禹貢の揚州、春秋の越國、隋唐の杭州餘杭郡、吳越の首都西府、南宋の時代には京師臨安府と稱せられ、元朝に至つて杭州と改められ、明清兩朝もこゝを杭州府と名づけて首府とした斯様に歴代の首都乃至要街であつたから歴史的に著はれてゐるのである。特に李太白の

越王勾踐破吳歸 義士還家盡錦衣 宮女如花滿春殿 只今惟有 鵲飛

の如きは吳越時代の華やかなる情景を吟じて餘するところがない。

一段の光彩を與へてゐるのは西湖の佳景である、格別有名なのは西湖を環る十景であつて我が近江八景と云ふが如き所である。即ち

蘇堤春曉、柳浪聞鶯、南屏晚鐘、變峰插雲、花港觀魚、三潭印月、曲院風荷、平湖秋月  
雷峰夕照、斷橋殘雪

等で何れも山紫水明文字通りの景勝で蘇州の風物と俱に中國風光の双壁と稱せられるも宣なるかなと感じた次第である。尙ほ右の外の名所に就て述べれば

雲林寺 靈隱山上にあるので別名を靈隱寺とも呼ばれてゐる、此處は西湖四大寺の一つであつて、咸和年間僧慧理の建立にかゝる寺であるが後荒廢のまゝであつたのを順治年間に至つて僧宏禮が重建したが例の長髮賊の亂に際し堂宇殆どを烏有に歸した、後清朝に至つて再建され現在の莊麗なる伽藍を遺してゐるものである。

吳山 一名城隍山と稱せられ、上城中央部にある、昔明の大祖が、提岳萬百西湖上立馬吳山第一峰と吟つた處で、山上から西湖、府城を俯瞰し、北に江南の沃野、南方に錢塘灣、錢塘江、尚ほ錢塘江を越へて紹興の山嶺を望見することが出来る、之の山上には關帝廟、城隍廟其の外幾多の社廟古刹がある。

孤山放鶴亭 孤山の北麓に在つて、昔し宋の林和靖が鶴を飼つて閑居した處で之の名が遺つてゐるのである、附近には老梅が多く觀梅の名所として有名である。

以上が杭州府、西湖のアウトラインである、吾々一行は黃句車ワゴン(人力車)で右述の各名所を見物した、弘法大師が佛教を研究された遺跡として有名な參天笠へ參拜した時は全く聖師の尊い足跡に頭が下り、身も心も引締る思ひがした、湖岸一周後更にボートで湖を舟遊する、水上から眺めた風景は到底内地では味へぬ別の味はいがある、靄駘模糊として物みな

な全てが春風駘蕩、旅に出て初めてのゆつたりとした氣分にひたる事が出來た。

こつした古代文化の遺跡を持つ支那四億の民が常に奸佞邪智なる奸漢共の爲にまどはされ、排日、抗日に寧日なき有様に對して吾々は義憤なきあたはざる氣概を抱いた。

西湖を横斷して杭州へ戻り十八時二十五分(午後六時二十五分)の一三三等特別急行(快車)で上海へ向ふ、杭州驛では政府要人がこの汽車に乗るらしく物々しい警戒振りであつた、出札所、開札所には各々輕機關銃を据付け、プラットホームにも輕機關銃六門をならべ、兩側に拳銃を持った兵卒が堵列してゐる、吾々はその間を通つて乗車するのであつて内地では到底見られぬ異様な情景であつた。斯くて吾々一行は二十二時三十分(午後十時半)無事上海北站停車場に到着した。

翌七日には支那街(城内)を視察に出掛ける、支那街はいつこも同じ雜然たるものであるが、仲々賑やかである、有名な湖心亭の邊りへ行くと益々賑やかで石橋の上では欄干に鳥籠を置いて鳥を鳴かせて得意氣にしてゐる吞氣屋もあつて面白い風景である。又苦力がそこ、こゝにゴロゴロしてゐる、こつ云つた連中が時々便衣隊等に早變りして掠奪、抗日をやるのだから困つたものだ、支那式の公園を視察したがどうも設備は粗末だし何となく汚ない。城

内の中央邊へ行つたと思ふと俄かに銃聲が聞へた、何事かと自動車之急がせると白晝強盜が或る民家へ押し入り巡警と撃ち合ひをやつてゐると云ふ、流弾などの中つては馬鹿らしいので早速引返すことゝして城内より佛租界にあるジェスフィールド公園（極司非公園 Jessfield Park）へ見物に行く、仲々堂々たる公園で外人連が可なり多人數散策してゐるのを見受けた、公園の縁の芝生續きにセントジョージ大學（聖約翰大學 St. Johns University）の瀟洒たる校舎がそびゑてゐて繪の様に美しい風景である、これより車を急がせて共同租界へ向ふ、前にも述べた様に上海の街の交通機關は種々雑多で自動車の種類の多いこと、すれちがふ車が殆ど異なつた型である。そしてナンバーは租界用と支那街用との二種のものをつけ甚だしいのになると三つもつけてゐるのがある、租界で認められたナンバーで支那街を通るのは許されず、支那街のでも共同租界は通れないと云ふすこぶるやゝこしいシステムである。其他二輛連結の電車、二階付きバス、トロリーバス、ワンガット黄包車、等雜然として国際色濃厚である。

共同租界の裡でも邦人居留者の密集地帯なる北四川路（North Szechuen Road）を通り江灣路（Kang Wan Road）等を経て、陸戦隊本部を左手に見て新公園へ至る、新公園

（Hongkew Park）は同邦居留民の爲にこしらへられたもので園庭は日本式の香り高く仲々立派である、それより上海神社へ詣でて國連の隆昌、居留民同邦諸賢の安住、發展を祈り更に招魂社にて前回の上海事變戰歿將士の英靈を慰めた次第である、上海陸戦隊本部の堂々たる威容に接して無上の心強さを感じ思はず頭が下る、こゝに吾が忠勇無双の將兵が備へよ常に”鐵壁の守りを固めてゐるのである。

材木業について少し語ろう。

舊城内を視察の途次私達は黃浦江岸に竝ぶ支那人材木商店を訪問したが、ベニヤ板を取扱ふ店は僅かに二、三店であつて原木商が主である。總じて香港の材木業者の状態と大同小異である。江岸にはジャンクがついてゐて盛んに木材が水揚げされてゐる、我が國特に臺灣の業者と馴染深い福州の杉丸太とか松丸太類が取扱數量の大部分を占めて河岸の土場に多量積まれてゐる、その積方は丸太の長さに應じて兩頭肩間に杭木を打ち立てゝその間に極めて順序よく積上げるのであつて仲々見事である、そして丸太の末口には白ペンキで寸銘が凡てに亘つて之又綺麗に書き入れられてゐる。ベニヤ板に就ては未だ幼稚であつて日本品と北支天津及び上海のジャンタイの製品が取扱はれてゐるに過ぎないが將來は相當

注目すべき市場性を持つに至るであろうと観察した。

斯くして私共一行は八日夜ヨーロッパから寄港の郵船榛名丸に乗船し、翌九日早朝する様に黄浦江を南下して東支那海へ出て海上二日の後十一日午後七時神戸港へ安着したのである。

出迎への日神海運の辻村氏、大阪滞在中の周一郎、名古屋本店より横井光儀君等各位と共に清談を交へ、その夜の上り急行で名古屋へ向ひ、十二日午前一時四十分無事名古屋驛着、本店及宅より出迎への諸君と驛頭で歡談を盡して、丁度二十一日目久しぶりに我が家の疊の上へ思ふ存分手足を伸した。

之の旅で著者は將來どうしても北支は別として中、南支各方面へ向つて木材及ベニヤ板類の販路を獲得しなければならぬと考へた、支那は全く大きな消費市場であるが木材の合理的消化と云ふ點では時代に遅れてゐると思つた、又日本人の經濟的勢力も上海迄でそれから南へ行くと英人、佛人の勢力が強く日本人の經濟的地位は英、佛人のそれに比して可なり低いと云ふ事を実際に見聞して吾々は木材業を通じて今後之の方面へ一層の努力を傾注すべきだと深く心に銘した次第である。

終りに著者の店に従業する諸君は業務の豫暇を見ては語學（英語、支那語）の勉強をなし、他日こうした大きな消費地へ發展出来る様、その素地を今から造られん事を望んで止まない。



## 巻後に題す

にぶい音を叢に残して細い光芒一條、中空に舞ひ上ると見る間に、あれ見よ五彩の花瓣が一際美しい色合いを夜空に浮かばせる。

祭囃子のふゑ、たいこの音が初夏の爽ひ風に送られて浴衣の袖をゆすぶる。賑かな裡に早や夜も更けて、月光は冴え渡り、やがてしゞまな夜蔭に一切が溶け込んで行く。

夏祭りも全く終つてあたりがひっそりとなつた三更、私は先程から机に向つたまゝ、貧しい灯の下で、主人の回顧録を幾度か讀みかへしてゐる。

口述をそのまゝ筆記した初稿を清書し、點綴して仕上げてはみたものゝ、拙ない筆の運びに今更ながら愛想が盡きる。

主人の過去は生やさしい形容詞では到底表はず事の出来ない眞摯な人間の苦闘史であつて私の菲才が却つてその尊い光輝を傷けてさへゐる。しかし拙文ではあるが主人のありのまゝの、裸形の姿だけでも傳へる事が出来たかと思つてゐる次第で、それが私自身の淺學秃筆に對するせめてもの自己諦觀である。

人が此の世に生を享けた時から、既に試練の道が待つてゐる、誰れでも通らなければならぬ苦勞の道を、主人は主人一流の生き方で進んで來られたのであつて、特に最近の如き益々元氣に社会的活動を続けられて私どもに尊い示唆と得難い教訓を垂れてゐられる。

私共若い者は今後益々勉強しなければならぬ、苦勞をしなければならぬ、人生を樂しいものと觀ずるも、疎ましきものと想ふも、凡ては主觀の働きの定めるものであるが、私共はこの書を人生處世の教科書として、尚ほ主人の人生五十からの光輝ある御奮闘振りを模範として、又主人のご指導に依つてより良き生き甲斐のある毎日を送りたいと考へる。

尚ほ本書中には年代別に我が國の政治經濟諸情勢の推移について縷述して附記としたが何等かの参考になれば誠に有難いと思ふ。

終りに今回の編纂に當り畏兄神戸一氏より並々ならぬ御推助を受けたるを茲に明らかにする次第である。

昭和十二年六月

鬼頭利之

最後に本書刊行の由來に就て一言申し添へたいと思ふ。

元來著者の考へとしては過去の色々な思ひ出を折に觸れ、時に觸れて書き散らしてあつた反古を整理し、それを纏めて、精々謄寫版の程度で、近親、或ひは知友に頌ちたいと云ふ目的であつたが、編者が編纂を續ける裡に不識不識に編者自身に慾が出たものが遂に活版で印刷し立派に製本迄して刊行する事となつたのである。

従つて誠に不備な點が多く、内容が外觀に添はぬ憾が深い、之の點に就て讀者諸士は右述の理由を以て諒とせられたい。